

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第139集

しま ざき い せき
島 崎 遺 跡
でんばうじほんごういせき
伝法寺本郷遺跡
なかのこうきたいせき
中之郷北遺跡

2006

(財)愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター



卷頭写真 1 遺跡遠景1

1 : 島崎道跡と伝法寺本郷道跡（南上空から木曽川方面を臨む）
2 : 伝法寺本郷道跡と宇福寺遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）



巻頭写真2 遺跡遠景2

1：宇福寺遺跡と中之郷北遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）

2：中之郷北遺跡と朝日遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）



1

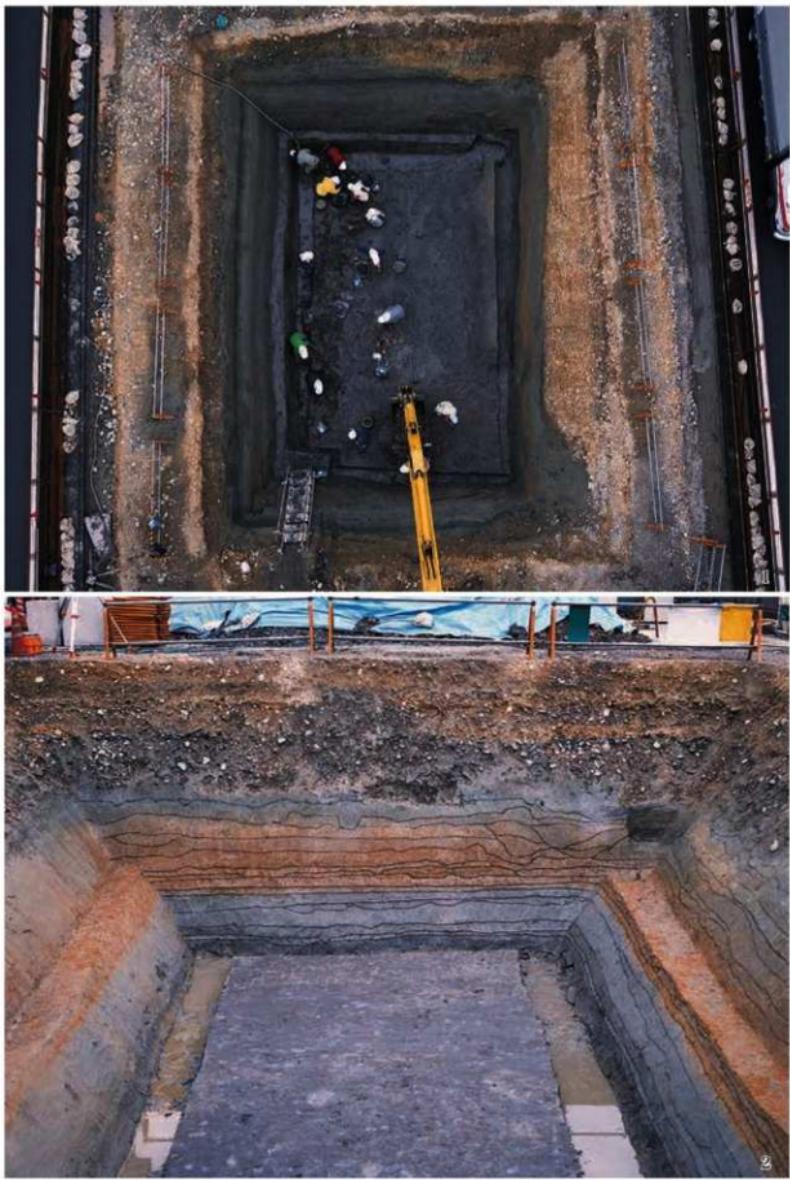


2

卷頭写真3 伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物

1 : C区小区画水田（古墳時代に帰属すると推定）

2 : D区古代出土遺物（折戸10号窯式期の典型的な組成、金属製品生産関連遺物が伴う）



巻頭写真4 中之郷北遺跡の調査

1 : A区NR01の調査（南北に縱断する河川と杭列、7世紀に急速に埋没）
2 : C区堆積状況（現地表からV層までの堆積状況）



巻頭写真 5 中之郷北遺跡の遺構

1 : HIKSU04全景 (IV d 戸で検出、松河戸 1式の良好な一括資料が出土)

2 : I区古墳時代中期～古代竪穴住居群 (5世紀前半、5世紀後半、7世紀前半、8世紀後半の竪穴住居が重複)



1



2

巻頭写真6 中之郷北遺跡の遺物 1

1 : 各調査区IV b・IV a層出土遺物（松河戸Ⅰ式後半～松河戸Ⅱ式前半の土器に鍛冶関連遺物が伴出）

2 : H区IV d・IV c層出土土器（松河戸Ⅰ式前半の良好な層位資料）



1



2

巻頭写真7 中之郷北遺跡の遺物2

1：I区から出土した古墳時代中期の土器（松戸戸II式～宇田II式の資料）

2：古代の出土遺物（D・I区から出土した8世紀の資料）



卷頭写真8 宇福寺遺跡の土器

立会調査時に採集した集合資料。月影式の器台、箱清水式の壺、線刻土器、大型壺など特徴的な個体が多い。

序

濃尾平野を南北に縱断する国道 22 号線は、愛知と岐阜をつなぐ幹線道路として近代以降重要な位置を占めてきました。また過去においても美濃街道や岐阜街道などとして、尾張と美濃との関係だけではなく、この地方全域にわたっての物資や情報の主要動脈としての役割を担ってきました。

今回これらの役割をさらに推し進める目的で、名古屋高速 3 号線（県道高速清州一宮線）の建設が行われることとなりました。それを受け私ども（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県教育委員会の委託事業として、平成 12 年度には島崎遺跡、平成 13 年度には伝法寺本郷遺跡と中之郷北遺跡の発掘調査を行ってまいりました。一宮市から西春町までという広範囲での調査ではありましたが、島崎遺跡では中世の集落が、伝法寺本郷遺跡では古代から中世の集落・水田が、中之郷北遺跡では古墳時代の集落が見つかるとともに、濃尾平野における遺跡の形成過程や地形環境の変化が明らかになりました。今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、地元住民の皆様をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成 18 年 3 月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 古池 庸男

例　　言

1. 本書は、愛知県一宮市に所在する島崎遺跡（県遺跡番号 02107：愛知県教育委員会 1994『愛知県遺跡地図（1）尾張地区』）、伝法寺本郷遺跡（県遺跡番号 02108）、愛知県西春日井郡西春町中之郷北遺跡（県遺跡番号 19016）の発掘調査報告書で、西春日井郡西春町・一宮市宇福寺遺跡（県遺跡番号 19017・02114）の立会調査概要も同時に収録した。
2. 発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設にかかる事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財團法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財團法人愛知県教育・スポーツ振興財團愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。なお、発掘調査にあたって、株式会社四門（島崎遺跡）、リメックス株式会社（当時、現ティケイトレード株式会社、伝法寺本郷遺跡）、佐伯建設工業株式会社（伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡）より支援を受けた。
3. 調査期間と調査面積、調査担当者は、別表に示した（I—第2章—第2表）。
4. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター　名古屋高速道路公社
一宮市教育委員会　西春町教育委員会
5. 報告書作成にかかる整理作業には、次の方々の助力を得た。

河合明美・安達崇子（調査研究補助員）　伊藤弘江　黒川陽子　時田典子　水野留香（整理補助員）
なお、出土遺物の写真撮影は、金子和久氏（写真工房・遊）、福岡栄氏（スタジオ・ビュア）に委託した。
6. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏をはじめ、多くの方々からご指導、ご協力を得た。

青木一男　青木勘時　岩原剛　加納俊介　小池香津江　城ヶ谷和広　鈴木とよ江　田口一郎　土本典生
原田幹　藤澤良祐　北條獻示　森泰通　若狭徹
7. 本書の執筆は、I、III—第1～3・5章、IV—第1～3章・第4章（8）～（10）、第5章、Vを早野浩二（本センター調査研究員）、IIを宮腰健司（本センター主査）、III—第4章（1）、IV—第4章（1）を山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）、III—第4章（2）、IV—第4章（6）を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、III—第4章（3）を鶴剣雅弘（本センター調査研究員）、IV—第4章（2）を馬場健司・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）、（3）をパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、（4）を藤根久・長友純子（株式会社パレオ・ラボ）、（5）を小村美代子（株式会社パレオ・ラボ）、（7）を森勇一（愛知県立津島東高校）が担当した。
8. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。

S K : 土坑、S E : 井戸、S B : 建物、S A : 櫛、S T : 耕作地（水田・畑地）
S D : 溝、S U : 遺物集積、N R : 自然流路、S X : その他不明遺構
9. 発掘調査および本書で使用した座標は、国土座標第VII系に準拠した。ただし、旧標準の「日本測地系」で表記している。
10. 本書で使用する土層の色調については、「新版標準土色帳」を参考に記述した。
11. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、財團法人愛知県教育・スポーツ振興財團愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24）で保管している。
13. 本書の編集は I、III、IV、V を早野浩二、II を宮腰健司が担当した。

目 次

卷頭写真

I 前章.....	1
第1章 調査の経緯	2
第2章 調査の経過	4
第3章 周辺の環境	6
II 島崎遺跡	11
第1章 遺跡の環境	12
第2章 調査の概要	12
第3章 遺構・遺物	15
第4章 まとめ	49
III 伝法寺本郷遺跡	55
第1章 調査の概要	56
第2章 基本層序と検出遺構	58
第3章 遺構と遺物	60
第4章 分析・考察	92
第5章 まとめ	104
IV 中之郷北遺跡	107
第1章 調査の概要	108
第2章 基本層序と検出遺構	110
第3章 遺構と遺物	114
第4章 分析・考察	220
第5章 まとめ	294
V 宇福寺遺跡の調査.....	299
第1章 調査の経緯	300
第2章 立会調査の概要	304
第3章 採集遺物の概要	310
第4章 考察	331
第5章 まとめ	348

報告書抄録

卷頭図版目次

卷頭写真1 遺跡遠景1

卷頭写真2 遺跡遠景2

卷頭写真3 伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物

卷頭写真4 中之郷北遺跡の調査

卷頭写真5 中之郷北遺跡の遺構

卷頭写真6 中之郷北遺跡の遺物1

卷頭写真7 中之郷北遺跡の遺物2

卷頭写真8 宇福寺遺跡の土器

挿図目次

〈I 前章〉

第1図 遺跡の位置

第2図 試掘地点と調査遺跡

第3図 標現山遺跡の繩文土器

第4図 伝西大門遺跡の須恵器

第5図 周辺の遺跡分布

第6図 遺跡周辺の地形

〈II 島崎遺跡〉

第7図 遺跡周辺地形図

第8図 調査区位置図

第9図 A区 SD04・05・06・07 土層断面

第10図 A区第1面遺構図

第11図 A区第2面遺構図

第12図 A区東壁・南壁上層断面図

第13図 A区出土遺物実測図

第14図 B区 SX01 土層断面

第15図 B区第1面遺構図

第16図 B区第2面遺構図

第17図 B区東壁・南壁上層断面図

第18図 B区出土遺物実測図

第19図 C区第1面遺構図

第20図 C区第2面遺構図

第21図 C区東壁・南壁上層断面図

第22図 D区第2面遺構図

第23図 D区東壁・北壁上層断面図

第24図 D区 SK14、SK09・47・51・52 土層断面

第25図 D区 SK30、SK05、SK34 土層断面

第26図 D区出土遺物実測図

第27図 E区 SK04、SK05 土層断面

第28図 E区第1面遺構図

第29図 E区第2面遺構図

第30図 E区東壁・北壁上層断面図

第31図 E区出土遺物実測図

第32図 F区 SK51・52 土層断面

第33図 F区第1面遺構図

第34図 F区第2面遺構図

第35図 F区東壁・北壁上層断面図

第36図 F区出土銭貨拓本・X線写真

第37図 F区出土遺物実測図

第38図 G区出土遺物実測図

第39図 G区第1面遺構図

第40図 G区第2面遺構図

第41図 G区西壁・北壁上層断面図

第42図 H区出土遺物実測図

第43図 H区第2面遺構図

第44図 H区西壁・南壁上層断面図

第45図 I区第1面遺構図

第46図 I区第2面遺構図

第47図 I区第3面遺構図

第48図 I区東壁・北壁上層断面図

第49図 I区 SD01 土層断面

第50図 I区 SD02・03 土層断面

第51図 I区出土遺物実測図1

第52図 I区出土遺物実測図2

第53図 J区第1面遺構図

第54図 J区第2面遺構図

第55図 J区東壁・南壁上層断面図

第56図 J区出土遺物実測図

第57図 明治17年地籍図

第58図 加工円盤分布図

- 第 59 図 島崎遺跡主要遺構配置図
〈III 伝法寺本郷遺跡〉
第 60 図 試掘調査の所見
第 61 図 伝法寺本郷遺跡調査区配置図
第 62 図 伝法寺本郷遺跡検出遺構の概要
第 63 図 伝法寺本郷遺跡調査区土層断面柱状図
第 64 図 A 区東壁土層断面図
第 65 図 A 区下面遺構図
第 66 図 A 区古代出土遺物実測図
第 67 図 A 区遺構土層断面図
第 68 図 A 区上面遺構図
第 69 図 A 区中世～近世出土遺物実測図
第 70 図 A 区出土金属製品生産関連遺物実測図
第 71 図 B 区東壁土層断面図
第 72 図 B 区遺構土層断面図
第 73 図 B 区遺構図
第 74 図 B 区出土遺物実測図
第 75 図 C 区東壁土層断面図
第 76 図 C 区遺構図
第 77 図 C 区出土遺物実測図
第 78 図 D 区東壁土層断面図
第 79 図 D 区遺構図
第 80 図 D 区 SB01 遺構図・遺物出土状態図
第 81 図 D 区 SB02 遺物出土状態図
第 82 図 D 区 SB02 土層断面図
第 83 図 D 区 SK02 遺構図
第 84 図 D 区出土遺物実測図
第 85 図 八王子遺跡出土鉄型（内型）実測図
第 86 図 D 区出土金属製品生産関連遺物実測図
第 87 図 E 区遺構図
第 88 図 E 区東壁土層断面図
第 89 図 E 区出土遺物実測図
第 90 図 F 区西壁土層断面図
第 91 図 F 区出土遺物実測図
第 92 図 F 区遺構図
第 93 図 G 区東壁土層断面図
第 94 図 G 区下面遺構図
第 95 図 G 区上面遺構図
第 96 図 G 区出土遺物実測図
第 97 図 伝法寺本郷遺跡調査区と地籍図の照合
第 98 図 丹羽郡伝法寺村絵図
第 99 図 春日井郡宇福寺村絵図
第 100 図 伝法寺本郷遺跡の景観復原
〈IV 中之郷北遺跡〉
第 101 図 試掘調査の所見
第 102 図 中之郷北遺跡調査区配置図
第 103 図 中之郷北遺跡検出遺構の概要
第 104 図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 1
第 105 図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 2
第 106 図 A 区東壁土層断面図
第 107 図 A 区 NR01 遺構図
第 108 図 A 区 NR01- 3 層杭列遺構図 1
第 109 図 A 区 NR01- 3 層杭列遺構図 2
第 110 図 A 区 NR01 遺物出土状況
第 111 図 A 区 NR01-4 層出土遺物実測図
第 112 図 A 区 NR01- 3 層出土遺物実測図
第 113 図 A 区 NR01- 3 層出土木製品実測図
第 114 図 A 区 I 層・SD04 出土遺物実測図
第 115 図 A 区中世～近世遺構図
第 116 図 B a 区東壁土層断面図
第 117 図 B a 区 NR03・01 遺構図
第 118 図 B a 区中世～近世遺構図
第 119 図 B a 区出土遺物実測図
第 120 図 B b 区古墳時代初頭遺構図
第 121 図 B b 区東壁土層断面図
第 122 図 B b 区古墳時代中期遺構図
第 123 図 B b 区 SU01 遺物出土状態図
第 124 図 B b 区出土遺物実測図
第 125 図 C 区西壁土層断面図
第 126 図 C 区古墳時代初頭遺構図
第 127 図 C 区古代遺構図
第 128 図 C 区近世遺構図 1
第 129 図 C 区出土遺物実測図
第 130 図 D 区西壁土層断面図
第 131 図 D 区古墳時代初頭・古墳時代後期遺構図
第 132 図 D 区古墳時代出土遺物実測図
第 133 図 D 区古代遺構図
第 134 図 D 区 SB03 遺構図

第 135 図	D 区 SB03 罐遺構図	第 174 図	I 区 西壁土層断面図
第 136 図	D 区 SB03 支脚	第 175 図	I 区 古墳時代中期遺構図
第 137 図	D 区 SB01・02 遺構図	第 176 図	I 区 古墳時代中期～古代遺構図
第 138 図	D 区 SB04 遺構図	第 177 図	I 区 SB09・03 遺構図
第 139 図	D 区 SB05 遺構図	第 178 図	I 区 SB10 遺構図／遺物出土状態図
第 140 図	D 区 SB06・07・08 遺構図	第 179 図	I 区 SB07 遺物出土状態図
第 141 図	D 区 中世遺構図	第 180 図	I 区 SK54・80 遺物出土状態図
第 142 図	D 区 古代出土遺物実測図	第 181 図	I 区 古墳時代出土遺物実測図 1
第 143 図	E 区 西壁土層断面図	第 182 図	I 区 古墳時代出土遺物実測図 2
第 144 図	E 区 古代遺構図	第 183 図	I 区 SB08・06 遺構図
第 145 図	E 区 IV 層・II 層出土遺物実測図	第 184 図	I 区 SB05・04・02 遺構図
第 146 図	E 区 出土石製品実測図	第 185 図	I 区 SB02 罐遺構図
第 147 図	E 区 中世～近世遺構図	第 186 図	I 区 SB01 遺構図
第 148 図	F 区 西壁土層断面図	第 187 図	I 区 古墳時代中期～古代遺構変遷図
第 149 図	F 区 古代～中世遺構図	第 188 図	I 区 古代出土遺物実測図 1
第 150 図	F 区 近世遺構図	第 189 図	I 区 古代出土遺物実測図 2
第 151 図	F 区 出土遺物実測図	第 190 図	I 区 古代出土遺物実測図 3
第 152 図	F 区 北壁土層断面図	第 191 図	I 区 古代出土遺物実測図 4
第 153 図	D・E・F 区 古墳時代水田遺構全体図	第 192 図	I 区 中世遺構図
第 154 図	D・E・F 区 古墳時代水田遺構図	第 193 図	I 区 中世出土遺物実測図
第 155 図	G 区 西壁土層断面図	第 194 図	I 区 鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図
第 156 図	G 区 古墳時代中期～中世遺構図	第 195 図	J 区 東壁土層断面図
第 157 図	G 区 近世遺構図	第 196 図	J 区 古代遺構図
第 158 図	G 区 出土遺物実測図	第 197 図	J 区 近世～近代遺構図
第 159 図	G 区 出土金属製品実測図	第 198 図	J 区 出土遺物実測図
第 160 図	H 区 西壁土層断面図	第 199 図	J 区 出土石製品・金属製品実測図
第 161 図	H 区 古墳時代初頭遺構図	第 200 図	K 区 西壁土層断面図
第 162 図	H 区 SU04 遺構図・遺物出土状態図	第 201 図	K 区 近世～近代遺構図
第 163 図	H 区 SU01～03 遺構図・遺物出土状態図	第 202 図	K 区 出土遺物実測図
第 164 図	H 区 SU04・V 層出土遺物実測図	第 203 図	調査地点の順序および分析層準
第 165 図	H 区 IVc 層・IVb 層・SU01～03 出土遺物実測図	第 204 図	B a・B b 区の植物珪酸体含量
第 166 図	SD44 土層断面図	第 205 図	D・E 区の植物珪酸体含量
第 167 図	H 区 古代遺構図	第 206 図	F・G 区の植物珪酸体含量
第 168 図	H 区 中世遺構図	第 207 図	H・K 区の植物珪酸体含量
第 169 図	H 区 近世遺構図	第 208 図	測定試料実測図
第 170 図	H 区 近代遺構図	第 209 図	胎土分析試料実測図
第 171 図	H 区 古墳時代後期～古代出土遺物実測図	第 210 図	赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図
第 172 図	H 区 I 層・中世～近代出土遺物実測図	第 211 図	月輪手遺跡土坑
第 173 図	H 区 出土石製品・鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図	第 212 図	H 区 IV 層中の土器群包含状況

- 第 213 図 H 区 IV 層出土土器群の組成
- 第 214 図 中之郷北遺跡 IV 層層位資料と月闌手遺跡土坑資料との対比
- 第 215 図 S 字甕口縁部形状の比較
- 第 216 図 高杯杯部径径と径深比の比較
- 第 217 図 松河戸遺跡 SK201 出土土器
- 第 218 図 I 区出土土器の変遷
- 第 219 図 八王子遺跡 NR01 最上層出土土器
- 第 220 図 朝日遺跡新資料館地点出土土器
- 第 221 図 朝日遺跡各地点出土土器
- 第 222 図 鎌治関連遺物出土遺跡の分布
- 第 223 図 中之郷北遺跡の輪羽口と関連資料
- 第 224 図 福田遺跡の鎌治関連遺物と出土遺構
- 第 225 図 法海寺遺跡の鎌治関連遺物と関連資料
- 第 226 図 吉田奥遺跡 3 号住居跡と出土遺物
- 第 227 図 門間沼遺跡の鎌治関連遺物と関連資料
- 第 228 図 大県遺跡の輪羽口
- 第 229 図 石川条里遺跡の輪羽口
- 第 230 図 輪羽口の形態の変遷
- 第 231 図 尾張地域における古墳時代中期の輪羽口の変遷
- 第 232 図 四反畝遺跡と大県遺跡の韓式系土器甕
- 第 233 図 権現山 1 号墳の石室
- 第 234 図 中之郷北遺跡と大瀬遺跡の管状土鍤
- 第 235 図 飯守神遺跡の「美濃」刻印須恵器
- 第 236 図 美濃須衛産須恵器の諸例
- 第 237 図 三河型甕の諸例と関連資料
- 第 238 図 地盤調査結果図
- 第 239 図 中之郷北遺跡の景観復原
- 第 240 図 中之郷北遺跡調査区と地籍図の照合
- 第 241 図 春日井郡中之郷村絵図
- （V 宇福寺遺跡の調査）
- 第 242 図 試掘調査の所見
- 第 243 図 宇福寺遺跡立会調査工区一北半
- 第 244 図 宇福寺遺跡立会調査工区一南半
- 第 245 図 P 83 工区土器分布状況模式図
- 第 246 図 P 82 工区土器分布状況模式図
- 第 247 図 P 80 工区土器分布状況模式図
- 第 248 図 調査区土層断面柱状図 1
- 第 249 図 調査区土層断面柱状図 2
- 第 250 図 P 86 工区採集遺物実測図
- 第 251 図 P 84 工区採集遺物実測図
- 第 252 図 P 83 工区採集遺物実測図 1
- 第 253 図 P 83 工区採集遺物実測図 2
- 第 254 図 P 83 工区採集遺物実測図 3
- 第 255 図 P 83 工区採集遺物実測図 4
- 第 256 図 P 83 工区採集遺物実測図 5
- 第 257 図 P 83 工区採集遺物実測図 6
- 第 258 図 P 82 工区採集遺物実測図 1
- 第 259 図 P 82 工区採集遺物実測図 2
- 第 260 図 P 82 工区採集遺物実測図 3
- 第 261 図 P 81 工区採集遺物実測図
- 第 262 図 P 80 工区採集遺物実測図 1
- 第 263 図 P 80 工区採集遺物実測図 2
- 第 264 図 廊間 I 式 0 ~ 1 段階の土器
- 第 265 図 宇福寺遺跡器種組成（遺跡統計）
- 第 266 図 宇福寺遺跡器種組成（各工区・遺構）
- 第 267 図 関連遺跡分布図
- 第 268 図 箱清水式の主要器種
- 第 269 図 宇福寺遺跡と小森遺跡の箱清水式土器
- 第 270 図 箱清水式土器様式図における東海系土器
- 第 271 図 北陸系土器と関連資料
- 第 272 図 布留式土器と関連資料
- 第 273 図 受口甕と S 字甕 0 類
- 第 274 図 朝日遺跡の布留式甕
- 第 275 図 歴内における東海系と山陰系の共存
- 第 276 図 宇福寺遺跡と元屋敷遺跡の土器に施された線刻
- 第 277 図 宇福寺遺跡の範囲と周辺の遺跡

写真目次

〈I 前章〉

写 真 1 遺跡の現況

写 真 2 馬見塚遺跡

写 真 3 椿荷山古墳と高塚古墳

写 真 4 現況の島畠

〈II 島崎遺跡〉

写 真 5 調査区の位置

写 真 6 調査区遠景

写 真 7 調査風景

写 真 8 A区

写 真 9 B区

写 真 10 C区

写 真 11 D区

写 真 12 E区

写 真 13 F区

写 真 14 G区

写 真 15 H区

写 真 16 I区第1面

写 真 17 I区第2面

写 真 18 I区第3面

写 真 19 J区

写 真 20 各調査区出土遺物 1

写 真 21 各調査区出土遺物 2

〈III 伝法寺本郷遺跡〉

写 真 22 伝法寺本郷遺跡調査風景

写 真 23 A区NR01

写 真 24 A区上面遺構

写 真 25 B区NR01/上面遺構

写 真 26 C区下面/上面遺構

写 真 27 D区遺物出土状況

写 真 28 D区古代遺構

写 真 29 D区出土金属製品生産関連遺物

写 真 30 E~G区全景/E区下面/上面遺構全景

写 真 31 F区下面/上面遺構

写 真 32 G区下面/上面遺構全景

写 真 33 各調査区出土遺物

写 真 34 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 1

写 真 35 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 2

写 真 36 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 3

〈IV 中之郷北遺跡〉

写 真 37 中之郷北遺跡調査風景

写 真 38 A区NR01

写 真 39 A区出土遺物

写 真 40 A区出土木製品

写 真 41 A区NR01遺物出土状況

写 真 42 A区土層断面/中世~近世遺構

写 真 43 B a 区土層断面/NR01/中世~近世遺構

写 真 44 B b 区古墳時代初頭遺構/SU01

写 真 45 古墳時代初頭遺構

写 真 46 C区西壁土層断面

写 真 47 C区古代/近世遺構全景

写 真 48 B a · B b · C区出土遺物

写 真 49 D区古墳時代初頭/古墳時代後期遺構全景

写 真 50 D区IV b 層遺物出土状況

写 真 51 D区古代/中世遺構

写 真 52 D区出土遺物

写 真 53 E区古墳時代/古代/中世~近世遺構

写 真 54 D区古墳時代水田全景

写 真 55 F区古墳時代/古代~中世遺構

写 真 56 G区NR02/NR01/近世遺構/土層断面

写 真 57 G区出土金属製品X線写真

写 真 58 E · F · G区出土遺物

写 真 59 H区古墳時代初頭/前期遺構

写 真 60 H区古墳時代中期遺構

写 真 61 H区古代/中世/近世/近代遺構全景

写 真 62 H区出土遺物 1

写 真 63 H区出土遺物 2

写 真 64 I区NR01全景

写 真 65 I区古墳時代中期~古代遺構全景

写 真 66 I区I期竪穴住居

写 真 67 I区2期竪穴住居

写 真 68 I区土坑遺物出土状況

写 真 69 I区古墳時代(1 · 2期)出土遺物

写 真 70 I区3期竪穴住居

- 写真 71 I 区 4 期竪穴住居 1
 写真 72 I 区 4 期竪穴住居 2
 写真 73 I 区中世遺構全景
 写真 74 I 区古代・中世出土遺物
 写真 75 鉄製品・金属製品生産関連遺物・石製品
 写真 76 J 区東壁土層断面
 写真 77 J 区古代／近世遺構全景
 写真 78 J 区中世～近代遺構全景
 写真 79 K 区近世～近代遺構／土層断面
 写真 80 植物珪酸体顕微鏡写真 1
 写真 81 植物珪酸体顕微鏡写真 2
 写真 82 土器薄片の顕微鏡写真
 写真 83 赤色顔料の付着状況
 写真 84 測定に使用した赤色顔料
 写真 85 出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真 1
 写真 86 出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真 2
 写真 87 出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真 3
 写真 88 出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真 4
 写真 89 出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真 5
 写真 90 出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真 6
 写真 91 福田遺跡の轆羽口先端部分
 写真 92 法海寺遺跡の轆羽口
 〈V 宇福寺遺跡の調査〉
 写真 93 宇福寺遺跡調査風景
 写真 94 P83 工区土層断面／遺物出土状況
 写真 95 P82 工区土層断面
 写真 96 P81 / P80 工区土層断面
 写真 97 布留式高杯（5）の製作技法
 写真 98 P83 工区採集遺物 1
 写真 99 P83 工区採集遺物 2
 写真 100 P83 工区採集遺物 3
 写真 101 P82 工区採集遺物 1
 写真 102 P82 工区採集遺物 2
 写真 103 P80 工区採集遺物
 写真 104 脚部のキザミ（門間沼遺跡）

挿表目次

- 〈I 前章〉
 第 1 表 調査工程表
 〈II 島崎遺跡〉
 第 2 表 F 区出土銭貨一覧表
 〈III 伝法寺本郷遺跡〉
 第 3 表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
 第 4 表 A 区 NR01 出土自然木樹種同定結果一覧
 〈IV 中之郷北遺跡〉
 第 5 表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
 第 6 表 分析試料一覧
 第 7 表 B a・B b 区の植物珪酸体分析結果
 第 8 表 D・E 区の植物珪酸体分析結果
 第 9 表 F・G 区の植物珪酸体分析結果
 第 10 表 H・K 区の植物珪酸体分析結果
 第 11 表 測定試料及び処理
- 第 12 表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
 第 13 表 出土土器の詳細とその肉眼的特徴
 第 14 表 出土土器の粘土と砂粒の特徴
 第 15 表 胎土中の岩石片の分類と組み合わせ
 第 16 表 赤色顔料から検出された元素と顔料の種類
 第 17 表 出土木製品・木材の樹種同定結果一覧
 第 18 表 形状・層位ごとの検出樹種集計
 第 19 表 中之郷北遺跡から産出した昆虫化石
 第 20 表 H 区 IV 層出土土器群の組成
 第 21 表 桧河戸・宇田式土器編年と放射性炭素年代測定値との対比
 第 22 表 錫治関連遺物一覧表
 〈V 宇福寺遺跡の調査〉
 第 23 表 編年対照表
 第 24 表 宇福寺遺跡器種組成表（遺跡統計）
 第 25 表 宇福寺遺跡器種組成表（各工区・遺構）

I 前章

第1章 調査の経緯

遺跡

島崎遺跡は一宮市島崎2丁目ほか、伝法寺本郷は一宮市丹陽町伝法寺、中之郷北遺跡は西春日井郡西春町中之郷にそれぞれ所在する（第1図）。遺跡周囲には、宅地、工業地、商業地が密集し、耕作地が点在する大都市近郊に特徴的な景観が広がっている。

名古屋高速3号線

これらの3遺跡は、名古屋高速3号線（県道高速清洲一宮線）建設計画に伴う埋蔵文化財の有無照会に応じて、平成10年8～10月に愛知県教育委員会文化財課（当時、現愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室）と愛知県埋蔵文化財調査センターが一般国道22号線の周辺において試掘調査を実施した結果、新たに発見、登録された遺跡である。

試掘調査

名古屋高速3号線建設にかかる試掘調査は、全長約8kmの予定工区周辺に、A-1からN-2までの28地点を設置し（第2図）、中世陶器を含む層を確認したK-2を含む周辺地区、H-2・H-3を含む地区、古墳時代の遺構と遺物を確認したE-2を含む周辺地区について、発掘調査が必要であることを回答した。なお、L-1・L-2を含む地区、J-1・J-2を含む地区、H-1を含む地区、F-1・G-1を含む地区、C-1・C-2を含む地区については、試掘調査において遺構が確認されず、包含層が希薄であったことから、立会調査による対応とし、その他の地区的周辺は、遺構と遺物が確認されなかったことから、保護法上支障がないものと判断された。試掘調査によって所在を確認した埋蔵文化財は、該当教育委員会との協議によって、K-2周囲を島崎遺跡（遺跡番号02107）、H-2・H-3周囲を伝法寺本郷遺跡（遺跡番号02108）、E-2周囲を中之郷北遺跡（遺跡番号19016）として決定し、新発見の遺跡として新規に登録した。

宇福寺遺跡

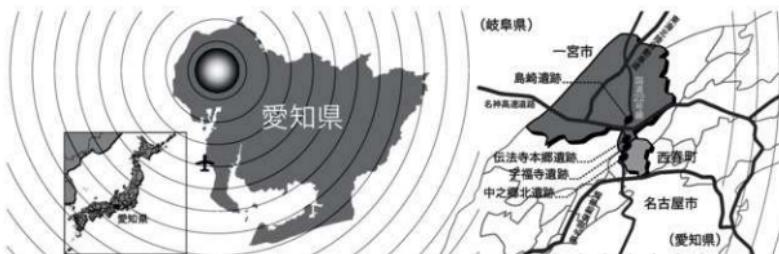
宇福寺遺跡（西春日井郡西春町宇福寺他、遺跡番号19017・02114）は、立会調査が必要とされたH-1、F-1・G-1を含む地区的工事掘削時に古墳時代の遺物が大量に発見されたことを受け、新規に登録された遺跡である。

発掘調査

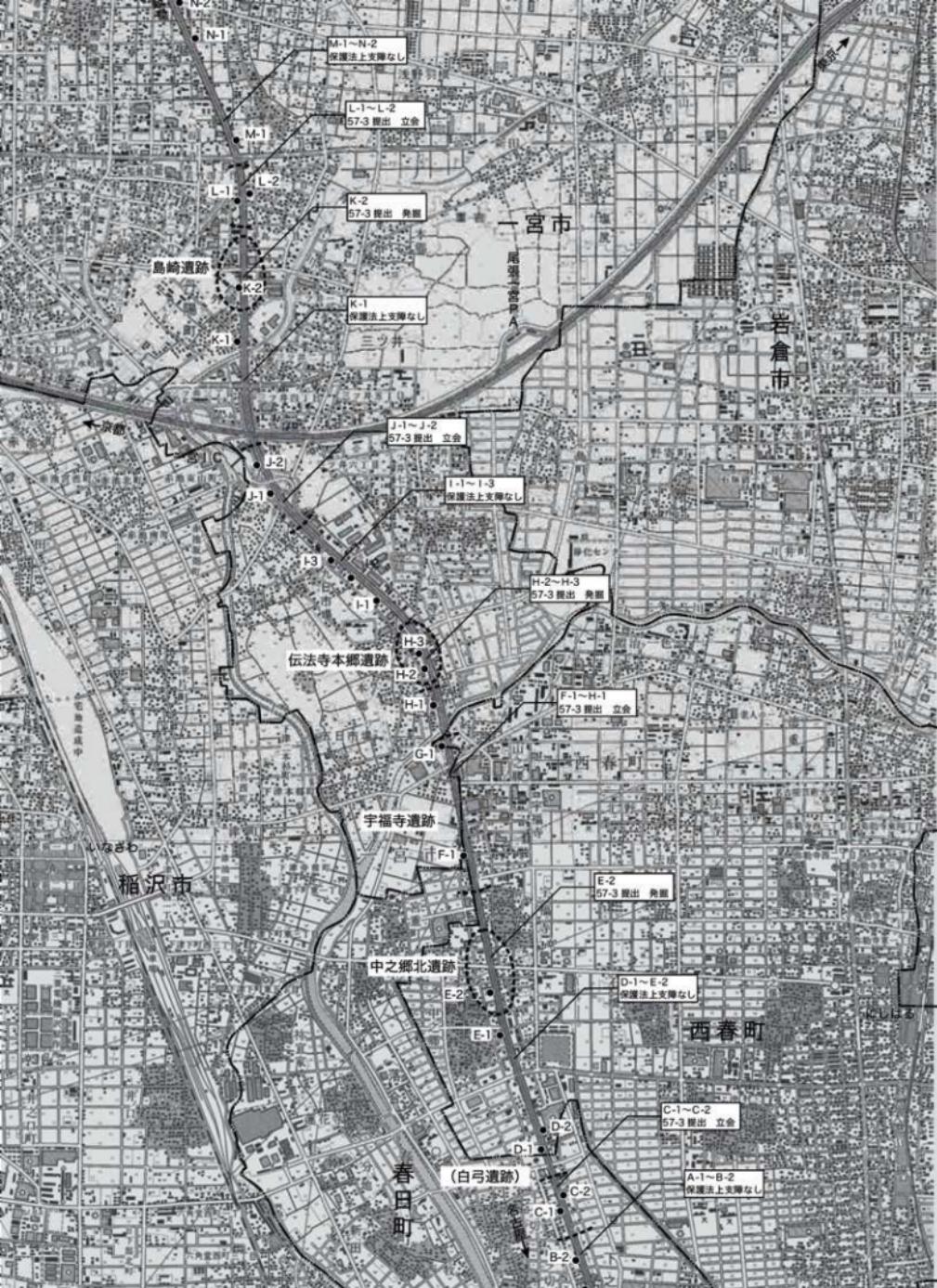
発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財團愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

文献

愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2000「愛知県埋蔵文化財情報」15 平成10年度



第1図 遺跡の位置



第2図 試掘地点と調査遺跡 (1:25,000)

第2章 調査の経過

調査区の設定

名古屋高速3号線は、一般国道22号線に高架構造で併設されるため、発掘調査は橋脚建設に際して、掘削工事に影響を受ける範囲を調査対象として、各工区に調査区を設定した。各遺跡において調査対象とした調査区と調査面積、調査期間はそれぞれ、島崎遺跡が10工区（P137～128/A～J区）計2,000m²、平成13年1～3月、伝法寺本郷遺跡が7工区（P96～90/A～G区）計1,600m²、平成13年4～5・8～9月、中之郷北遺跡が12工区（P65～55・A63/A、B a・B b、C～K）計2,400m²、平成13年10月～平成14年2月である（第1表）。なお、各遺跡の調査概要については、各報文において改めて記述する。

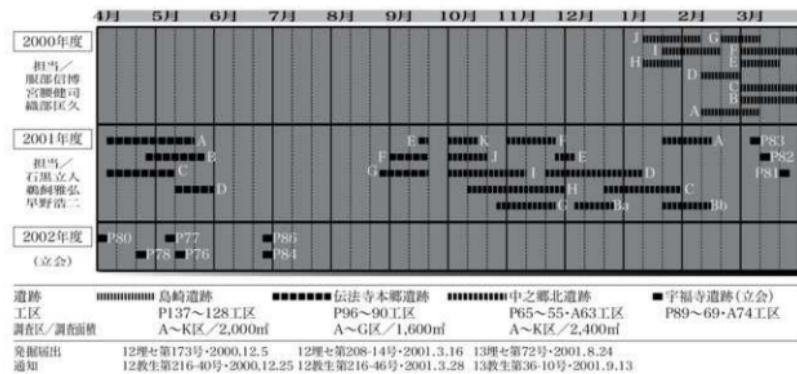
報告書作成

洗浄、注記までの整理作業は、平成12・13年度中に実施し、接合、復元、実測、写真撮影、収納等の整理作業と報告書の執筆、編集は、島崎遺跡を平成17年4～6月の3ヶ月、伝法寺本郷遺跡を平成17年5月の1ヶ月、中之郷北遺跡と宇福寺遺跡を平成17年6～9月の4ヶ月の期間内に実施し、平成18年3月に本書を刊行した。

文献

宮脇健司・織部匡久2001「島崎遺跡」『年報』平成12年度 財團法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
宮脇健司2002「島崎遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』17 平成12年度 愛知県教育委員会・財團法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鶴飼雅弘・早野浩二2003「伝法寺本郷遺跡」『年報』平成13年度 財團法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鶴飼雅弘・早野浩二2003「中之郷北遺跡」『年報』平成13年度 財團法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鶴飼雅弘2004「伝法寺本郷遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』18 平成13年度 愛知県教育委員会・財團法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鶴飼雅弘2004「中之郷北遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』18 平成13年度 愛知県教育委員会・財團法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

第1表 調査工程表





島崎道路調査着手前（I・J区）



島崎道路調査完了後（島崎1丁目交差点）



伝法寺本郷道路調査着手前（C区）



伝法寺本郷道路調査完了後（伝法寺交差点）



宇福寺道路調査着手直後（P83工区）



宇福寺道路調査完了後（五日市場交差点）



中之郷北道路調査着手前（F・G・H区）



中之郷北道路調査完了後（中之郷交差点）

写真1 道路の現況

第3章 周辺の環境

地形・地質

濃尾平野

伊勢湾を臨む濃尾平野は、西線を養老山地、東縁を台地や段丘群の発達する更新統堆積物

尾張平野

によって画される平野で、わが国第三位の広大な面積を誇る。木曽川を隔てた左岸域（愛知県側）の扇状地帯、自然堤防帯、三角州帯からなる平野面は尾張平野とも呼ばれ、その主要部分は古木曽川水系の諸河川がもたらした夥しい堆積物である第四紀沖積層によって覆われている。沖積層それぞれの岩相分布状態は、扇状地帯が礫質層、自然堤防帯が砂質層、臨海三角州帯が泥質層である。

遺跡の立地と周辺の遺跡

一宮市南東部に所在する島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡、西春日井郡西春町西部に所在する中之郷北遺跡、宇福寺遺跡は、いずれも木曽川系自然堤防帯の緩傾斜面に立地する。五条川水系の岩倉市域、一宮市南東部域、西春町東部域、西春日井郡師勝町域には、砂質層を岩層とする相対的に古い自然堤防が発達し、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が密集して形成されている（第5・6図）。その代表的な遺跡（古墳）が、西北出遺跡（岩倉市／縄文）、権現山遺跡（同／縄文・古墳）、大地遺跡（同／縄文・弥生）、小森遺跡（同／古墳）、馬見塚遺跡（一宮市／縄文・弥生・古墳）、三ツ井遺跡（同／縄文・弥生・古墳）、猫島遺跡（同／縄文・弥生）、蕉池遺跡（同／弥生）、伝法寺野田遺跡（同／弥生）、元屋敷遺跡（同／弥生・古墳）、西大門遺跡（同／弥生・古墳）、稻荷山古墳（同）、高塚古墳（西春町）、堤下遺跡（師勝町／縄文）、石塚遺跡（同／古墳）、能田旭古墳（同／古墳）である。なお、同じく五条川水系に属する朝日遺跡（春日町・清須市・名古屋市西区／縄文・弥生・古墳）は、中之郷北遺跡から下流方向へ約2.5kmの位置にある。

日光川水系の遺跡

一方で、日光川水系の一宮市西部域においても同様に古い自然堤防が発達し、弥生・古墳時代の遺跡の密集域が形成される。その代表的な遺跡（古墳）が、西上免遺跡（弥生・古墳）、今伊勢車塚古墳、八王子遺跡（弥生・古墳）、一宮西高校二子子遺跡（弥生）、北川田遺跡（弥生）、萩原中学校河田遺跡（弥生）である。



第3図 権現山遺跡の縄文土器



写真2 馬見塚遺跡（県指定史跡）

その両地域の中間地帯である青木川、三宅川水系の稻沢市域に発達する自然堤防は相対的に新しく、地表には低塑性粘土が厚く堆積する。この地域で遺跡形成が活発化するのは古代以降で、奈良時代には国府と国分二寺が、市域東部の下津地区には鎌倉時代に鎌倉街道の宿駅として折戸宿（弘安年間以降、「折戸」は「下津」と表記）、



写真3 稲荷山古墳（左、一宮市指定史跡）と高塚古墳（右）

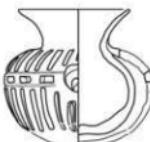
国府と守護所

室町時代に尾張国の守護所（下津城）が設置される。なお、尾張国府の所在が推定される稲沢市松下町付近は、宇福寺遺跡から西へ約3km、下津城跡と鎌倉街道は伝法寺本郷遺跡から西へ約1kmの位置にある。伝法寺本郷遺跡付近には九日市場、五日市場の地名が残り、正和3年（1314）の「六波羅御教書案」には「下津五日市」とあることから、下津宿との関係も窺われる。

五条川、青木川の両岸にそれぞれ立地する島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡、中之郷北遺跡・宇福寺遺跡は、五条川水系の岩倉市や一宮市南東部域と青木川水系の稲沢市域両地域の特質を帯びていることは容易に想像される。また同時に、これらの遺跡が尾張地域の、地形発達史、土地利用史の動的な描写に欠くべからざる存在であることも明らかである。

文献

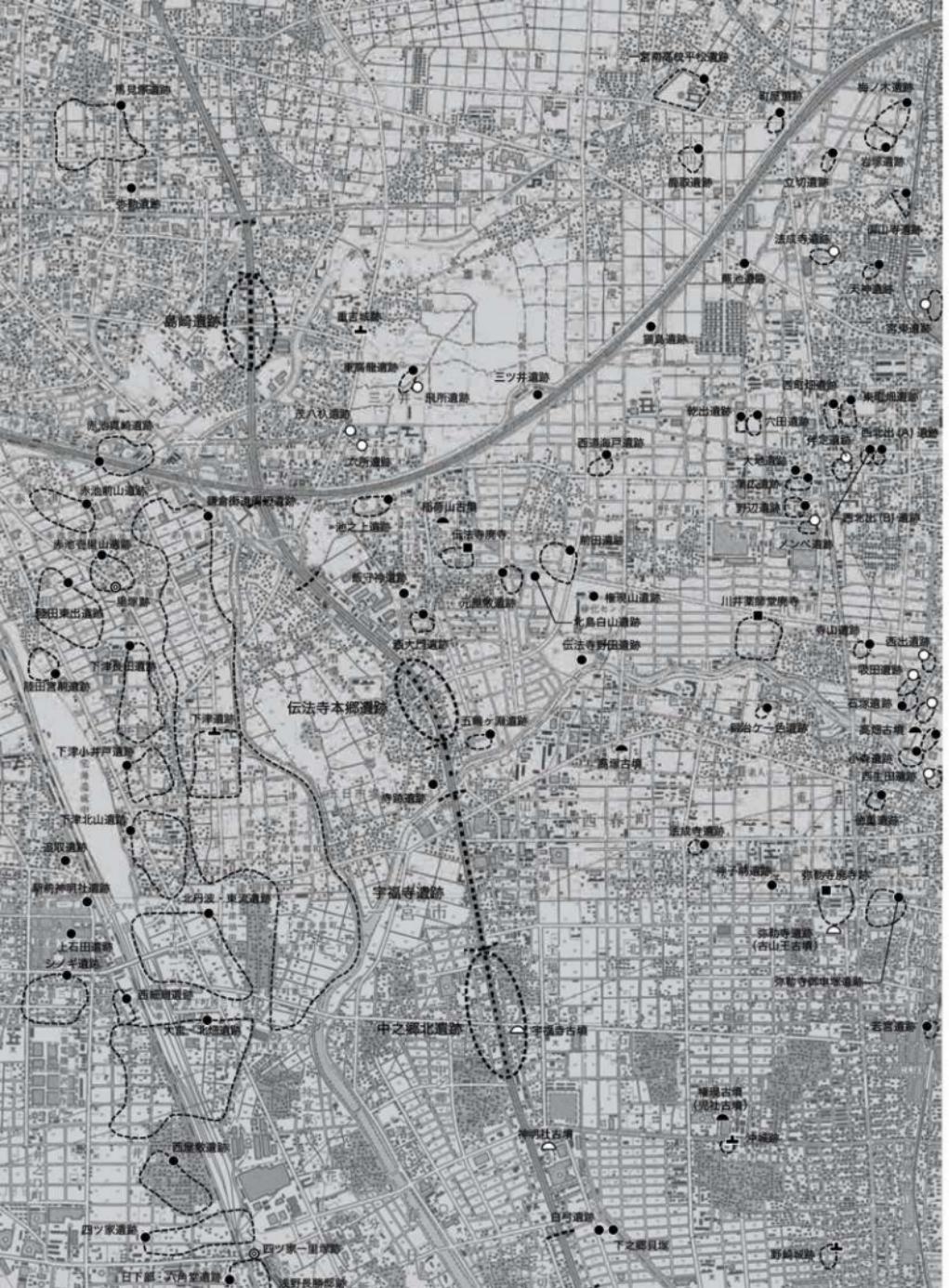
- 澄田正一・大參義一・岩野見司1967『新編一宮市史』資料編二
一宮市
大參義一・岩野見司1974『新編一宮市史』資料編四 一宮市
井間弘太郎1981「自然」『新修稲沢市史』研究編三 地理 稲
沢市
稲葉栄道他1990『新修稲沢市史』本文編上 稲沢市
海洋正倫1994『沖積低地の古環境学』古今書院
伊藤秋男編1994『高原古墳発掘調査報告書』西春町教育委員会
早野浩二編2003『椎現山道路』愛知県埋蔵文化財センター調査
報告書第110集 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知
県埋蔵文化財センター



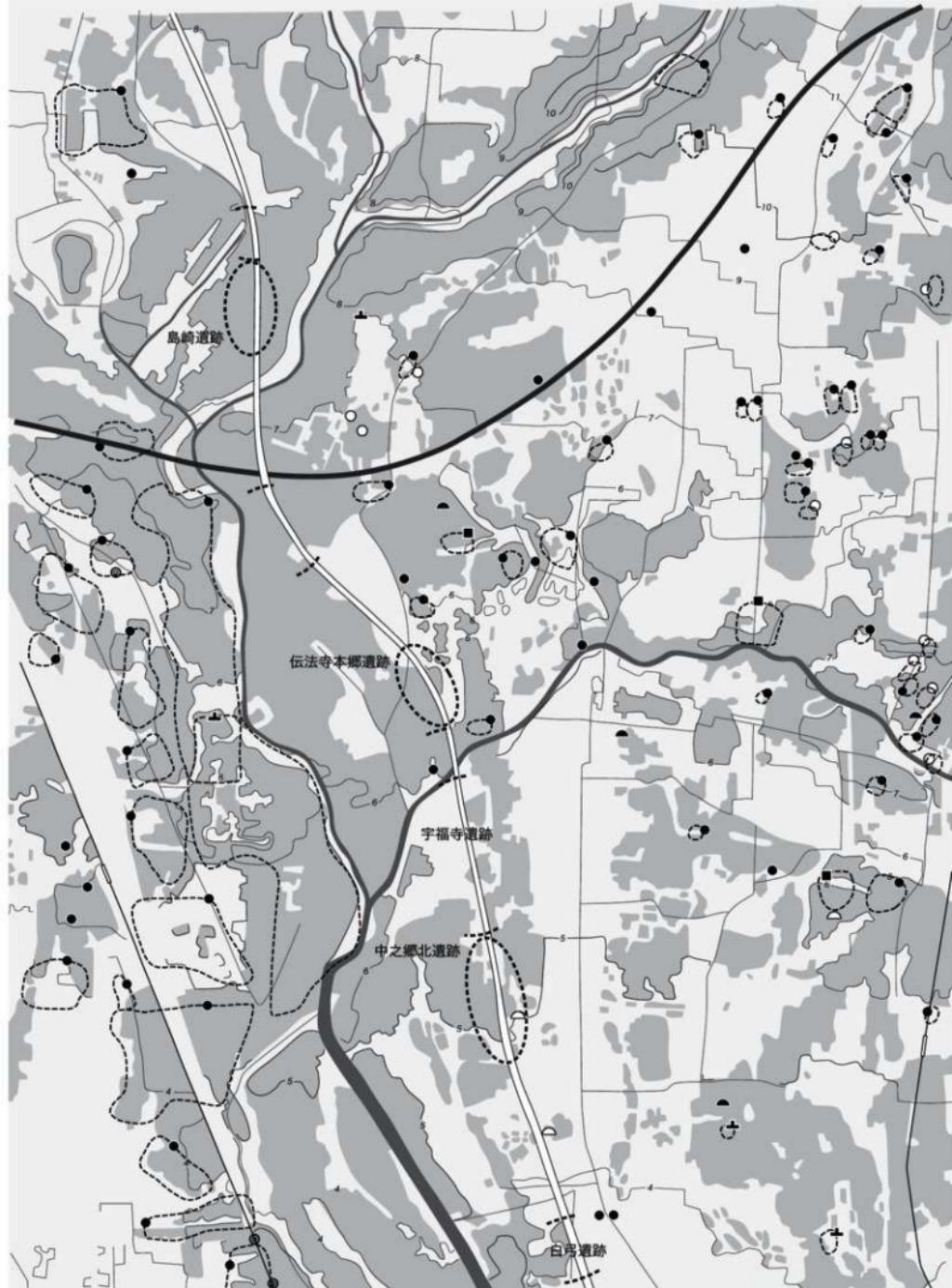
第4図 伝西大門遺跡の須恵器



写真4 現況の島畑（一宮市丹陽町三ツ井地区）



第5図 周辺の遺跡分布 (1:25,000)



第6図 遺跡周辺の地形 (1:25,000)

IV 中之鄉北遺跡

第1章 調査の概要

試掘調査

中之郷北遺跡の遺跡範囲は、愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財調査センターが実施した試掘調査の所見（試掘地点 E-2、第 2・101 図）を受けて確定した。調査区は国道 22 号線の路線上、全長約 500 m の橋脚建設予定地に設定した。設定した調査区は中之郷交差点を介して、交差点以北の P65～61 工区にそれぞれ A・B a・C・D・E 区、A63 工区に B b 区の 6 調査区、交差点以南の P60～55 にそれぞれ F～K 区の 6 調査区、計 12 調査区である。

発掘調査

発掘調査は、道路建設の施工計画に従い、2001 年 10 月に交差点以南から着手し、交差点以南の調査を 2001 年 11 月に完了した。続けて交差点以北の調査を 2001 年 11 月に着手し、2002 年 2 月に完了した。各調査区は南北約 160 m、東西約 100 m の掘削範囲に対して、工法の関係上、調査対象は南北約 120 m、東西約 60 m の範囲に限定せざるをえなかった。表土除去と埋め戻し、調査中の排出土の処理は、名古屋高速道路の施工業者が実施した。



第101図 試掘調査の所見



D区調査風景 1



D区調査風景 2



C区調査風景 1



C区調査風景 2

写真37 中之郷北遺跡調査風景



第102図 中之郷北遺跡調査区配置図 (1:2,500)

第2章 基本層序と検出遺構

(1) 基本層序

層序

各調査区では、古墳時代～近世の各時代に及ぶ遺構と遺物を各層序ごとに連続して検出した。調査は全長約500mの工区間に12調査区を設定して実施しているので、各調査区で検出した遺構の記述に際しては、遺構面相互の層序関係が適確に明示される必要がある。しかし、遺跡の堆積環境は複雑で、遺跡とその周辺における土地利用の変遷も一様ではないことから、地点を離れた厳密な層序対比には困難な部分も少なくない。そこで、中之郷北遺跡の南北の層序断面を第104・105図に示し、各層序の内容と対比関係を以下に整理して概述する。

調査区を設定した道路面の標高は5.2～6.0mで、現状で周囲より約1m高い。これは、国道敷設時に盛土が施された結果で、盛土下位の耕作土上面の標高は、畠地（島畠）部分で5.0m前後、畠地周囲の水田部分で4.0m前後となる。盛土下位に堆積する層は、灰色を基調とする粘土またはシルト層（酸化・還元の程度によって色調は大きく変化することが多い）で、中世と近世の遺物を包含する。この灰色粘土層を主体とした中近世の堆積層を<Ⅰ層>とする。なお、島畠などの耕作地は、Ⅰ層を造成して形成されることが多い。

Ⅰ層

Ⅰ層下位にはE区からH区にかけて古墳時代～古代の遺物を多く包含する暗褐色粘土が堆積し、その周囲のD区、I区では、それぞれ、褐色を帯びた灰色シルト層が堆積する。この暗褐色粘土層とそれに相当する層を<Ⅱ層>とする。Ⅱ層の上面の標高はD区が約4.5mで最も高く、E区で約3.6mまで急激に下降し、E区からI区にかけて標高約4.3mまで緩やかに傾斜する。Ⅱ層の層厚は、0.2～0.3mである。

Ⅱ層

Ⅲ層の下位にはC区からI区にかけて中粒砂が堆積する。この堆積層を<Ⅲ層>とする。Ⅲ層は遺跡の広範を被覆する洪水性堆積で、A区とB a区で検出された河川も、同様の堆積物によって埋積する。Ⅲ層中に包含される遺物は少ないが、A区の河川からは、7世紀の遺物が大量に出土していることから、堆積が進行した時期もその前後と考えられる。

Ⅳ層

Ⅲ層の下位、標高3.0m付近には灰色を基調とする均質なシルト～粘土が堆積する。色調は還元の程度によって、青灰色に変化していることが多い。この堆積層を<Ⅳ層>とする。層厚は0.8m前後と厚く、上位がシルト質、下位が粘土質に漸的に変化する傾向がある。下位の灰色粘土層直上付近には、5世紀前半の土器が埋没していることが多く、H区のⅣ層中では、下位の黒色粘土層（V層）直上にかけて4世紀後半から5世紀前半の土器群が連続して検出された。この場合、土器群の出土層位を、上位からⅣa層、Ⅳb層、Ⅳc層、Ⅳd層として細分して記述することとした。

Ⅴ層

Ⅳ層下位には層厚約0.2mの黒色粘土層が堆積する。この堆積層を<V層>とする。V層は各調査区、標高2.5m付近に安定して堆積するが、C区やH区など、V層中に粗粒砂が混入する地点では質感がやや異なる。V層中には3世紀前半の土器が包含される。

V層下位には、灰色粘土と黒色粘土が交互に連続して堆積する。層序の確認は標高約1.8mまでを試みたが、それより下位は、激しい湧水により断念した。それぞれの層中に遺物

は確認されなかった。

なお、調査時には、遺跡広範で確認され、識別が容易なII層とV層を鍵層として、各調査区間の層序や遺構面の対比を意識しつつ、調査を進行させることに努めた。

鍵層

(2) 検出遺構

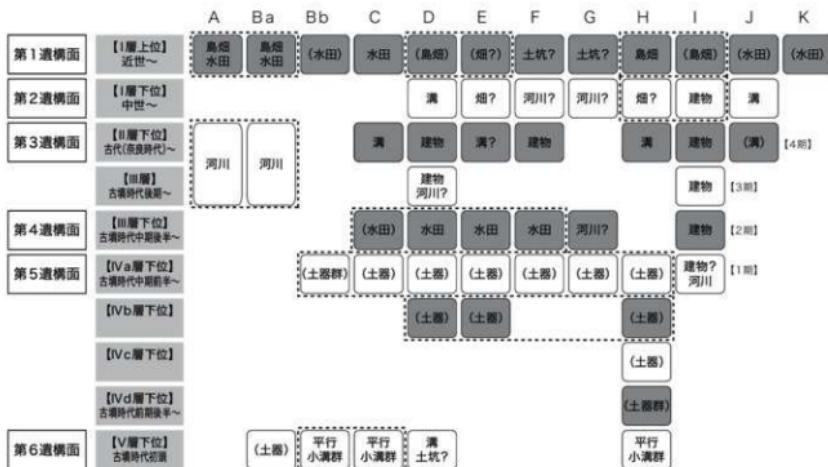
前項における調査区間の層序対比を受けて、遺構面を以下の6遺構面に整理統合する。

遺構面の整理

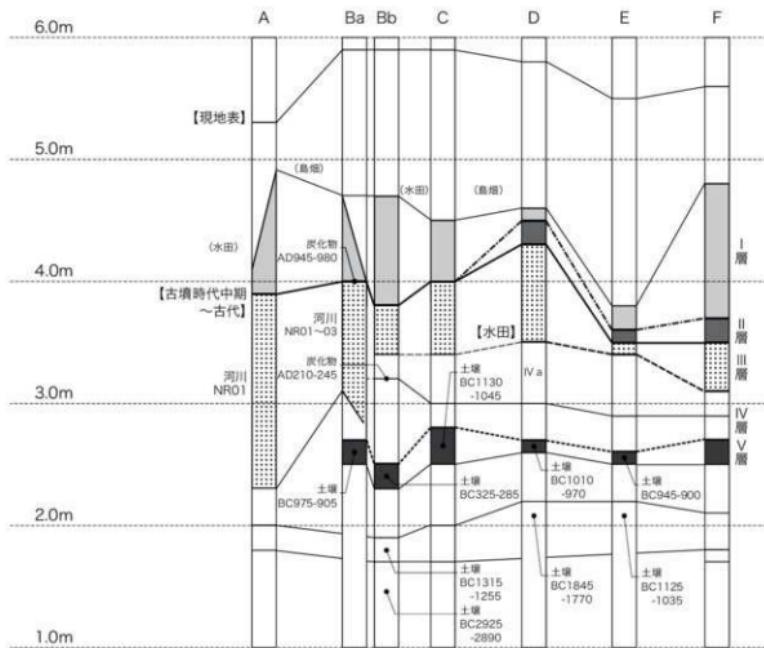
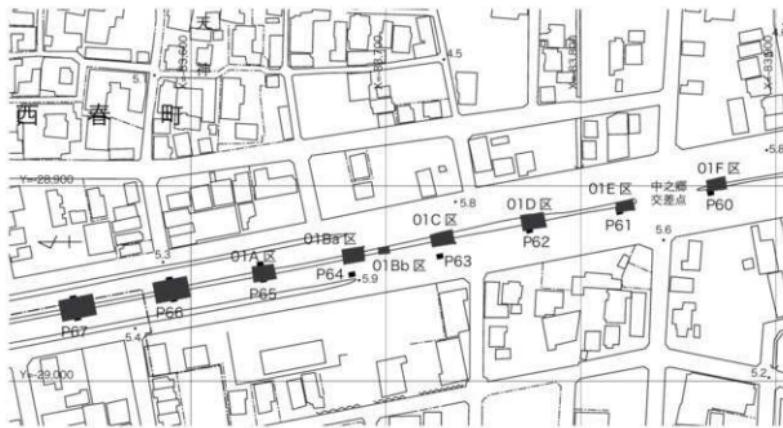
I層上位で検出される近世の遺構を第1遺構面とする。第1遺構面では近世と近代の遺構が連続して検出される場合がある。主としてII層上位で検出される中世の遺構を第2遺構面、III層上位で検出される古代（8世紀）の遺構を第3遺構面、IV層上位で検出される古墳時代中期から古代（5世紀後半～7世紀）の遺構を第4遺構面とする。IV層を被覆するⅢ層の堆積は、7世紀を中心としながらも、5世紀後半以降の複数時期の洪水に起因することが判明しているので、第4遺構面は、複数の時期に細分される場合がある。IV層内で検出される古墳時代前期から古墳時代中期（4世紀後半～5世紀前半）の遺構を第5遺構面とする。明確な遺構は検出されないが、便宜的に遺構面として把握した。各調査区の層において、やや散漫ながらも土器群が検出されている。細分した層に応じて、各遺構面（で検出された土器群）も分割して理解する。V層下面で検出される古墳時代初頭（3世紀前半）の遺構を第6遺構面とする。

以下、遺構面については、1面、2面、3面…として、上記の6遺構面の分割に従い統一的に記述する。さらに、各遺構面をさらに分割する場合は、1-1面、1-2面…として記述する。また、それぞれの調査区の報告では、遺構面が削除されていたり、遺構面が確認されつつも、遺構が検出されなかつたため遺構の記述を省略する場合がある。そこで、各調査区において検出され、以下に報告する遺構を予め第103図に整理して掲げておく。

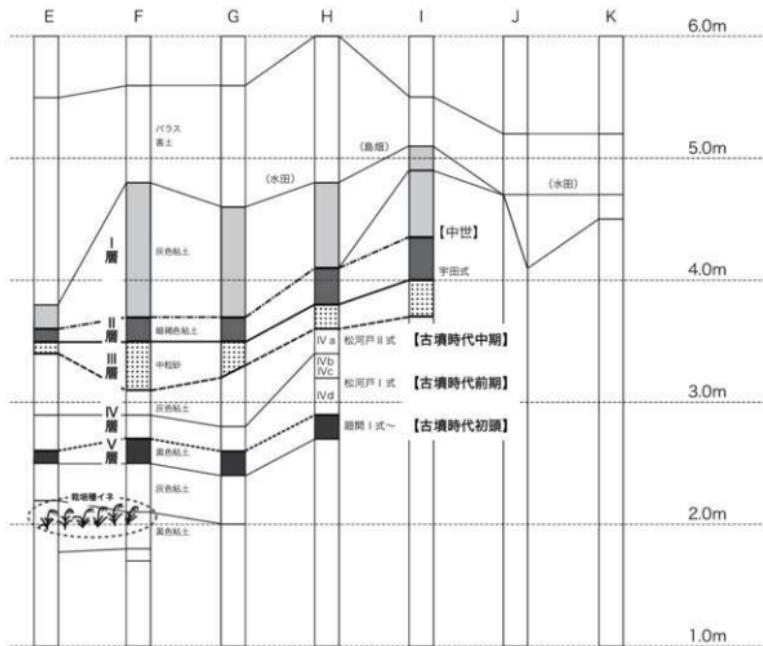
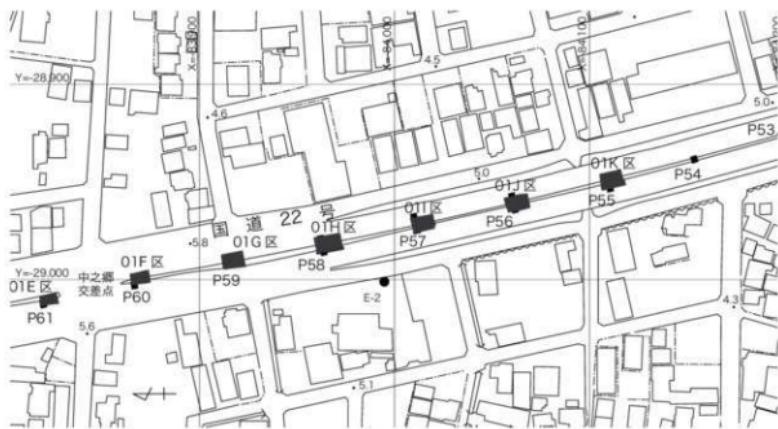
遺構面の表記



第103図 中之郷北遺跡検出遺構の概要



第104図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図1 (縦1:40/横1:2,500)



第105図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図2 (縦1:40/横1:2,500)

第3章 遺構と遺物

(1) A区

層序と検出遺構

A区では、1層に対応する灰色シルト層の上位において中世～近世の遺構、1層の下位において古代の河川を検出した（第106図）。結果、調査した遺構面は、計2遺構面である。

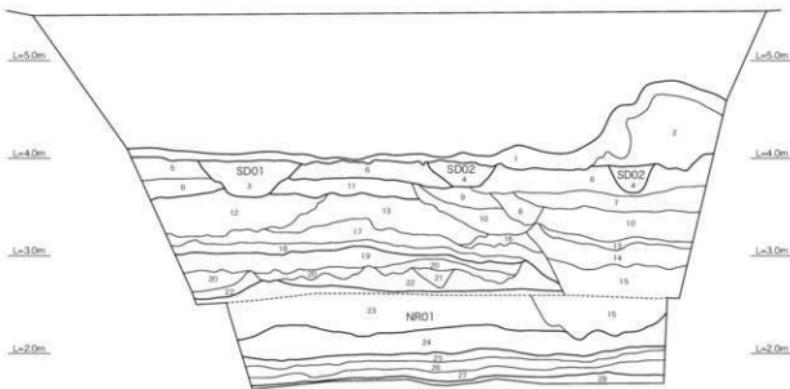
古代

河川NR01

古代の河川 NR01（第107図）は、堆積物と埋没時期から3～4面に対応すると判断される。A区全域が河川内に相当するが、河川の東岸付近を調査したと思われる。検出面からの深さは最大で1.7 mである。調査時には、河川内の堆積層を1層—灰色を基調とするシルト（～細粒砂）、2層—青灰色シルト、3層—灰色シルトと粗粒砂のレンズ状堆積で植物遺体を多く含む、4層—黒色粘質シルト、5層—粗粒砂の1～5層に区分した（第106図）。なお、5層下位は、灰色粘土と黒色粘土が交互に堆積する。

杭列

NR01-3層を掘削中、調査区西壁付近で南北方向の杭列を検出した（第108・109図）。杭列は河川の東岸から距離を隔てていて、その設置目的については明確でない。杭頭部の標高は約2.7 mで、杭列内には一面に大量の自然木や用材が滞留したような状態で残されていた。杭（78～90）の用材はエノキ属、ヤナギ属、クヌギ属の芯持材で（第4章（6）を参照）、径が4～6 cmのものが多い。杭の先端はいずれも銳利に仕上げられている。



- | | | |
|--|---------------------------|---------------------------------|
| 1 7.5Y4/1 岩色シルト | 11 5Y3/3 オリーブ色粗粒砂 | 21 5Y3/1 オリーブ岩色粘質シルト |
| 2 2.5Y4/1 緑オリーブ色灰色粗粒砂 | 12 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂 | 5Y4/1 岩色中粗粒砂に含む |
| 3 5Y4/2 緑オリーブ色細粒砂、炭化物少量含む | 13 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粗粒砂 | 22 5Y4/1 岩色粘土 5Y4/1 岩色中粒砂互層状に含む |
| 4 5Y4/3 黄褐色シルト | 14 2.5Y4/5 黄褐色粗粒砂 | 23 2.5Y4/1 岩色粗粒砂 |
| 5 10Y4/1 岩色粘土 | 15 5Y4/1 岩色粗粒シルト | 7.5Y4/1 岩色粗粒シルト互層状に含む |
| 6 5Y4/1 岩色粗粒砂 | 16 7.5Y4/1 岩色粗粒砂 | 24 7.5Y5/1 岩色粘土 |
| 7 2.5Y4/1 岩色粗粒砂 | 17 7.5Y4/1 岩色シルト、炭化物を少量含む | 25 2.5Y3/1 黒褐色粘土、炭化物を含む |
| 8 2.5Y4/1 岩色シルト | 18 2.5Y4/2 岩色粗粒砂 | 26 2.5Y3/1 黑褐色粘土 |
| 9 2.5Y4/2 岩色粗粒シルト、7.5Y3/3 岩オリーブ色粗粒砂混じる | 19 2.5Y3/1 黑褐色粘土、炭化物を少量含む | 27 2.5Y3/1 黑褐色粘土 |
| 10 2.5Y4/2 岩色粗粒砂 | 20 5Y3/1 オリーブ岩色粘土 | 28 5Y4/1 岩色粘土 |

第106図 A区東壁土層断面図（縮1:50／横1:100）

遺物出土状況

遺物は3層と4層においてやまとまって出土した。4層では東岸付近に集中して出土する傾向がある（第110図）。1・2層と5層において遺物はほとんど確認されなかった。

3・4層には古墳時代～古代の土師器と須恵器が含まれるが、両層に明確な様相差は認められず、上下層間で接合する個体も多い。古墳時代初頭の土師器（4層—1～7、3層—41～47）は、廻間I式後半～廻間II式前半に対比される個体が多く、隣接するB a区のV層（黒色粘土層）に含まれる土器に型式が対応する。個体の遺存率も比較的高いことからも、付近の自然堤防上には同時期の集落の展開が予測できる。古墳時代中期の土師器（4層—8～18、3層—48～51）は宇田式に対比される個体が多い。12は独特な器形で、鍋あるいは瓶と推定したが、古代に帰属する可能性もある。須恵器は、東山11号窯式、東山61号窯式、東山44号窯式、東山50号窯式の各型式が認められる。65は高杯形器台の受部とした。これらの須恵器には土師器として伊勢型甕あるいは鍋（4層—19～23、3層—52～54）が対応する。66、67は土師質の大型管状土錘で黒斑がある。出土した2点は両側刃が直線的で、両端面を平坦とする規格的な形態である。67の法量は長さ8.0cm、径4.5cm、孔径1.3cmで、重さは151.2gである。66は、板状にした粘土を心棒に巻きつけ、両端を繋ぎ合わせる製作手法が観察される。同様な製作手法は甚目寺町大瀬遺跡から出土した同形態の土師質管状土錘においても観察されている。

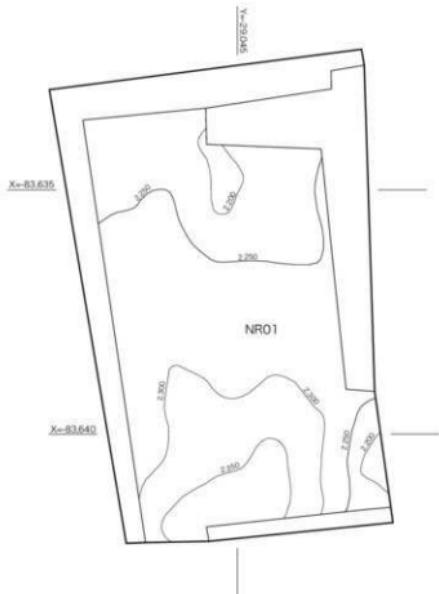
古墳時代初頭

古墳時代中期

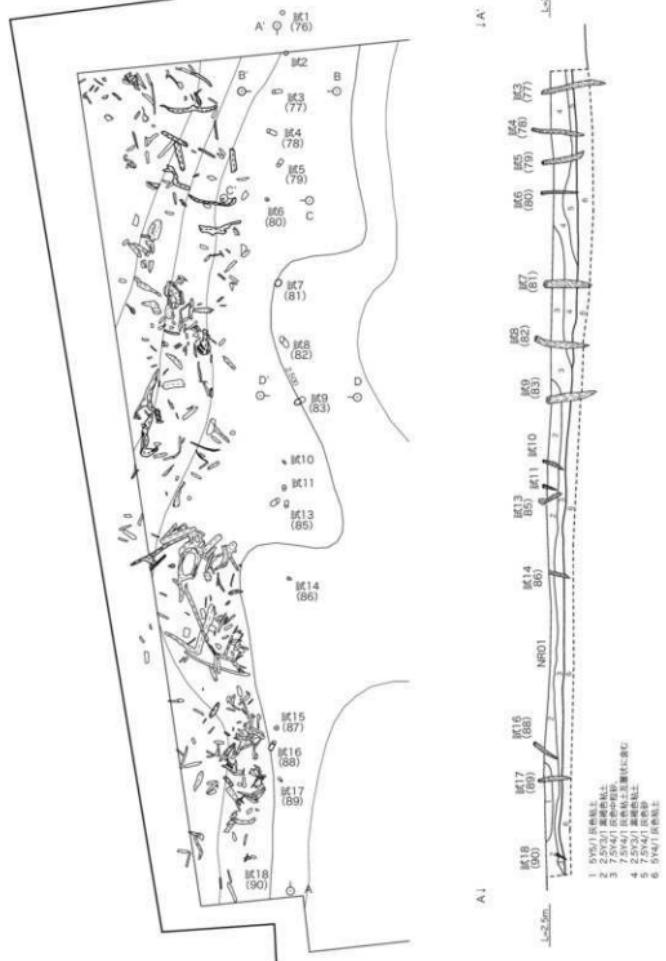
須恵器

大型管状土錘

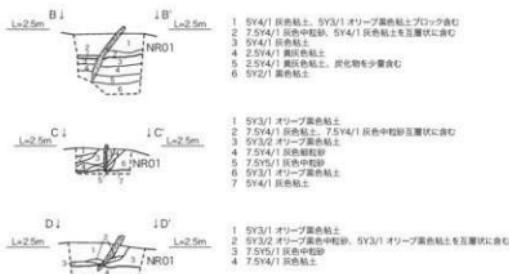
大瀬遺跡



第107図 A区NRO1遺構図 (1:100)



第108図 A区NR01-3層杭孔遺構図 1 (1:50)

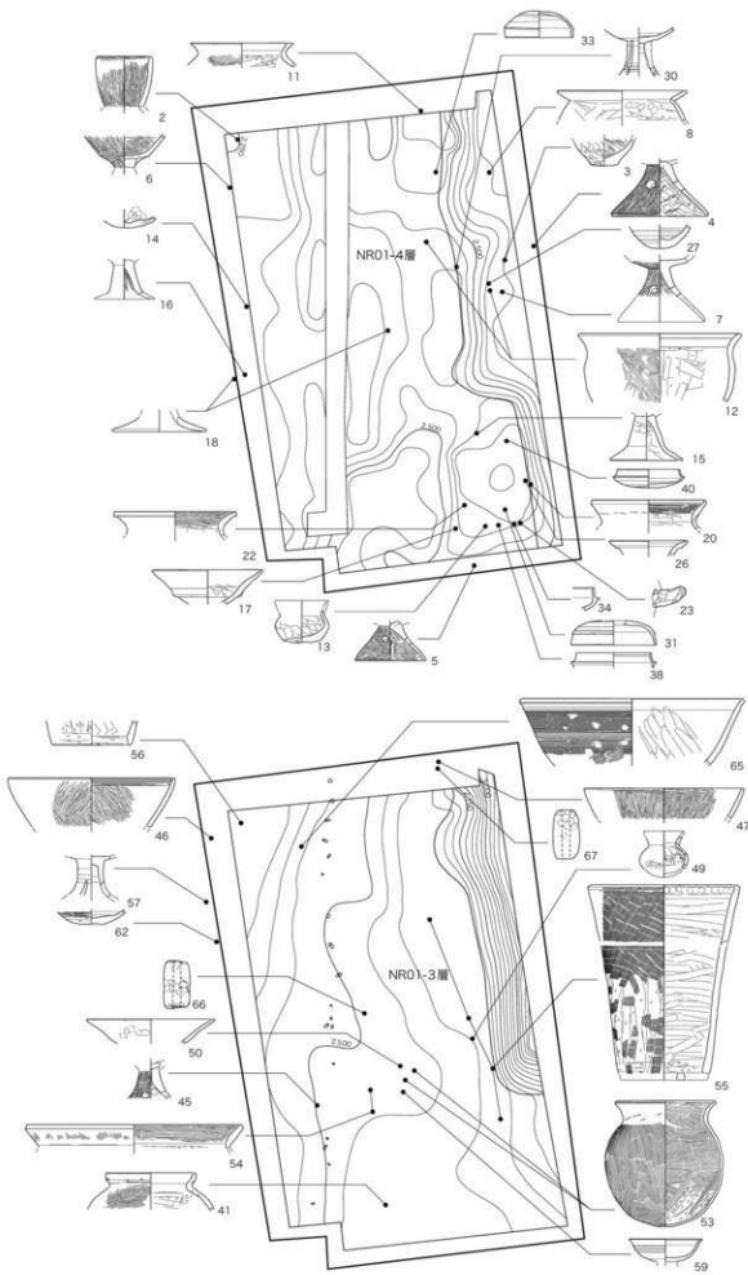


第109図 A区NR01-3層杭列遺構図2 (1:50)

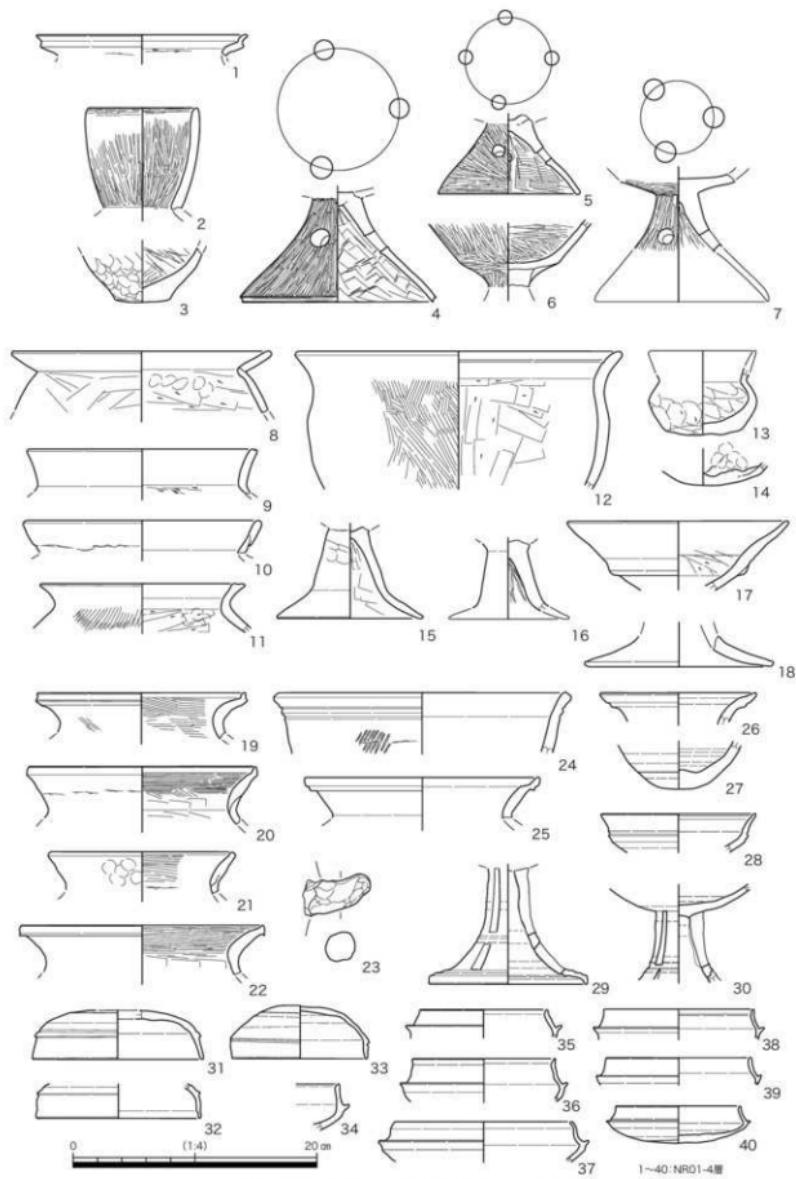


写真38 A区NR01

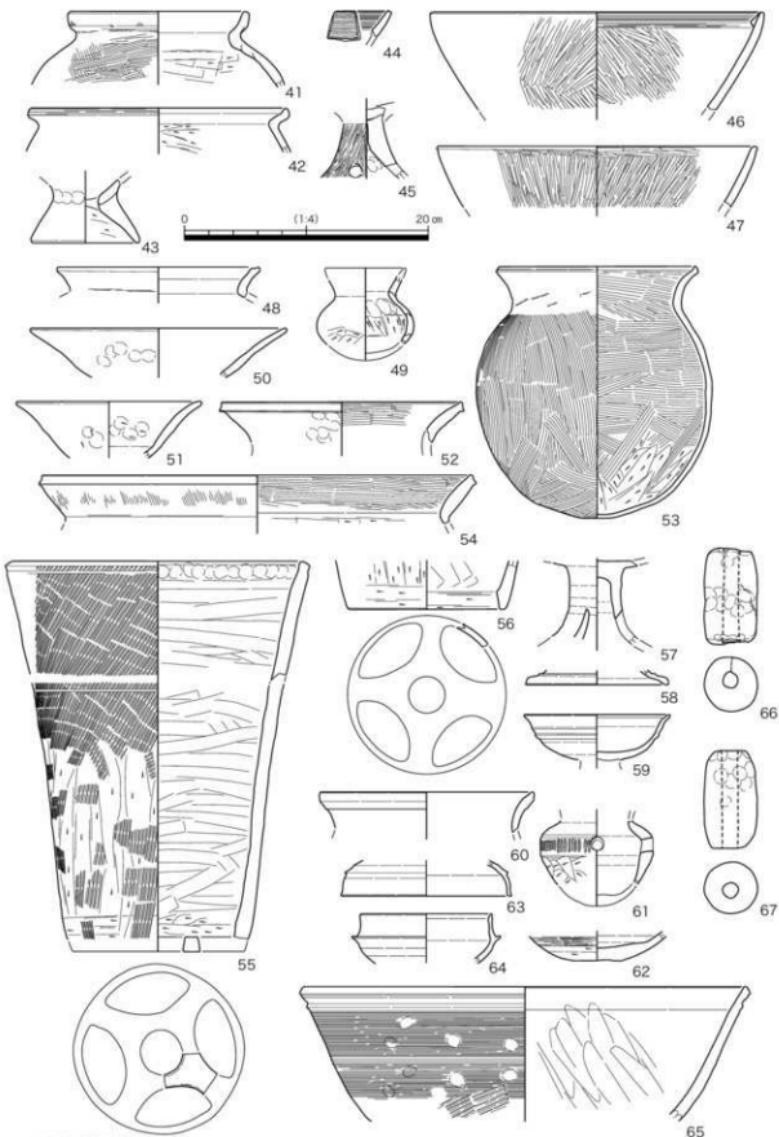
1: 全景 2: 杭列検出状況 3・4: 杭列土崩断面



第110図 A区NRO1遺物出土状況 (1:100)

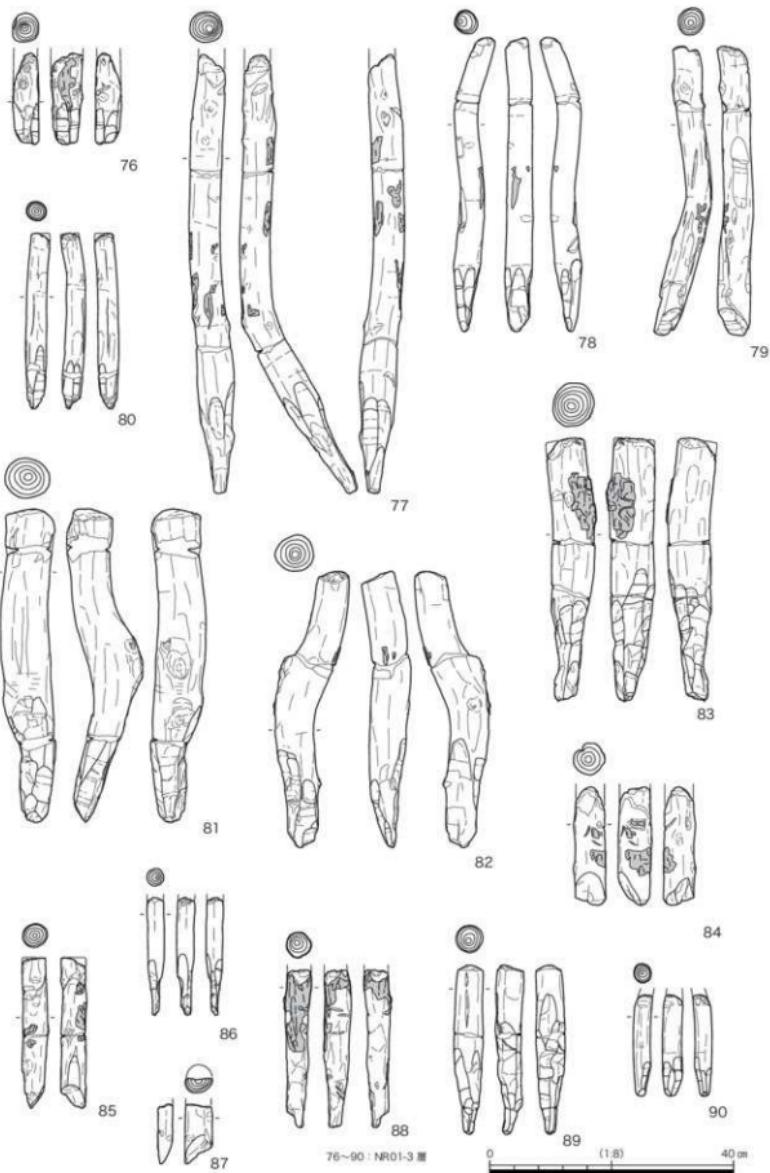


第111図 A区NR01-4層出土遺物実測図 (1:4)



41~67: NR01-3層

第112図 A区NR01-3層出土遺物実測図 (1:4)



第113図 A区NR01-3層出土木製品実測図 (1:8)



4



5



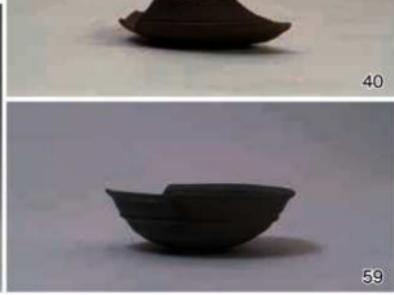
12



33



53



40



65



66

67

写真39 A区出土遺物



写真40 A区出土木製品

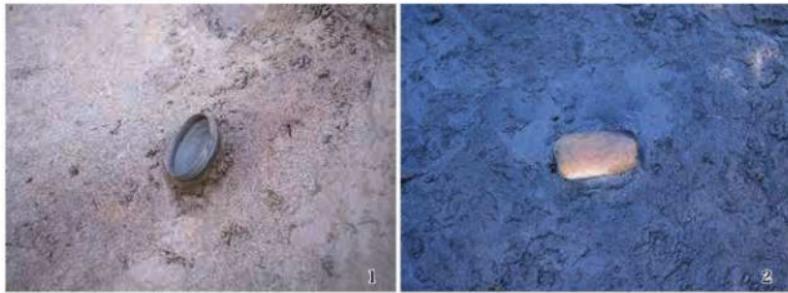


写真41 A区NRO1遺物出土状況

1: 4層出土須恵器蓋 2: 3層出土大型管状土器

中世～近世

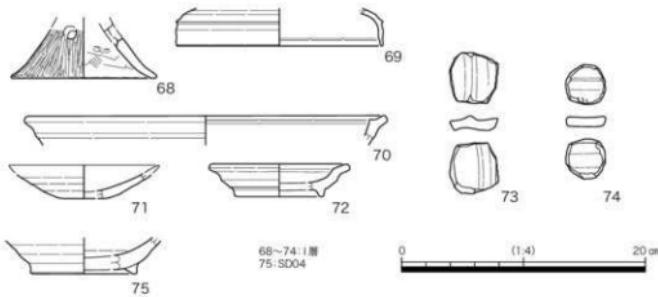
SD01～04

水田と島畑

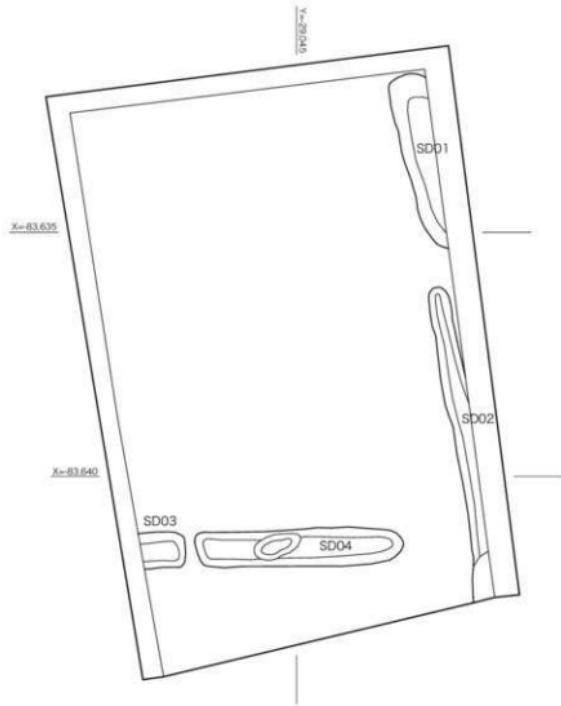
1面の遺構として、それぞれ南北方向を区画する溝 SD01・02、東西方向を区画する溝 SD03・04を検出した(第115図)。これらは耕作地を区画する溝であると思われる。また、それらの遺構の上位には水田と島畑が連続して形成されている。なお、土層断面において確認される島畑と水田面の比高は約0.7mである。

I層出土遺物

I層には、下位の堆積層から混入したと思われる土師器高杯(68)、須恵器蓋(69)に加えて、古瀬戸陶器擂鉢(70)、東濃型山茶碗(71)、大窯陶器折線皿(72)、瀬戸美濃陶器擂鉢を転用した加工円盤(73・74)など、15世紀後半～16世紀前半を中心として、19世紀までの遺物が含まれる。75はSD04から出土した尾張型第5型式の山茶碗である。出土遺物が少なく、確定的な見解を導くまでは及ばないが、12世紀に耕作地としての利用が開始されて以降、中世から近世を通じてA区付近は耕作地としての利用が継続したことを推察する。



第114図 A区I層・SD04出土遺物実測図 (1:4)



第115図 A区中世～近世遺構図 (1:100)



写真42 A区土層断面／中世～近世遺構

1：西壁土層断面 2：中世～近世遺構全景

(2) Ba区

層序と検出遺構

Ba区では、I層に対応する灰黄色シルト層の上位において近世の島畠と水田、I層下位において古墳時代後期～古代の河川を検出した(第116図)。調査した遺構面は計2遺構面となるが、V層(黒色粘土層)中において古墳時代初頭の遺物を検出した。

古墳時代初頭

V層は大部分が古墳時代後期～古代の河川によって削剥され、調査区北端付近(河川の北岸付近)の部分がわずかに残存する程度であった。遺構は確認されなかつたが、層中から古墳時代初頭の土器が出土した。91はS字甕B類古段階、92は浅鉢あるいは甕。92は外面に煤が厚く付着する。いずれもおよそ廻間II式前半に対比される。

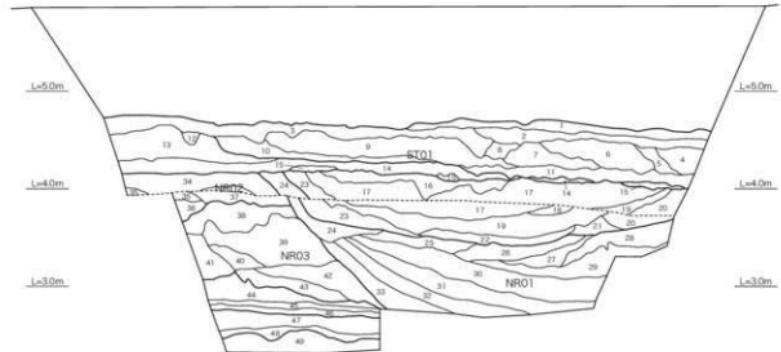
古墳時代後期～古代

河川内堆積物

I層下位は、河川内の堆積物がBa区全域を被覆する。Ba区は河川の北岸付近に相当し、標高約2.7mまで(深さ約1.3m)を掘削したが、完掘できなかつた。堆積状況から河川が埋積する各段階を大局的に把握し、NR01、NR02、NR03として順次、河川内の堆積物を掘削した(第116・117図)。NR01は上層と下層に区分され、層理面付近には自然木などの植物遺体や用材が大量に残されていた(樹種同定結果については第4章(6)を参照)。出土遺物は絶対に少量で、NR01上層において須恵器摘み蓋(97)、ごく薄く灰釉を施した灰釉陶器碗(98)、NR03において古墳時代後期を相前後する土器と須恵器(93～96)などが出土した。これらの出土遺物からNR03が6～7世紀、NR01下層が8世紀、同上層が10～11世紀にそれぞれ埋没したと考えられる。

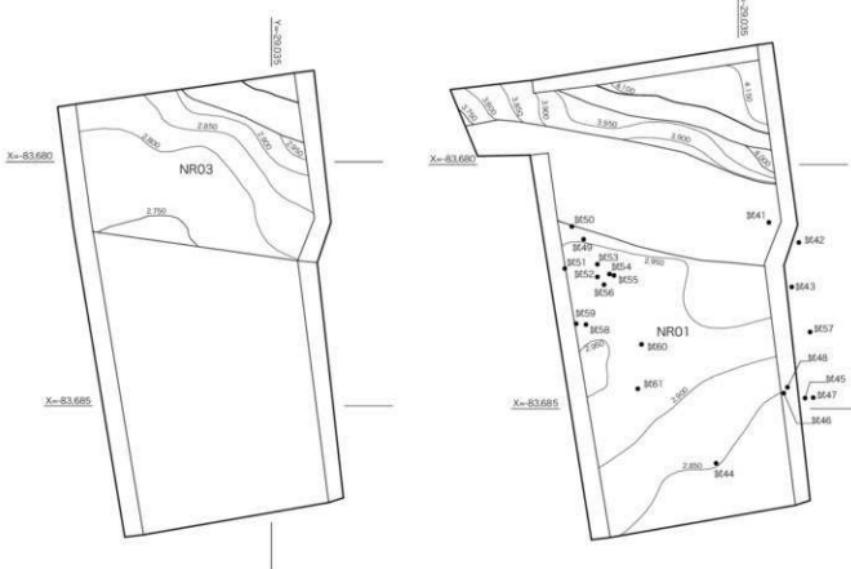
埋没時期

埋没時期

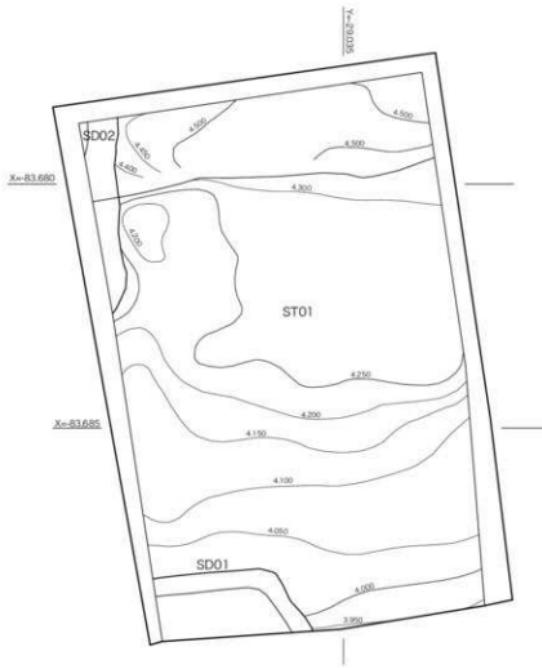


- | | | |
|------------------------|--------------------------------------|--|
| 1 10Y4/1 黄色粘土 | 19 2.5Y7/11 区白色粘土 | 34 2.5Y6/2 黄褐色粘土 - 2.5Y5/3 黄褐色中粗砂むわかに混じる |
| 2 5Y6/2 黄褐色粗砂シルト | 20 3Y7/3 区白色粗砂 | 35 2.5Y6/2 黄褐色粗砂 |
| 3 5Y6/1 黄褐色シルト | 21 2.5Y6/1 黄色粗砂粉 | 36 2.5Y6/3(2.5) 黄褐色粗砂シルト |
| 4 7.5Y5/2 黄色オーブル色粗砂シルト | 22 2.5Y6/1 黄色粘土 | 37 10Y3/1 オリーブ色粘土 |
| 5 7.5Y5/2 黄色オーブル色粗砂シルト | 23 2.5Y7/2 黄褐色粗砂粉 | 38 10Y7/1 黄白色シルト - 10Y6/1 黄色中粗砂入、炭化物混じる |
| 6 7.5Y5/2 黄色オーブル色粗砂シルト | 24 2.5Y6/1 黄褐色粗砂粉 | 39 10Y3/1 オリーブ色粘土と10Y4/1 黄褐色粗砂粉 |
| 7 5Y5/3 黄色オーブル色シルト | 25 2.5Y7/2 黄褐色粗砂粉 | 40 10Y5/1 黄色粗砂粉 |
| 8 5Y5/2 黄色オーブル色シルト | 26 2.5Y4/1 黄褐色シルトと 2.5Y8/1 黄褐色粗砂粉の互層 | 41 2.5Y6/2 黄褐色粗砂シルト |
| 9 5Y5/3 黄色オーブル色シルト | 27 2.5Y6/1 黄褐色粗砂粉 | 42 10Y4/1 黄褐色粗砂シルト |
| 10 5Y5/2 黄色オーブル色シルト | 28 植物遺体を大層に含む | 43 10Y4/4 2.5Y6/2 黄褐色粗砂シルト |
| 11 10Y4/3 黄色粘質シルト | 29 2.5Y6/1 区中粗砂 | 44 10Y5/1 黄色粘質シルト、炭化物を含む |
| 12 7.5Y4/2 黄色オーブル色シルト | 30 2.5Y6/1 区中粗砂 | 45 10Y4/4 黄色粘土、炭化物を大層に含む |
| 13 5Y6/3 オーブル色粗砂シルト | 31 2.5Y6/1 区中粗砂 | 46 10Y4/4 黄色粘土 |
| 14 5Y6/2 黄色オーブル色シルト | 32 2.5Y6/1 黄色粘質シルト | 47 10Y2/1 黄色粘土、炭化物を含む |
| 15 5Y6/2 黄色オーブル色シルト | 33 2.5Y6/1 区中粗砂 | 48 10Y3/1 オリーブ色粘土、10Y6/1 黄色粘土入 |
| 16 5Y6/2 黄色オーブル色中粗砂 | 34 2.5Y6/1 黄色粘質シルト | 49 10Y6/1 黄色粘土 |
| 17 5Y6/4 オーブル色粗砂シルト | 35 2.5Y6/1 黄色粘質シルト | |
| 18 2.5Y6/2 黄色粘質シルト | 36 2.5Y6/1 黄色粘質シルト | |

第116図 Ba区東壁土層断面図(縮1:50/横1:100)



第117図 Ba区NRO3・01遺構図 (1:100)



第118図 Ba区中世～近世遺構図 (1:100)

中世～近世

水田と島畑

I層上位において中世～近世の耕作地（の痕跡）を検出した（第118図）。B a区北端付近が島畑、北端付近を除くB a区全域が水田に相当していたと考えられる。I層中には尾張型山茶碗（99～108）、東濃型山茶碗（109～116）、15世紀後半のロクロ調整土師器皿（117）、瀬戸陶器片口鉢（118）、大窯陶器腹皿（119）、捕鉢、丸皿などの連房製品（120～125）など、12～18世紀の各時期の遺物が散見される。126は匣鉢で、口縁部に連続する敲打による器面剥離が認められることから、灰落としなどに転用されたことが推定できる。これらの遺物から、B a区周辺は中世以降、低湿な埋没河川上が水田に、周囲の高燥な自然堤防上が島畑にそれぞれ移行し、近世に継続したと考えられる。

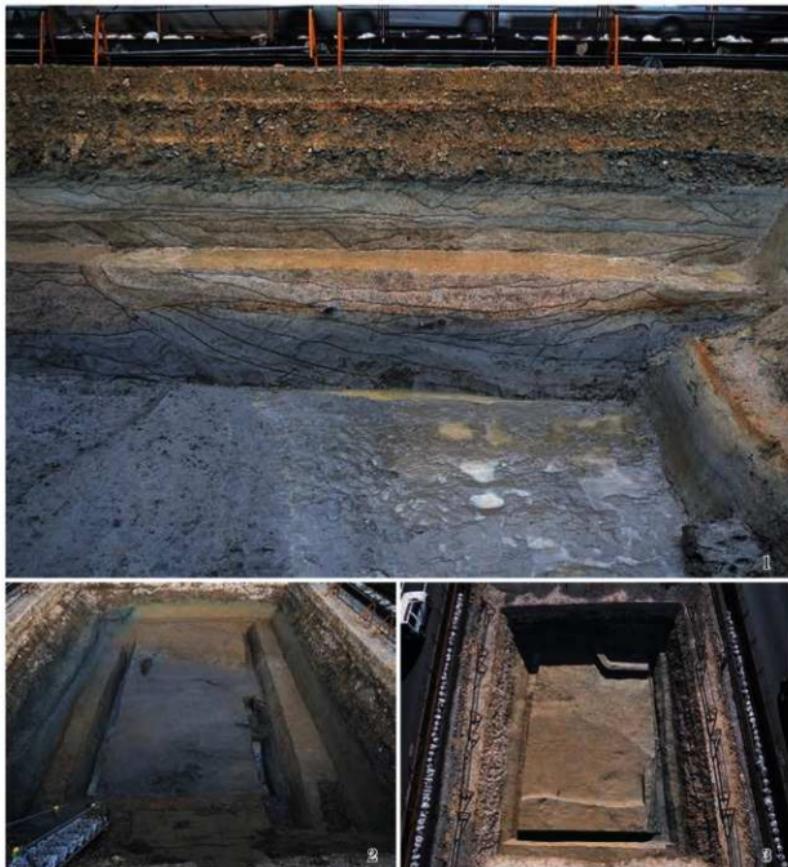
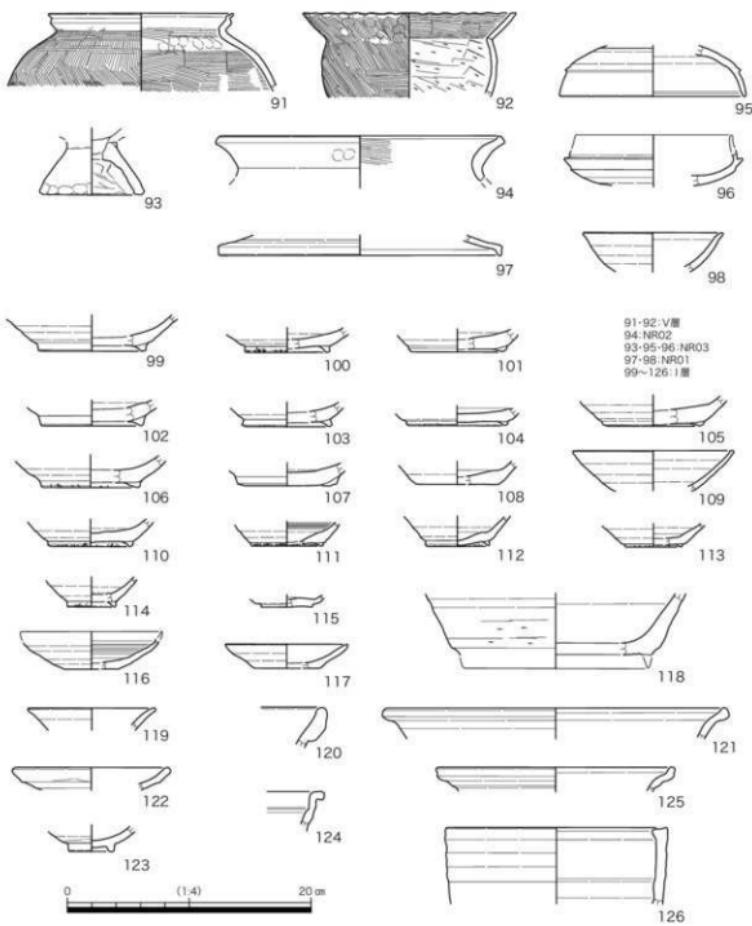


写真43 B a区土層断面/NR01/中世～近世遺構

1：東堀土層断面 2：NR01全景 3：中世～近世遺構全景



第119図 B a区出土遺物実測図 (1:4)

(3) Bb区

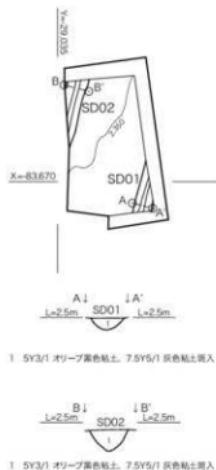
層序と検出遺構

Bb区ではIV層（灰色砂質シルト層）上位において古墳時代中期の土器群、V層（黒色粘土層）下位において古墳時代初頭の遺構を検出した（第121図）。調査区が狭小なこともあって、各時期の堆積層を順次掘削したもの、古代以降の遺構は確認されなかった。

古墳時代初頭

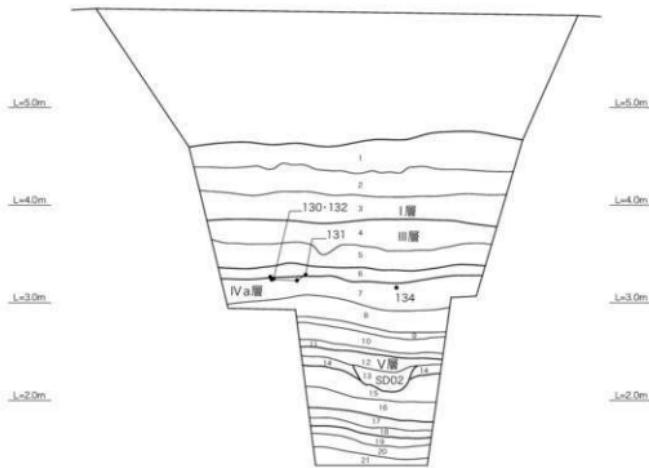
SD01・02

V層下位において北東—南東方向に通じる2条の小溝を検出し、SD01・02とした（第120図）。溝は幅約0.4m、深さ約0.2mで、2条の溝の間隔は約1.6mである。埋土はV層から連続する黒色粘土層で、基盤層に由来する灰色粘土が塊状に含まれるも、V層からは明確に区別されない。V層中からは、土師器甕（127）、高杯（128）、バレス壺（129）などが出土した。これらはおよそ廻間I式後半に対比され、遺構の年代も3世紀前半と推定される。



第120図 Bb区古墳時代初頭遺構図

(1:100)



- | | | |
|--|---|---|
| 1 10Y7/2 黄白色粘質シルト | 8 7.5Y4/1 黄白色粘質シルト、炭化物を含む | 16 10Y5/1 黄色粘土、炭化物を縦状に含む |
| 2 10Y3/1 オリーブ黄色粘土 | 9 7.5Y5/1 黄色中粒砂 | 17 10Y2/1 黄色粘土 |
| 3 7.5Y4/1 黄白色粘土 | 10 7.5Y4/1 黄色粘土、炭化物を大量に含む | 18 7.5Y4/1 黄色粘土、炭化物を縦状に含む |
| 4 7.5Y3/2 黄オリーブ色中粒砂 | 11 10Y6/1 黄色粘土 | 19 7.5Y4/1 黄色粘土、炭化物を縦状に含む |
| 5 7.5Y5/1 黄色砂質シルト | 12 7.5Y2/1 黄色粘土、炭化物を含む | 20 7.5Y4/1 黄色粘土と7.5Y7/1 黄白色粘土の互層、
植物遺存を大量に含む |
| 6 7.5Y4/1 黄色砂質シルト、
鉛物少塵混じる、細粒砂を互層状に含む | 13 5Y3/1 オリーブ黄色粘土、7.5Y5/1 黄白色粘土混入 | 21 10Y6/1 黄色粘土 |
| 7 10Y4/1 黄色細粒シルト | 14 7.5Y3/1 オリーブ黄色粘土、炭化物を含む | |
| | 15 7.5Y4/1 黄色粘土 | |
| | 16 7.5Y4/1 黄色粘土 | |
| | 17 7.5Y4/1 黄色粘土 | |
| | 18 7.5Y4/1 黄色粘土 | |
| | 19 7.5Y4/1 黄色粘土 | |
| | 20 7.5Y4/1 黄色粘土と7.5Y7/1 黄白色粘土の互層、
植物遺存を大量に含む | |
| | 21 10Y6/1 黄色粘土 | |

第121図 Bb区東壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

古墳時代中期

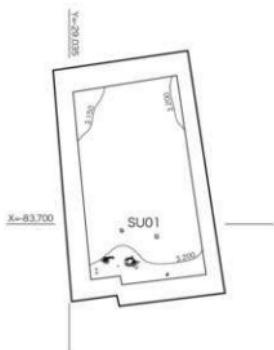
IV層中でも上位の層理面付近(IV a層)において土器群SU01を検出した(第122・123図)。土器群は調査区南西の一画に分布するが、調査区の制約から、分布範囲は確定できなかった。土器群は、甕3点(130～132)、その他土製品として輪羽口1点(133)を個体識別した。なお、輪羽口が出土した周辺を精査したもの、鉄滓や微小鉄片などの鍛治関連遺物は検出されず、付近における焼土や炭化物の含有も顕著でなかった。

131は口縁部が内凹する形態、体部上半の調整などから、布留式あるいはその流れを汲む甕とした。内面のケズリ調整は失われ、器壁も厚い。口縁部に断続的な沈線を認める。

SU01

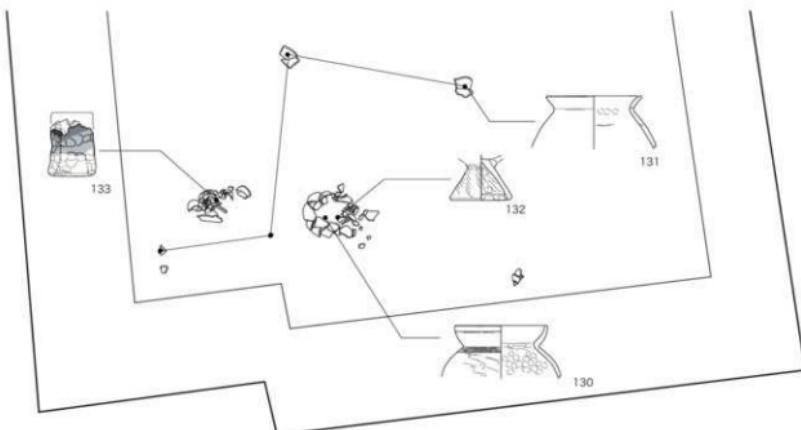
布留式甕

輪羽口



第122図 B b区古墳時代中期遺構図(1:100)

132はS字甕D類新段階で、松河戸II式前半に対応する。輪羽口は、基部がわずかに広がる形態で、外径7.4cm、内径4.2cm、基部後端の外径は7.9cmである。先端部分は欠失するが、外面先端部側に幅2～3cmの黒色化した部分が確認されるので、全長10cm程度の寸胴の形態が想定されるであろう。基部側は指の押圧によって整えられ、内面はやや曖昧なヘラケズリが施される。色調は、先端部側から黒色、白色(幅2～4cm)に熱変化する。なお、熱変化していない部分(被熱前)の色調は淡橙色である。残存する黒色部分には多孔質に溶



第123図 B b区SU01遺物出土状態図(1:20)



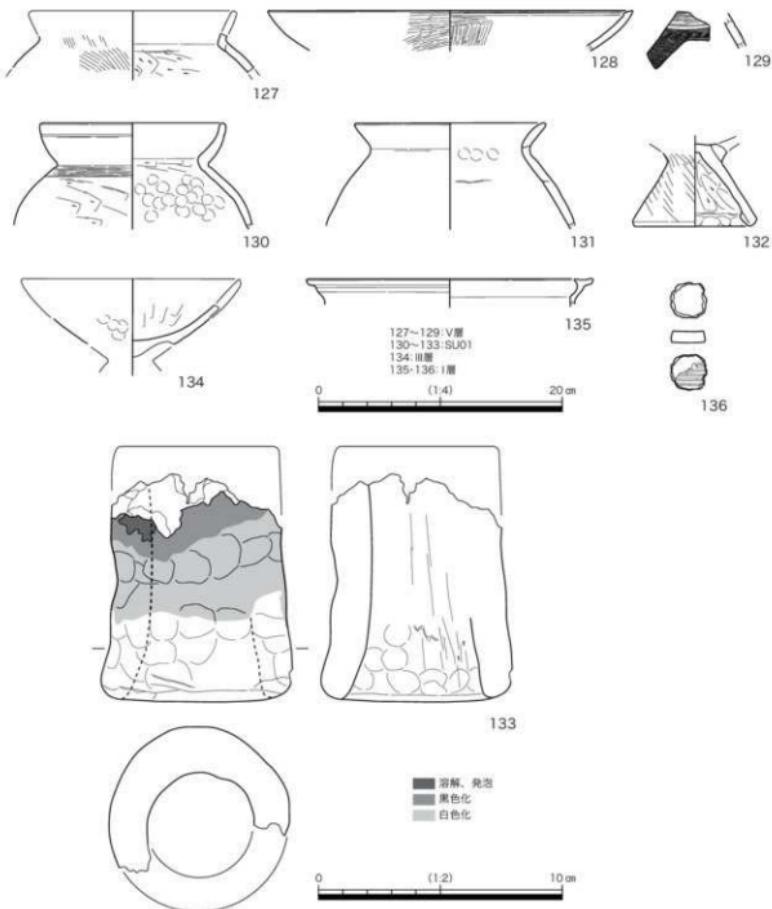
1



2

写真44 B b 区古墳時代初頭遺構/SU01

1：古墳時代初頭遺構全貌 2：SU01遺物近景



第124図 B b区出土遺物実測図 (1:4 / 1:2)

解、発泡した部分もわずかながら認められる。胎土中には砂粒が多く含まれる。共伴した松河戸II式前半の土器群から、5世紀前半の年代が与えられる。

近世

I層からは近世の遺物(135・136)が出土した。遺構としては確認できなかったが、B a区と同様、B b区の全域が水田に相当していると考えられる。

松河戸II式前半

(4) C区

層序と検出遺構

C区ではI層に対応する黒褐色シルト層上位において近世の耕作地、I層下位において古代の遺構、IV層に対応する灰色粘土層中において古墳時代前期の土器、V層（黒色粘土層）下位において古墳時代初頭の遺構を検出した（第125図）。

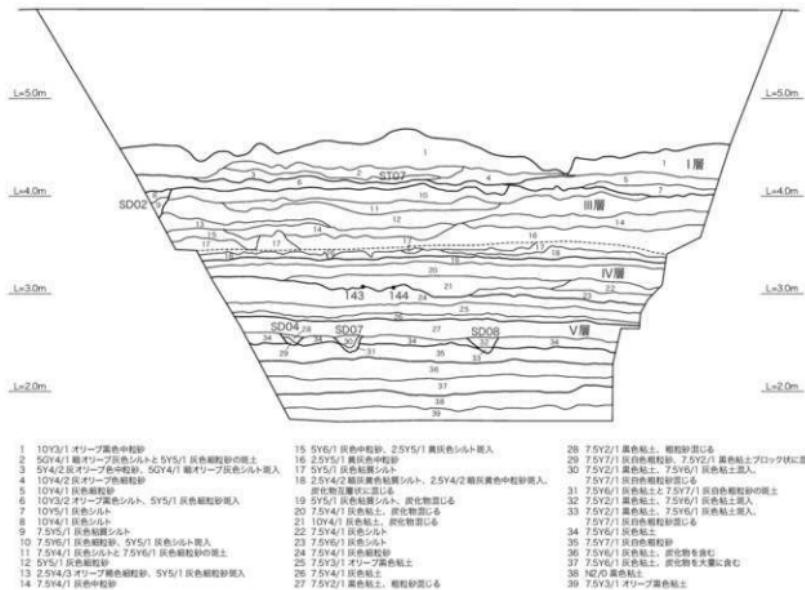
古墳時代初頭

SD04～08

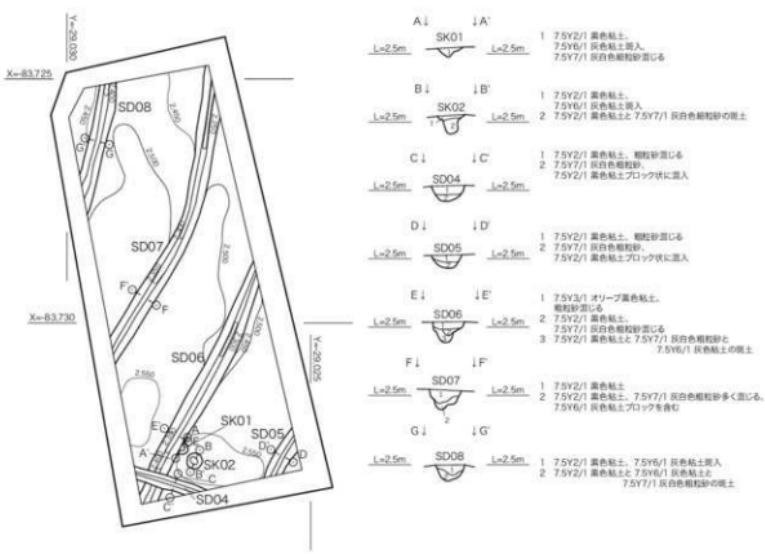
V層下位において北東～南東方向に平行して通じる4条の小溝SD05～08と、それに直交する1条の小溝SD04を検出した（第126図）。なお、V層は周辺調査区に堆積するV層と比較して、粗粒砂を多く含有する傾向が認められた。溝はBb区同様、幅約0.4m、深さ約0.2mで、溝の間隔は1.6m前後とほぼ一定している。溝内には上層にV層から連続する黒色粘土層、下層に基盤層に由来する灰色粘土が塊状に含まれる黒色粘土層が堆積する。SD07、SD06からそれぞれ土師器台付甕（137）、有棱低脚高杯（138）、V層からは、土師器台付甕（139）、高杯（140～142）などが出土した。溝内、V層中出土遺物とも、およそ週間にI式後半に対比され、遺構の年代も3世紀前半と推定される。

古墳時代前期

IV層中の上位（IVb層）において古墳時代前期の土師器高杯（143）、小型壺（144）などを検出した。それぞれ杯部と体部が完存するが、同層中における遺物の出土は散漫で、



第125図 C区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

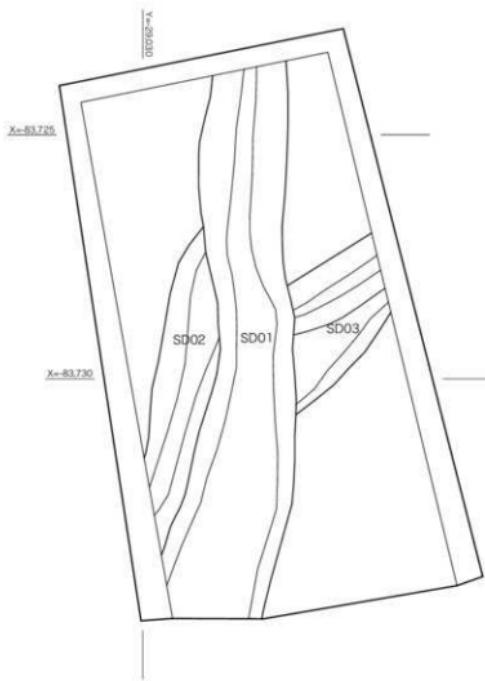


第126図 C区古墳時代初頭遺構図 (1:100)



写真45 古墳時代初頭遺構

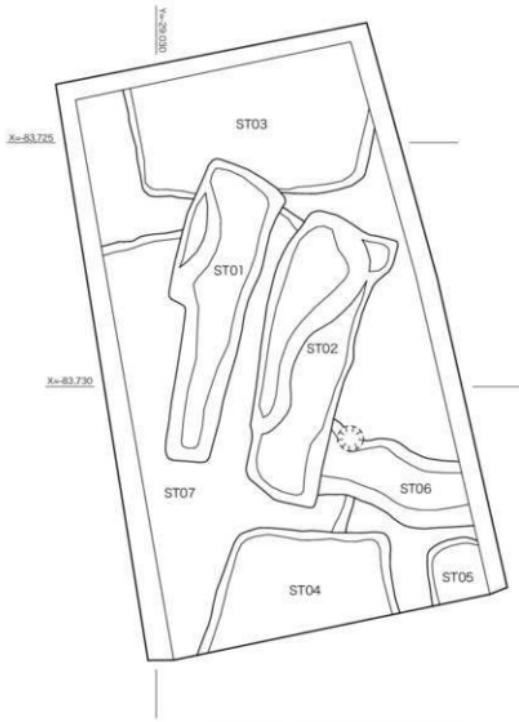
1: 棚出状況 2: 完掘状況



第127図 C区古代遺構図 (1:100)



写真46 C区西壁土層断面



第128図 C区近世遺構図 (1:100)



写真47 C区古代/近世遺構全景

1：古代遺構全景 2：近世遺構全景

それに関係する明確な遺構は検出されなかった。これらの土器は、およそ松河戸I式後半に対比される。なお、IV層上位はD～F区の水田検出面に相当するが、層面には傾斜があり、駐畔も検出されなかった。IV層を被覆するIII層の堆積が不安定であることからも、III層堆積時に水田耕作土のかなりの部分が流出し、その結果、水田が検出されなかつと推定される。

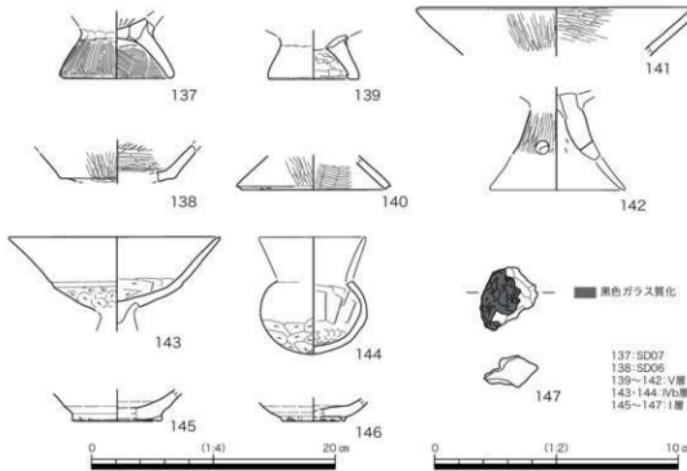
古代

I層下位において南北方向に通じる溝SD01・02と、それに重複する東西方向の溝SD03を検出した（第127図）。溝の掘形は曖昧で、層位関係の把握にはやや難がある。層序からは古代～中世の遺構として把握されるが、遺構検出時に出土した遺物は古代以前の遺物に限定されることから、古代の遺構とした。

近世

島畑と水田

I層上面において方形を基調とする落ち込みST01～07を検出した（第128図）。これらは、島畑造成時の地下げの痕跡と考えられ、地下げした部分は水田として利用されたと推測される。I層中からは山茶碗（145・146）など13～14世紀の遺物がわずかに出土した。これらの遺物は、島畑形成時期の上限を示す。147は同層中から出土した中世以降に帰属する鉄滓である。



第129図 C区出土遺物実測図 (1:100)



写真48 B a・B b・C区出土遺物

(5) D区

層序と検出遺構

D区では、II層に対応する褐色シルト層上位で中世の遺構、II層下位で古代の遺構、IV層に対応する黄灰色シルト層上位で古墳時代中期の水田、IV層中において古墳時代前～中期の土器、V層（黒色粘土層）中において古墳時代初頭の遺物、V層下位において古墳時代初頭の遺構を検出した（第130図）。なお、IV層上位で検出した水田については、E・F区を含め、F区の節において記述する。

古墳時代初頭

V層中、あるいはV層直上において古墳時代初頭の遺物が出土した（148～153）。148は土師器S字甕B類新段階、149は台付甕、150は内湾長頸甕、151・152は有段高杯である。152は径0.5～0.6cmの透孔2孔を一単位として3方に穿つ点を特徴とする。

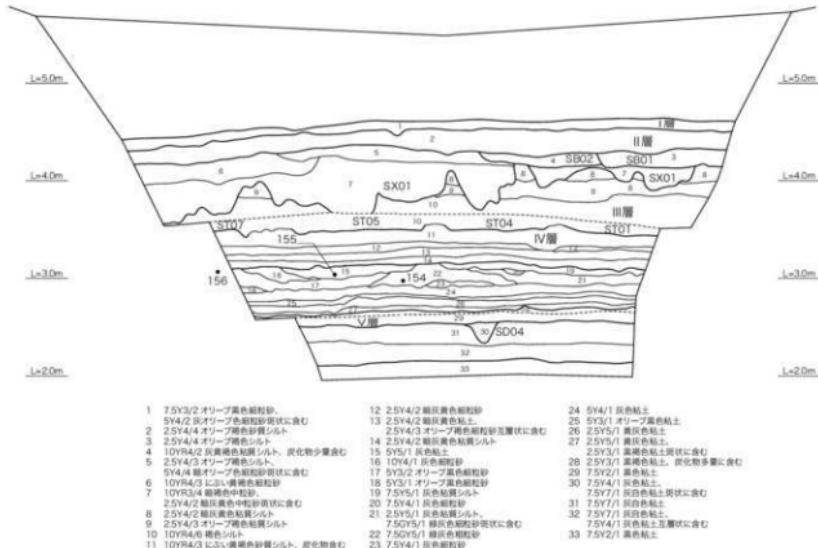
砾石

これらは遅闇I式後半～II式のいずれかの時期に帰属する。153は凝灰質泥岩製の仕上げ砥で、5面の側面を使用面とする。同一層位から出土した土器から、古墳時代初頭に対比される。

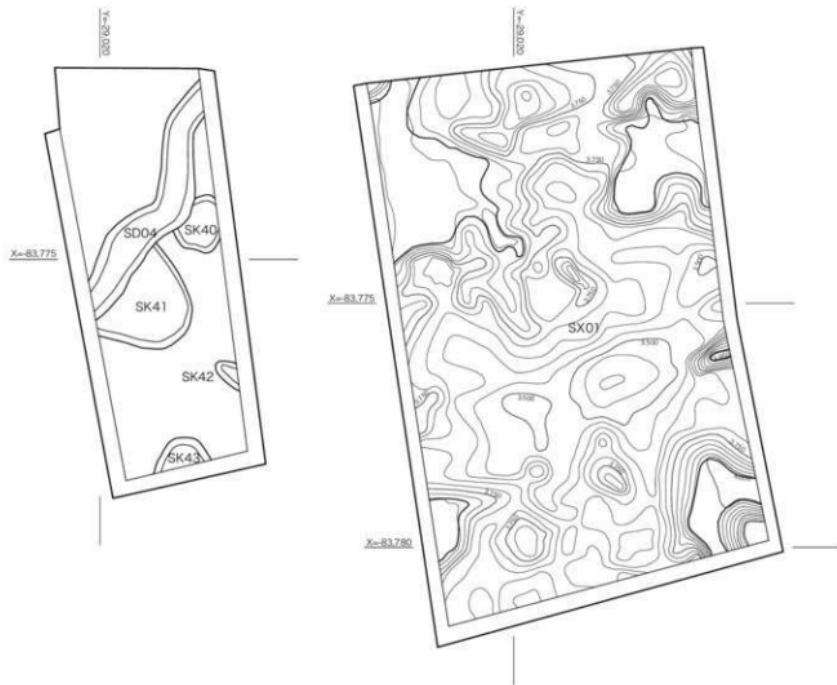
V層下位においては、蛇行しながら北東～南西方向に通じる溝SD04などを検出した（第131図）。掘形は曖昧で、遺構検出にはやや難がある。その他土坑SK40～43なども検出したが、掘り込みは明確でなく、むしろV層の取り残し部分とするのが妥当であろう。

古墳時代前～中期

IV層中において古墳時代前～中期の土師器が出土した（154～156）。土器は原形を保つ



第130図 D区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

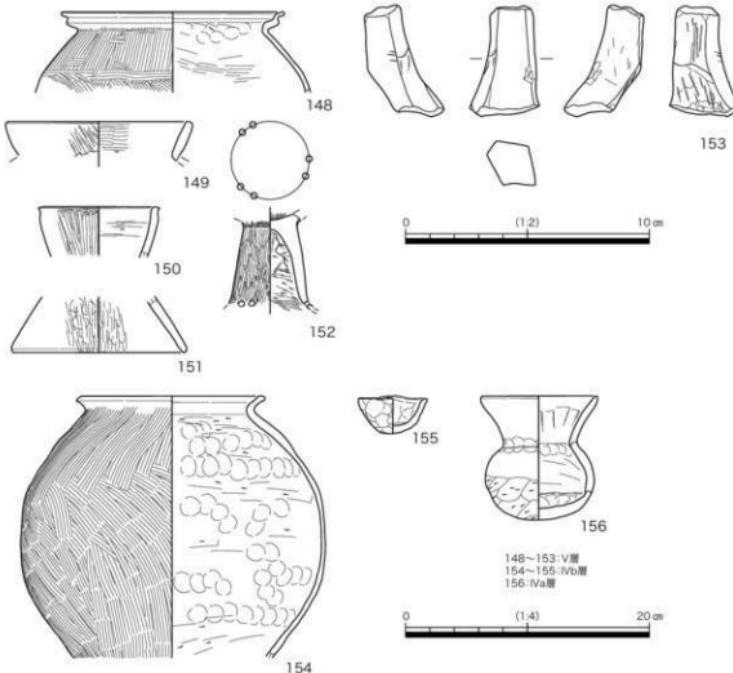


第131図 D区古墳時代初頭・古墳時代後期遺構図 (1:100)



写真49 D区古墳時代初頭／古墳時代後期遺構全景

1：古墳時代初頭遺構検出状況 2：古墳時代後期遺構全景



第132図 D区古墳時代出土遺物実測図 (1:4/1:2)

て出土するものの、それらの出土は散漫であった。また、土器の周囲にはわずかに炭化材の散布も認められたが、層中において明確な遺構は検出されなかつた。156は小型壺、154はS字甕D類新段階、155は手捏ね土器で、小型壺が標高3.0m付近の層理面上(IVa層)、S字甕と手捏ね土器はそれより下位(IVb層)において出土した。出土状況をも考慮して、前者を松河戸II式前半、後者を松河戸I式後半に対比したい。



写真50 D区IVb層遺物出土状況

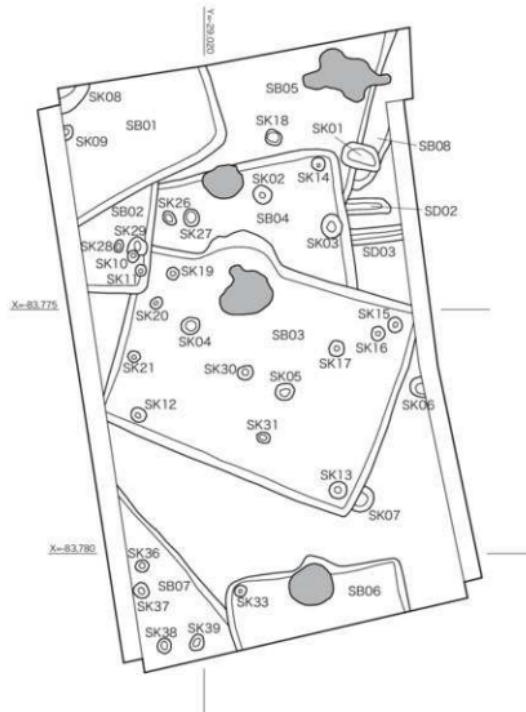
古代

II層下位において相互に重複する8棟の竪穴住居SB01～08などを検出した（第133図）。竪穴住居の埋土はII層に近似し、いずれも土質・色調変化に乏しかったため、遺構検出は容易でなかった。全形を把握できる住居は少ないが、いずれも基本的に竈を付設していると思われる。

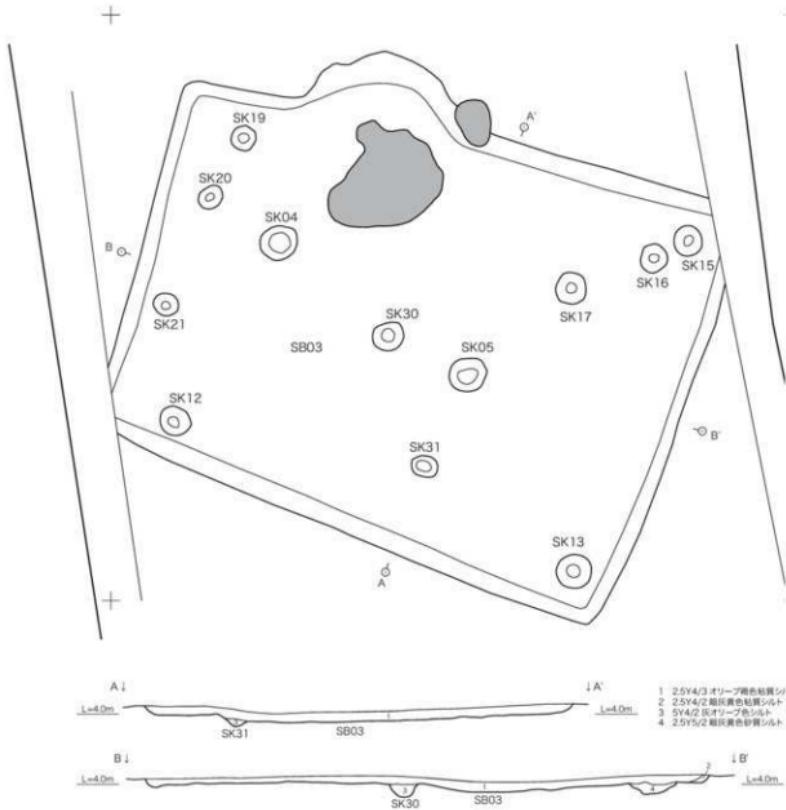
一部が失われるも、全形が把握できたSB03（第134図）は、平面形が長軸約5.8m、短軸約4.5mの長方形で、長辺となる北辺側に竈を付設する（第135図）。竈内には半裁した状態の花崗岩の円礫（165）が支脚として残され、その周囲には須恵器無台杯（163）、土師器濃尾型甌（164）などが散乱していた。石製支脚は上下両端が顕著に被熱していることから、複数回、設置されたとみられる。竈はSB04、SB05、SB06においても確認したが（第138・139・140図上）、いずれも遺存状況が良好でなく、竈の構造を詳細に把握するまでは及ばなかった。

竪穴住居

SB03



第133図 D区古代遺構図 (1:100)

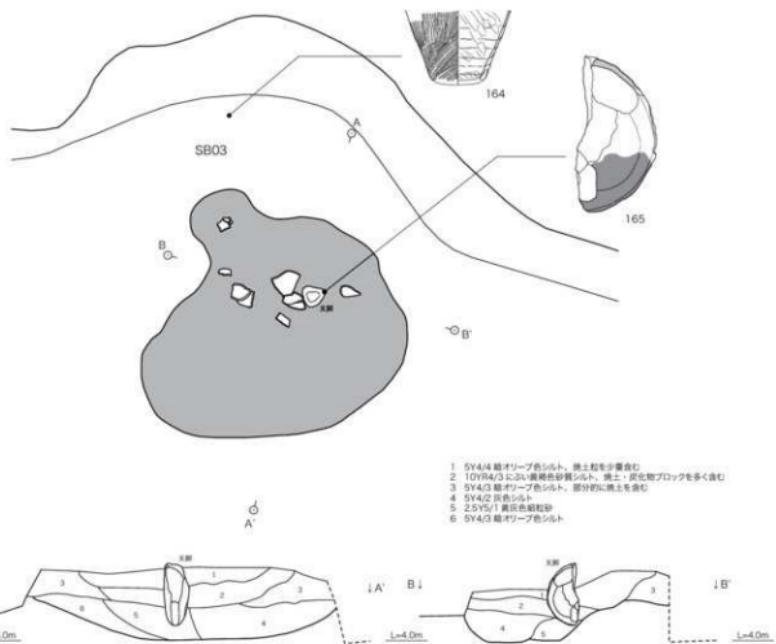


第134図 D区SB03遺構図 (1:50)

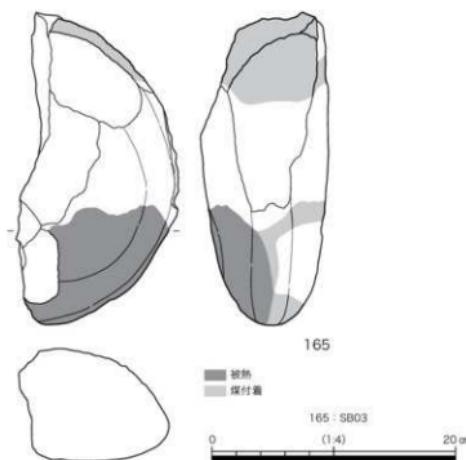
出土遺物

堅穴住居に残された遺物は乏しいが、SB01において須恵器摘み蓋（157・158）、長頸瓶（159）、SB02において須恵器無台杯（160）、SB04において土師器濃尾型壺（161・162）、SB05において須恵器無台碗（166）、摘み蓋（167）、壺（168）、土師器濃尾型壺（169・170）、SB07において土師器濃尾型壺（172）などが出土した。これらは總じて折戸10号窯式期、8世紀後半に相当する。SB06の窓内から出土した須恵器鍋（171）は、

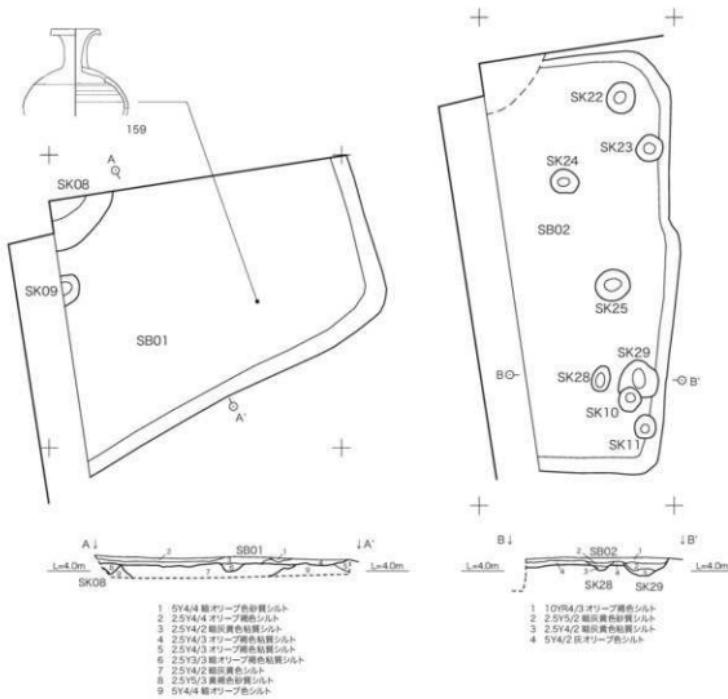
折戸10号窯式



第135図 D区SB03発掘構図 (1:20)



第136図 D区SB03支脚 (1:4)



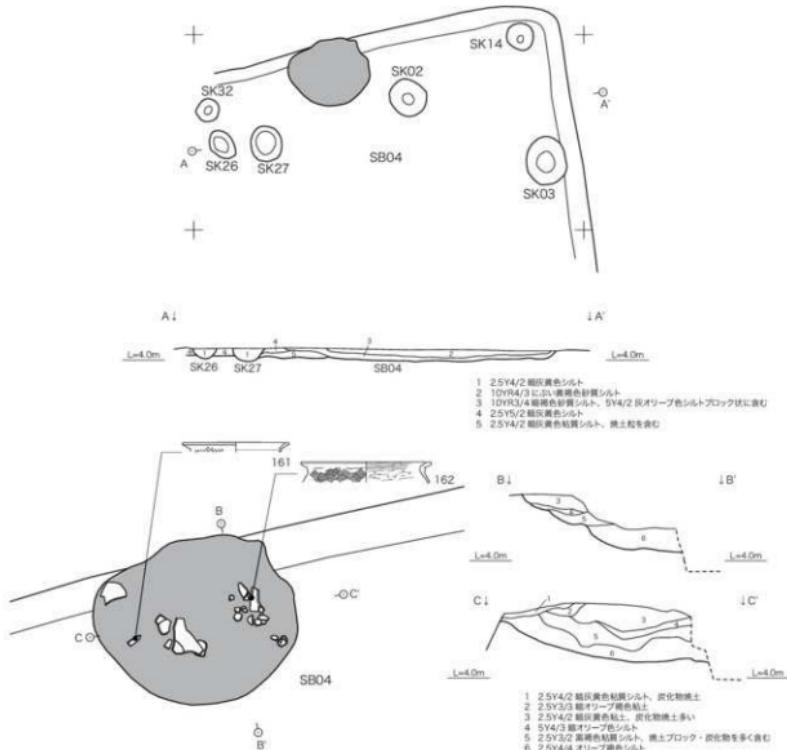
第137図 D区SB01・02遺構図 (1:50)

7世紀以前に帰属する公算が強く、他に同時期と思われる須恵器甕も出土している。これらは、下位の堆積層であるⅢ層から混入した可能性も考慮されるが、SB07が他の竪穴住居と分布域を違えていること、須恵器が壇内に残されていたことに加えて、Ⅲ層に相当するSX01埋土には遺物がほとんど含まれないことから、竪穴住居の帰属時期を示す遺物として考えたい。

古墳時代後期

II層と竪穴住居の下位にはⅢ層に相当する暗褐色中粒砂が堆積するが、暗褐色中粒砂を除去すると、下位の褐色シルト層の不安定な層面が露呈するにすぎなかった（第131図右）。層面の状からは、かなりの水流が褐色シルト層を削削した状況が推測される。砂層中から出土する遺物はごく少ないが、東山61号～東山44号窯系に帰属する須恵器蓋が砂層中に確認されること、上位に掘削される竪穴住居の帰属時期の上限が7世紀と考えられたことなどから、中粒砂が堆積した時期を6世紀後半～7世紀と考えておきたい。

II層中からは、ややまとまった量の遺物が出土した（173～191）。これらの大部分が

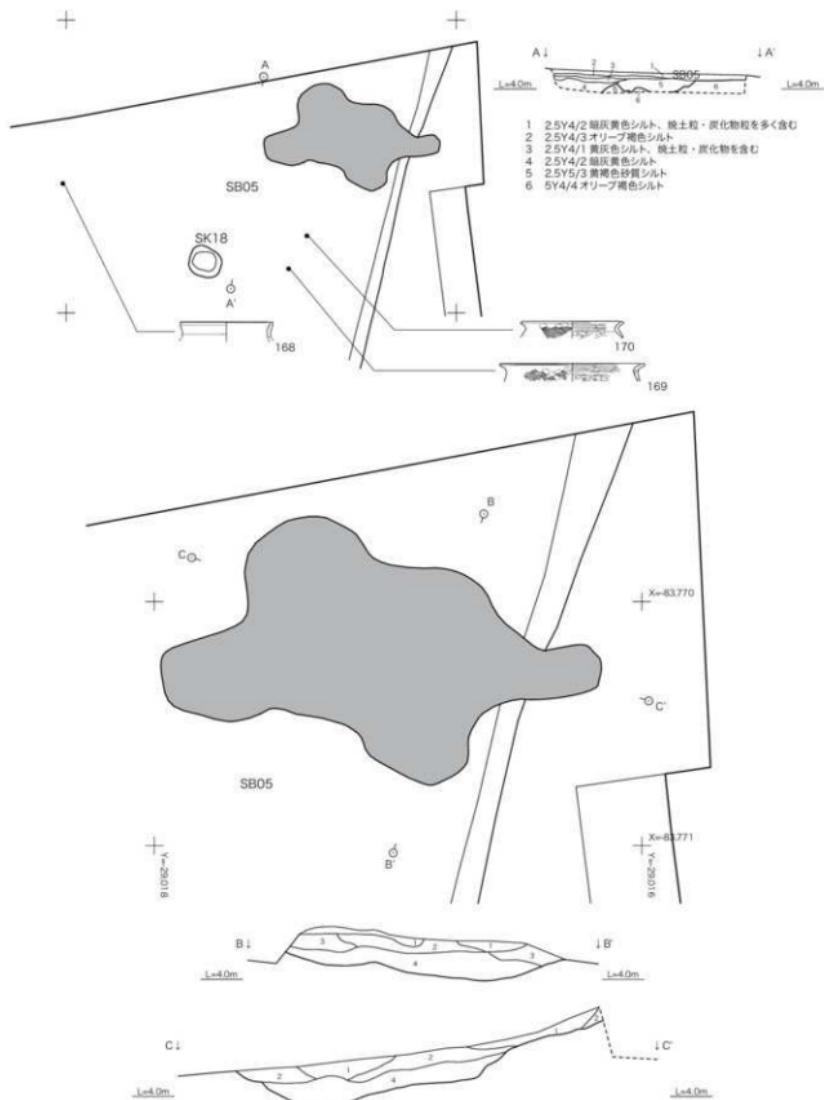


第138図 D区SB04遺構図 (1:50/1:20)

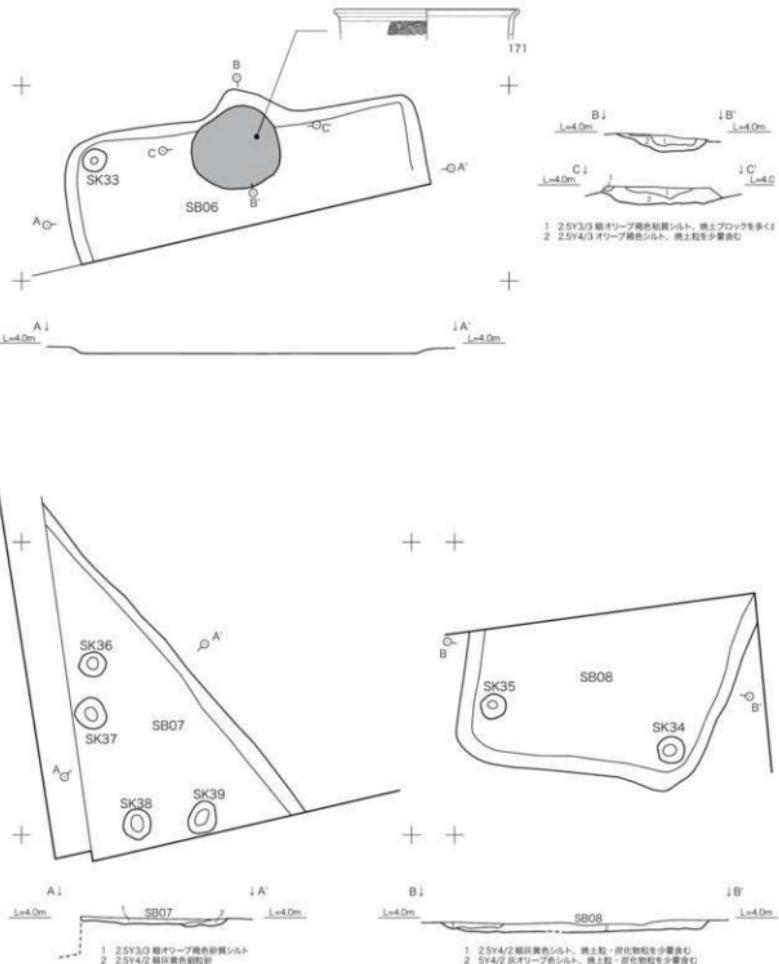
下位の竪穴住居に関係する遺物であるが、わずかに含まれる東山61号窯式～岩崎17号窯式に相当する杯(173・174)は、III層とした暗褐色シルト層の堆積時期を示唆する遺物と思われる。185は器形の復原にやや難があるが、鉢状の器形を想定した。186は甕底部で、内面に當て具痕跡として、細同心円文が残る。両者は高藏寺2号窯式前後、およそ8世紀前半に対比される。その他の須恵器(175～184)は総じて折戸10号窯式で、土師器甕(188・189)もそれに対応する時期の所産と考えられる。187は三河型甕、188・189は濃尾型甕である。三河型甕はH区においても認められ(334・335)、本遺跡における一定の使用が見込まれる点は注目される。190・191は縦羽口で、同層中より出土した遺物から、帰属時期は6～8世紀に限定されるが、8世紀に帰属する公算がより強いと考えられる。190は先端部分で、黒色に熱変化する。溶解部分は多孔質に発泡する。被熱前の色調は橙色。いずれも砂粒が少ない均質な胎土である。191も同じく先端部分で、先端側が黒色、基部側が白色に熱変化する。被熱前の色調は淡橙色。

細同心円文

三河型甕



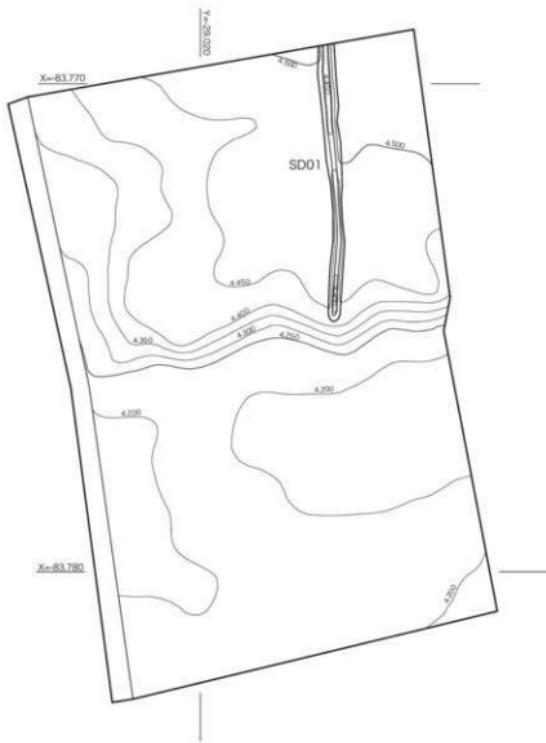
第139図 D区SB05遺構図 (1:50/1:20)



第140図 D区SB06・07・08透構図 (1:50)

中世

I層は島畑の耕作土で、その下位、II層上位において溝1条を検出し、SD01とした（第141図）。わずかに出上した第5型式の尾張型山茶碗から帰属時期を中世前期、12～13世紀と推測しておく。

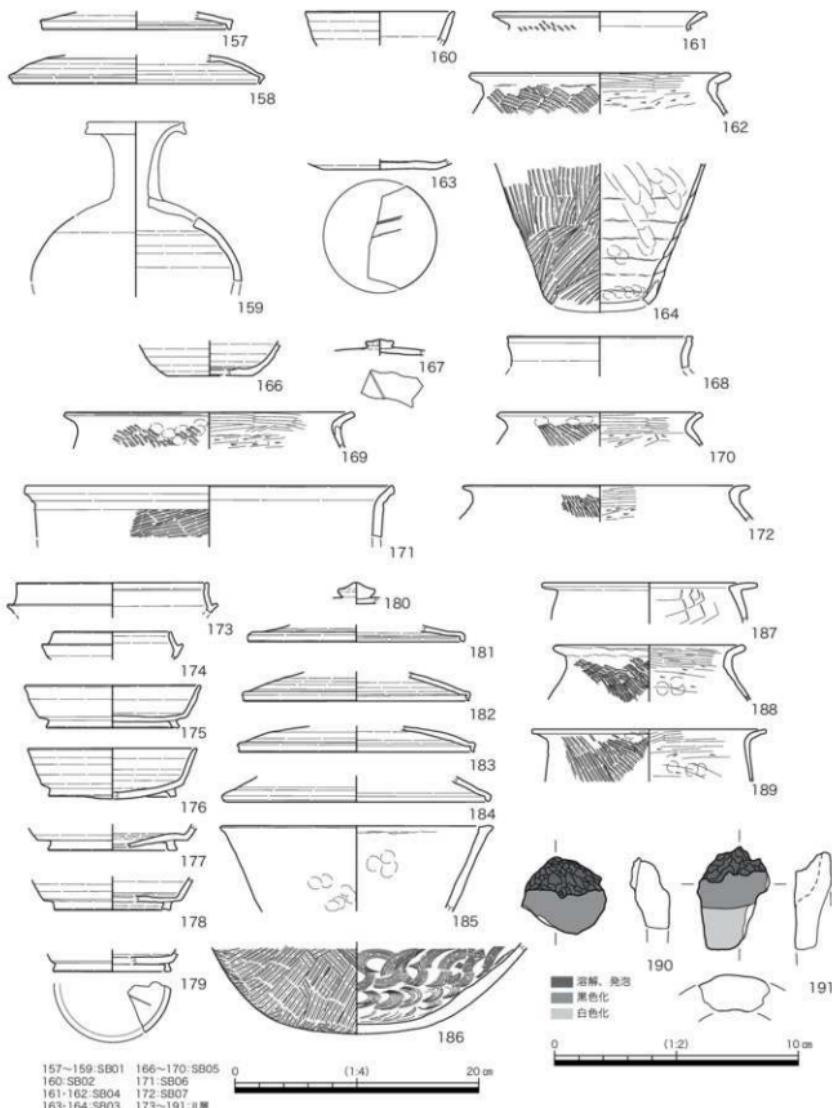


第141図 D区中世遺構図 (1:100)



写真51 D区古代／中世遺構

1：古代遺構検出状況 2：SB03全景 3・4：SB03竈 5：SB05全景 6：SB05竈 7：SB06竈 8：中世遺構全景



第142図 D区古代出土遺物実測図 (1:4/1:2)



写真52 D区出土遺物

(6) E区

層序と検出遺構

E区は、国道敷設時に標高約3.8mまで削削されていたので、I層に対応する灰白色シルト層上位からII層に対応する暗褐色粘土上位にかけて、中世以降の遺構を同時に検出した(第143図)。また、II層下位において古代の遺構、IV層に対応する青灰色粘土層上位において古墳時代中期の水田、IV層中において古墳時代前～中期の土器を検出した。IV層上位で検出した水田については、D・F区を含め、F区において記述する。

古墳時代前～中期

土器大型高杯

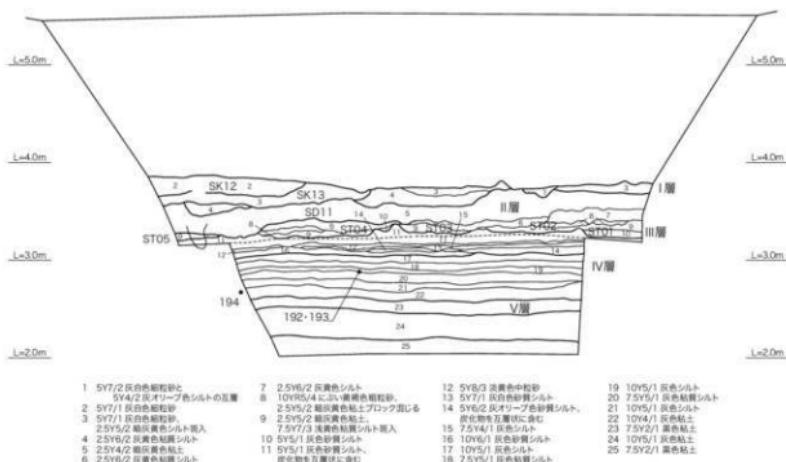
E区においてIV層(相当)層は、青灰色粘土が炭化物層と互層状に堆積する。IV層中からは古墳時代中期の土器大型高杯(192・193)、小型壺(194)が出土した。土器大型高杯は2個体が折り重なるようにして出土し、小型壺も体部が完存するも、周囲における土器の出土はごく散漫で、土器に関係する明確な遺構も検出されなかった。なお、大型高杯はIV層中でも上位(IVa層)において出土し、小型壺は同層中でも高杯より下位(IVb層)において出土したことから、前者を松河戸II式前半、後者を松河戸I式後半に対比しておきたい。192・193は「同工品」として差し支えないまでに、形態、法量、製作手法が相互に酷似する。そればかりでなく、両者の杯部内面には煤が付着することから、同一目的で使用されたことも確実であろう。

「同工品」

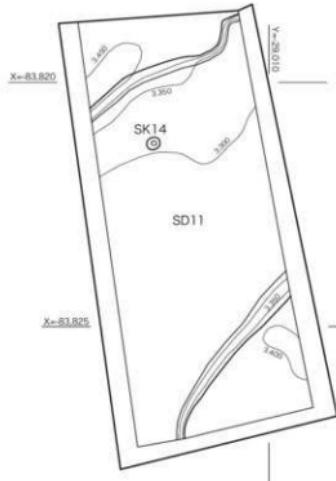
なお、V層(黒色粘土層)以下を掘削したものの、灰色粘土層と黒色粘土層が連続して堆積するのみで、遺構、遺物とも検出されなかった。

古代

II層下位において溝状の緩やかな落ち込みSD11を検出したが(第144図)、正確には

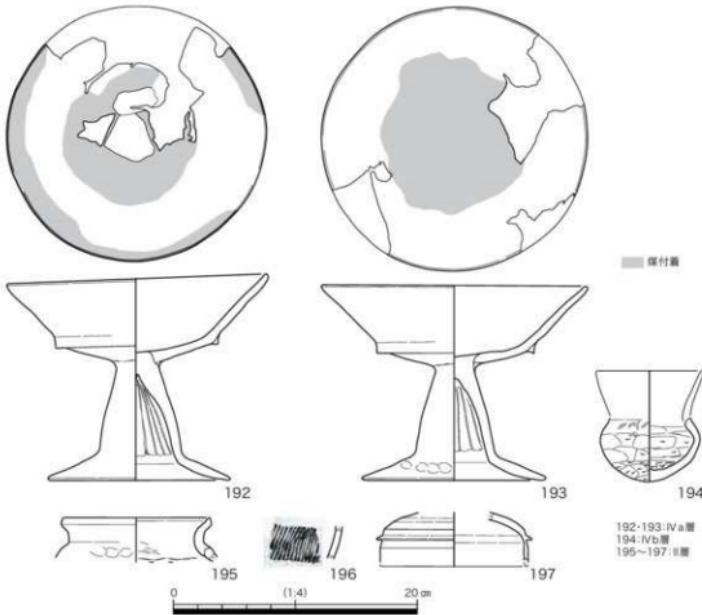


第143図 E区西壁土層断面図(縮尺50:1 横尺1:100)



第144図 E区古代遺構図 (1:100)

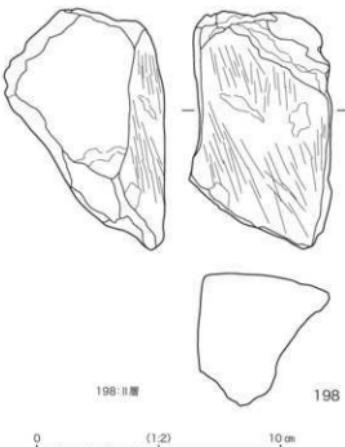
遺構ではなく、Ⅲ層上位の層理面の起伏とすべきであろう。同一面においては、他にわずかに土坑が検出されたのみである。Ⅱ層中からは土師器甕(195)、須恵器甕(196)、蓋(197)などが出土した。197はおよそ城山2号窯式に相当する。195は跳ね上げ状の口縁部を特徴とするやや独特な形態であるが、197と同時期の所産としておきたい。ただしⅡ層は、古墳時代の遺物を混じえつとも、古代の遺物を多く包含することから、Ⅱ層とその下位で検出される遺構に対しては、8世紀を中心とした年代を与えておくことが妥当であろう。198は同一層位で出土した凝灰質泥岩製の仕上げ砥である。



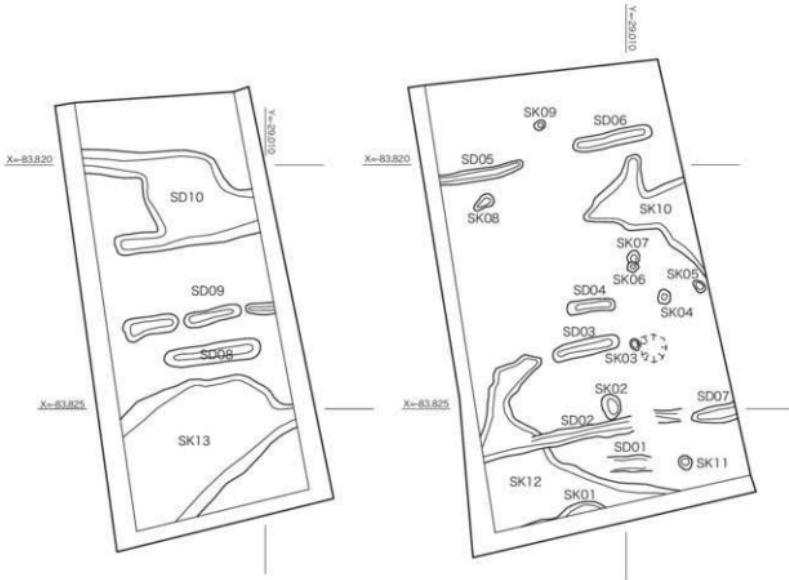
第145図 E区IV層・II層出土遺物実測図 (1:4)

中世～近世

中世以降の遺構はⅠ～Ⅱ層中で連続して検出されたので、便宜的に上位の遺構をⅠ-1面、下位の遺構をⅠ-2面に分離して調査した。Ⅰ-1面では近世以降の東西方向を基調とする小溝SD01～06と、それらの下位で細粒砂で埋積される不定形の落ち込みSK10・12などを検出した（第147図右）。Ⅰ-2面では中世以降の東西方向を基調とする小溝SD08・09とⅠ-1面と同様、細粒砂で埋積される不定形の落ち込みSK10・13などを検出した（第147図左）。出土遺物はⅠ層を含めて、中世後期の漁戸美濃陶器などがわずかに出土したのみである。



第146図 E区出土石製品実測図 (1:2)



第147図 E区中世～近世遺構図 (1:100)



写真53 E区古墳時代／古代／中世～近世遺構

1 : IVa層遺物出土状況 2 : 西壁土層断面 3 : 古墳時代水田全景・4 : 古代遺構全景 5・6 : 中世～近世遺構全景

(7) F区

層序と検出遺構

F区では、I層に対応する灰色シルト層上位で近世の遺構、II層に対応する暗褐色粘土層上位で中世の落ち込み（河川）、その下位で古代の土坑群（建物）、IV層に対応する灰色粘土層上位で古墳時代中期の水田を検出し、計4遺構面を調査した（第148図）。なお、IV層中では古墳時代中期の土器を検出した。

古墳時代中期

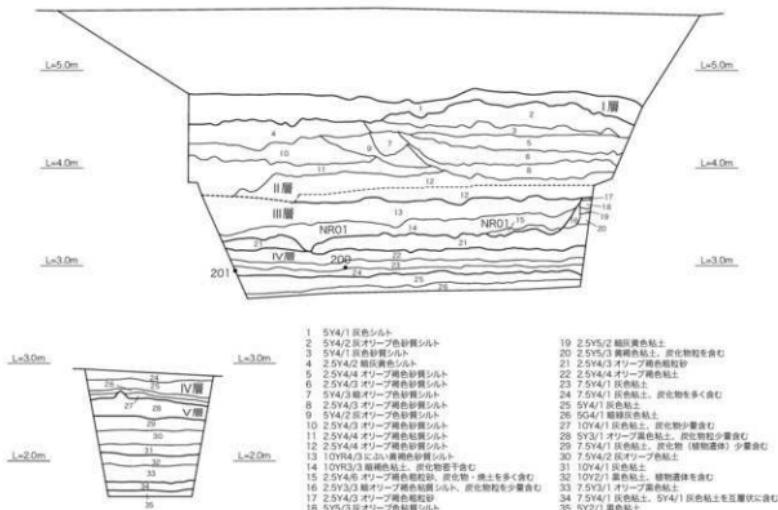
IV層は灰色粘土層と黒褐色粘土層が交互に堆積する層で、IV層中でもより上位（IVa層）で土師器直口壺（200）、高杯（201）などが出土した。これらは松河戸Ⅱ式前半に対比される。199は出土層位が明確ではなく、時期を推定する根拠を欠く。類例にも乏しく、器種、系譜についても明確にしがたい。

E区同様、IV層、III層以下を順次掘削したが、III層以下は黒色粘土と灰色粘土が交互に堆積するのみで、遺構、遺物とも検出されなかつた。

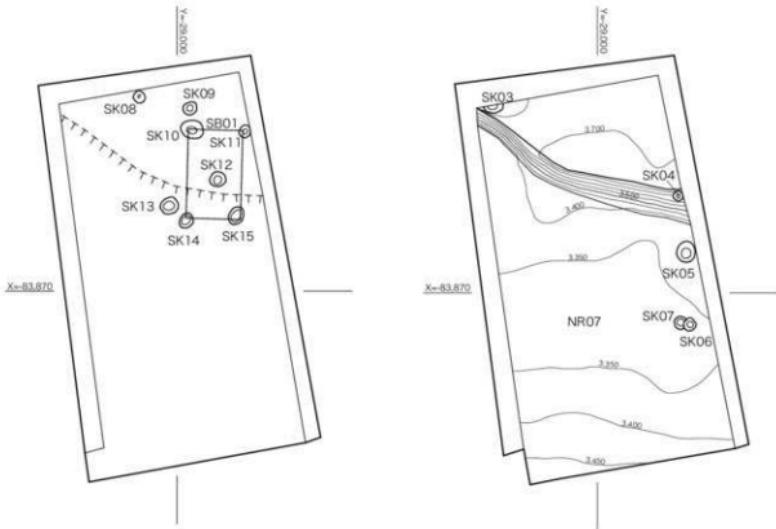
古代～中世

III層に対応する灰白色粘土層が残存する調査区北半において土坑群を検出した（第149図左）。調査区の制約上、確定性には乏しいが、掘立柱建物1棟を復原した（SB01）。II層中の遺物（202～204）などを参考にすると、建物の帰属時期は、6～8世紀のいずれかに求められる。

II層上位においては、落ち込みNR01の北岸付近を検出した（第149図右）。検出した



第148図 F区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第149図 F区古代～中世遺構図 (1:100)



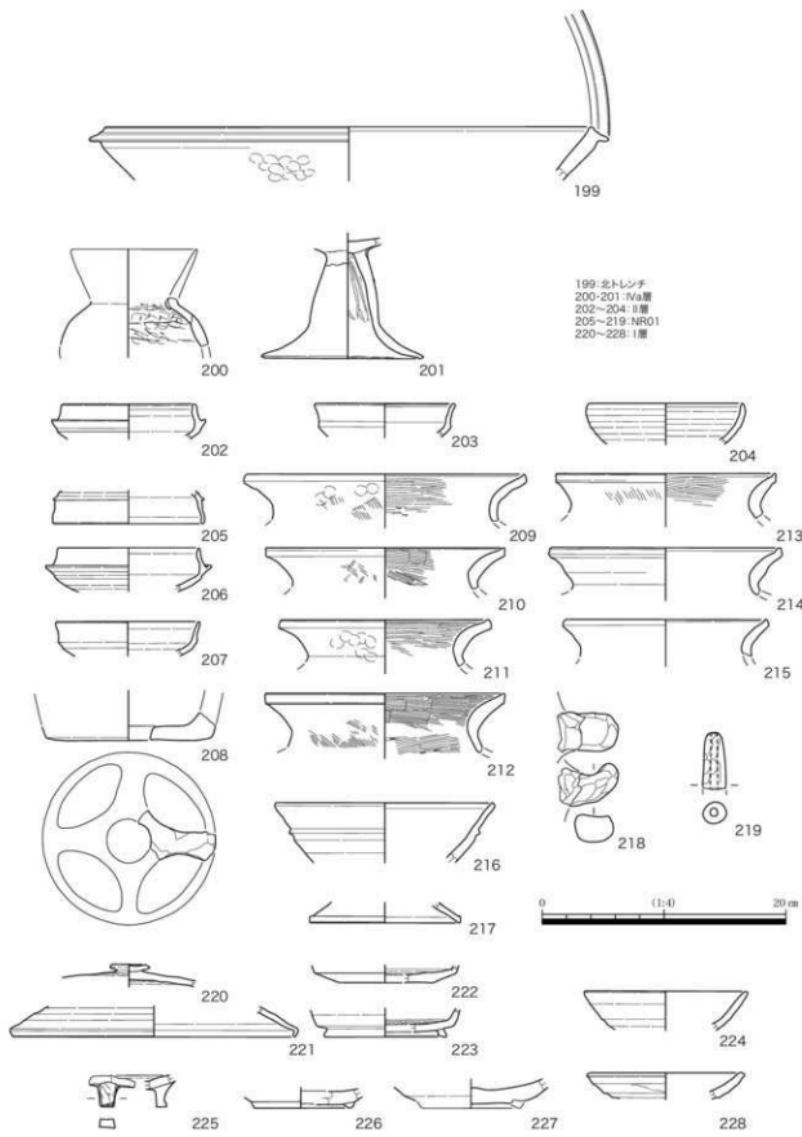
第150図 F区近世遺構図 (1:100)

層位から遺構の帰属時期は中世と考えられるが、図示した出土遺物（205～219）は、6～8世紀の遺物に限られる。これらは本米、II層に包含されていた遺物であろう。

216、217は須恵器と同様の製作によりながら軟質に焼成された土器で、同一個体の可能性がある。器形は高杯に類似するも、類例に乏しく、時期、系譜についても明確にしがたい。

近世

I層上位において方形を基調とする落ち込みSK01・02を検出した（第150図）。I層中あるいはI層上位からは、尾張型山茶碗（226・227）、瀬戸美濃陶器丸皿（228）などが出土した。



第151図 F区出土遺物実測図 (1:4)

水田

D～F区を通じ、IV層上位において古墳時代中期の水田を検出した（第153図）。水田は自然堤防状微高地から派生する緩傾斜面を利用して配置され、D、E、F区の検出面の標高はそれぞれ、3.5、3.2、3.1m前後である。なお、C、G区では水田相当層が確認されるも、耕作土の大部分はすでに流出したとみられ、水田は検出されなかった。

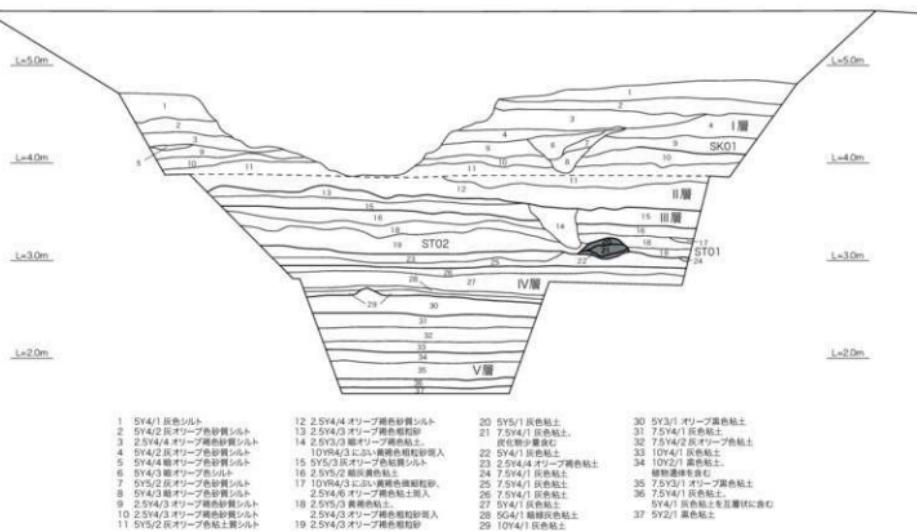
F区は、粗粒砂によって水田面が被覆されるため（第152図）、大区画を構成する畦畔は良好に残存し、高さ約0.2mの畦畔を容易に検出することができた（第154図右下）。しかし、小区画を構成する畦畔は明確ではなく、水田の埋没と同時に大部分が流出したものと考えられた。その一方、主としてシルトと粘土の斑状の堆積物によって被覆されるE区（第154図右上）、III層とした中粒砂層との間に褐色シルトが堆積するD区（第154図左上）では、小区画を構成する畦畔を検出したものの、大区画に対応する畦畔は残存が良好でなく、明確にそれを識別することは難しかった。仮にD区中央で南北に通じる畦畔を大区画に対応する畦畔として想定するなら、D区からF区を通じる基幹的な大区画を復原することも可能かと思われる。小区画については、D・E区の検出状況から、短辺（南北辺）2～3mを基本単位とするとみられる。

水田の帰属時期は、IV層中でも上位に5世紀前半（松戸戸II式前半）の遺物が含まれること、IV層を被覆する田層の堆積時期がD区において6世紀後半、あるいはG区において5世紀後半と推定されることから、5世紀のいずれかの時期と考えられる。

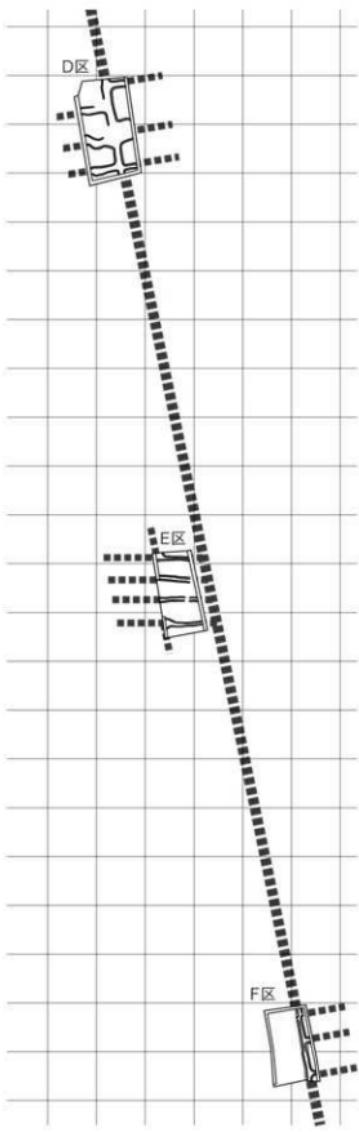
大区画

小区画

帰属時期



第152図 F区北壁土層断面図（縦1:50/横1:100）



第153図 D・E・F区古墳時代水田遺構全体図 (1:500)

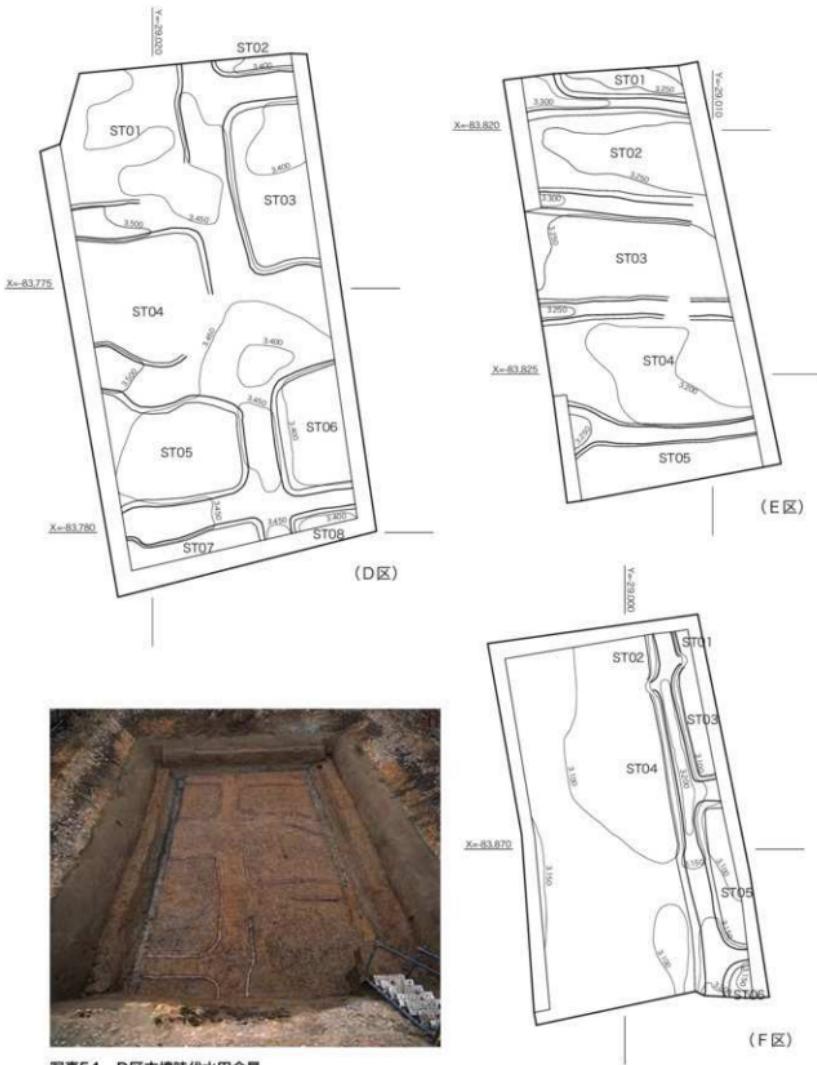


写真54 D区古墳時代水田全景

第154図 D・E・F区古墳時代水田遺構図 (1:100)



写真55 F区古墳時代／古代～中世遺構

1・2：古墳時代水田全景 3・4：古墳時代水田畦畔土層断面 5・6：古代～中世遺構全景

(8) G区

G区におけるI～III層の堆積は總じて不安定であったが、I層に対応する灰色シルト層上位において近世の遺構、II層に対応する暗褐色粘土層上位で中世の落ち込み（河川）、その下位で古墳時代中期の落ち込み（河川）、IV層に対応する灰色粘土層上位で古墳時代中期の溝を検出し（第155図）、計4遺構面を調査した。なお、IV層中では古墳時代中期の土器を検出した。

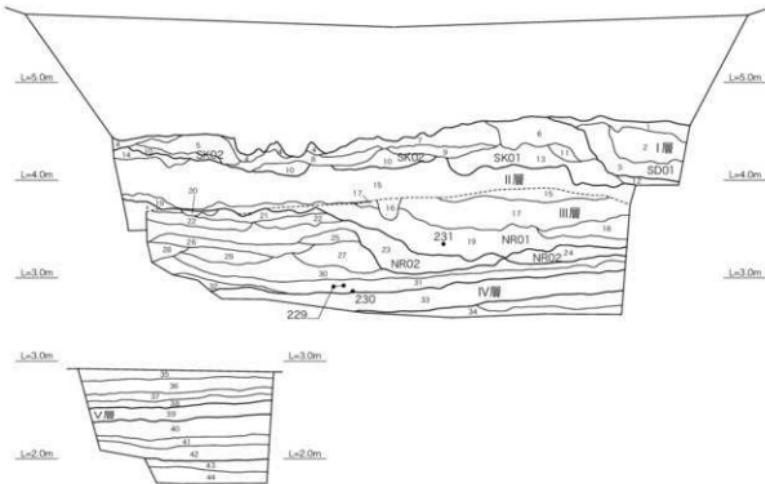
古墳時代中期

IV層上位（IVa層）において、松河戸II式前半に対比される小型壺（229・230）を検出した。III層は主として中粒砂がレンズ状に連続して堆積する不安定な層で、その上位において検出した落ち込みをNR02とした。NR02は黄灰色中粒砂と灰色粘土によって埋積され、III層と同様に不安定な堆積環境にあったことを示唆している。出土状況を明確に把握できなかったが、NR02には231、232などが含まれていたとみられる。231は城山1号窯式に相当する須恵器蓋、232は外面に平行タキを施した酸化焰焼成の土器で、

層序と検出遺構

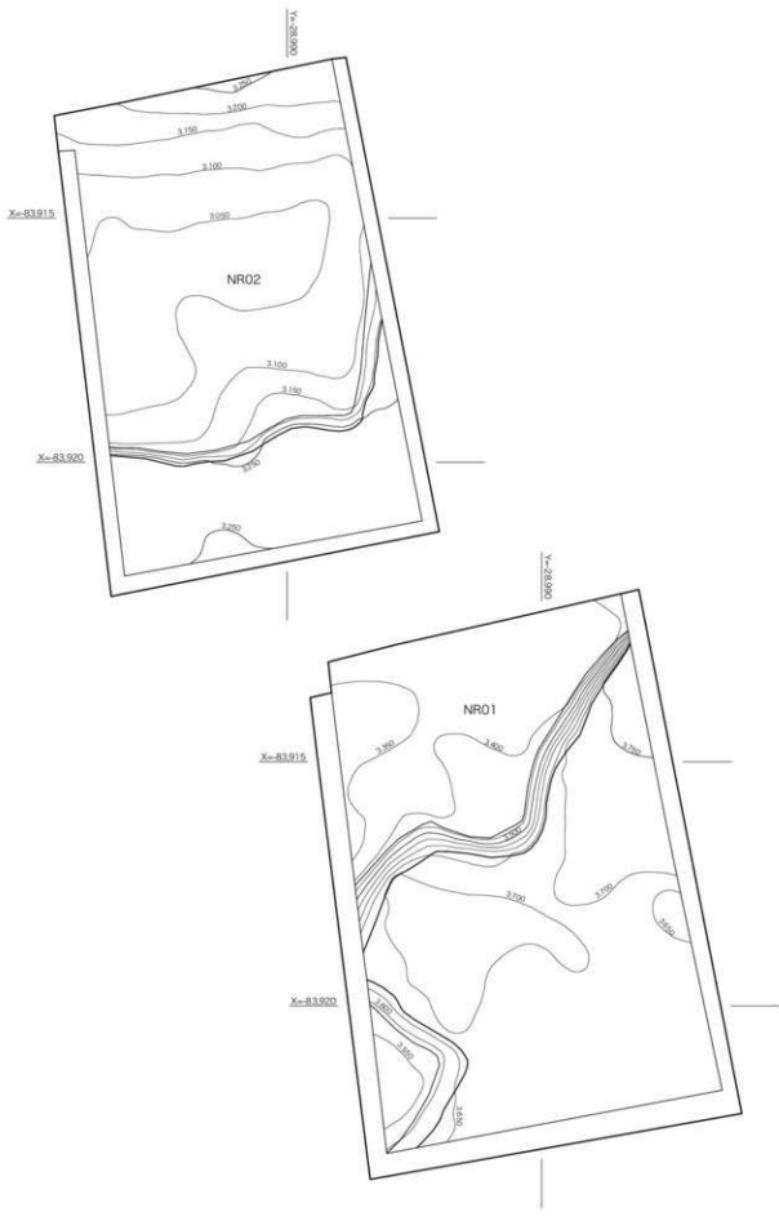
NR02

朝鮮半島系軟質土器

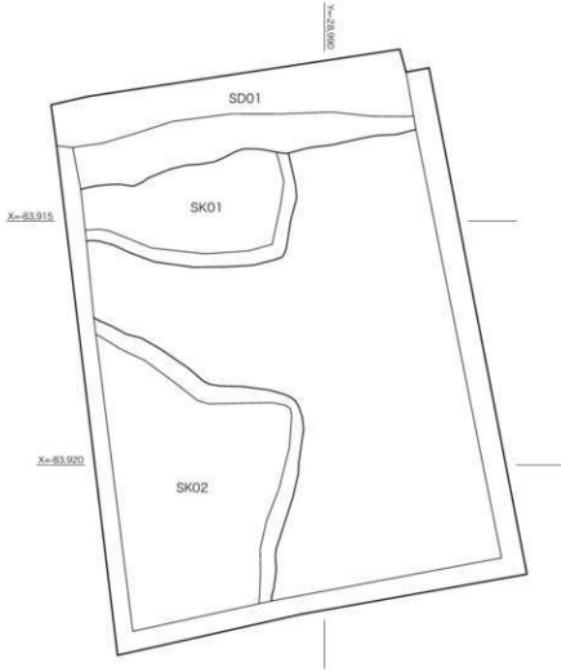


- 1 2.5Y5/2 褐灰黄色細粒砂
2 5Y4/1 黄色粗粒砂と 10Y4/1 黄色粗粒砂と入
 7.5Y4/2 黄オリーブ色粗粒砂の斑土
3 2.5Y4/1 黄色粗粒砂と 10Y4/1 黄色粗粒砂
4 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗粒砂、5Y2/1 オリーブ褐色シルト層入
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂、5Y4/1 黄色シルト層入
6 10Y4/1 黄色粗粒砂、N2/D 黄色粗粒砂と入
7 7.5Y4/2 黄色粗粒砂と入
8 2.5Y4/2 黃褐色粗粒砂と 5Y6/1 黄色粗粒砂の斑土
9 2.5Y5/3 黄褐色シルト、2.5Y4/2 黄色粗粒砂の斑土
10 2.5Y5/2 黃褐色粗粒砂
11 10Y4/1 黄色粗粒砂と入
12 10Y3/2 オリーブ褐色粗粒砂、7.5Y7/1 黄色粗粒砂と入
13 5Y5/1 黄色粗粒砂と 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト層入
14 10Y5/2 オリーブ褐色シルト、5Y4/2 黄オリーブ色粘土層入
15 7.5Y4/2 黄オリーブ色粘土
- 16 5Y5/1 黄色シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト層入
17 2.5Y4/2 黃褐色粗粒砂と 5Y6/1 黄色粗粒砂の斑土
18 7.5Y4/1 黄色粗粒砂と 5Y4/1 黄色粗粒砂と入
19 10Y4/1 黄色粗粒砂と 2.5Y4/2 黄褐色粗粒砂の斑土
20 5Y4/1 黄色粗粒砂と 2.5Y4/2 黄褐色粗粒砂の斑土
21 10Y4/2/2 黄褐色粗粒砂と 2.5Y4/4/2 黄褐色粗粒砂の斑土
22 2.5Y4/1 黄色粗粒砂と 2.5Y4/4/2 オリーブ褐色粗粒砂の斑土
23 2.5Y4/2 黄褐色粗粒砂と 2.5Y4/4 黄褐色粗粒砂の斑土
24 7.5Y4/1 黄色粗粒砂と 2.5Y4/2 黄褐色粗粒砂の斑土
25 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗粒砂
26 10Y4/3/3-5 黄褐色粗粒砂
27 2.5Y4/2 黄褐色粗粒砂
28 10Y3/3 黄褐色粗粒砂
29 7.5Y4/1 黄色中粒砂と 10Y4/1 黄褐色粘土の斑土
30 5Y4/2 黄オリーブ褐色粗粒砂と 10Y4/1 黄褐色粗粒砂と
 10Y4/6 黄褐色粗粒砂と
31 10Y4/1 黄色粗粒砂と 10Y4/1 黄色粗粒砂の斑土
32 10Y4/1 黄色粗粒砂と 10Y4/1 黄色粗粒砂の斑土
33 7.5Y4/1 黄色土
34 10Y4/1 黄色粗粒砂と 10Y4/1 黄色粗粒砂の斑土
35 2.5Y5/2 黄褐色粗粒砂シルト、泥化物を含む
36 5Y5/2 黄オリーブ色粘土
37 5Y4/1 黄色粘土、灰化物や少く含む
38 2.5Y4/2 黄褐色粗粒砂シルト、泥化物を少く含む
39 5Y3/2 オリーブ色粘土
40 5Y4/1 黄色粘土、灰化物を少く含む
41 7.5Y4/2 黄オリーブ色粘土
42 10Y4/1 黄色粗粒砂、泥化物を少く含む
43 10Y2/1 黄色粘土
44 7.5Y3/1 オリーブ褐色粘土

第155図 G区西壁土層断面図 (縦1:50/横1:100)



第156図 G区古墳時代中期／中世遺構図 (1:100)

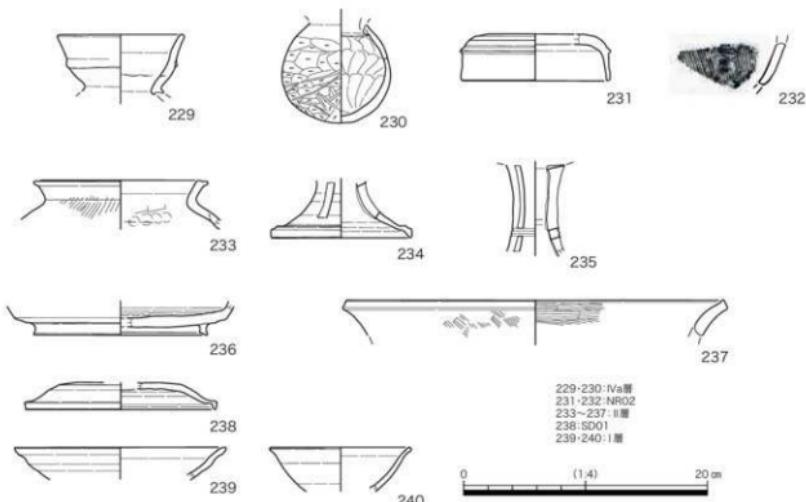


第157図 G区近世遺構図 (1:100)



写真56 G区NR02/NR01/近世遺構/土層断面

1 : NR02全景 2 : NR01全景 3 : 近世遺構 4 : 西壁土層断面



第158図 G区出土遺物実測図 (1:4)

朝鮮半島系軟質土器とした。器種は甕と推定され、231に相前後する時期に帰属すると思われる。

古代～中世

古代の遺構は検出されなかつたが、II層を中心として須恵器有台杯(236)、土師器伊勢型甕(237)など、古代の遺物がわずかに出土した。241はI層から出土した雁股式の鐵鎌である。

鉄鎌

近世～近代

I層上位において方形を基調とする落ち込みSK01・02と東西に通じる溝SD01を検出した(第157図)。I層中からは尾張型山茶碗(239)、東濃型山茶碗(240)などがわずかに出土したのみである。SD01はSK01埋積後に掘削されること、埋土の状況などから近代の用水路と考えられる。

第159図 G区出土金属製品実測図 (1:2)



写真57 G区出土金属製品X線写真 (1:1)



192・193



192



193



201



229

写真58 E・F・G区出土遺物

(8) H区

層序と検出遺構

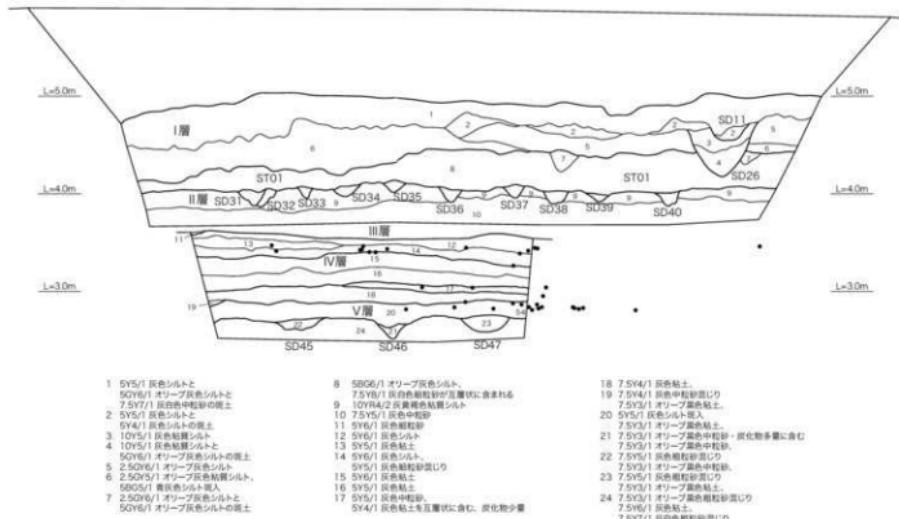
H区では、I層に対応する灰色粘質シルト層上位において鳥糞、II層に対応する暗褐色粘土層上位において中世の遺構、II層下位において古代の遺構を調査した（第160図）。IV層に対応する灰色粘土層中では、古墳時代前～中期の土器が各層で連続して出土し、V層（黒色粘土層）下位では古墳時代初頭の遺構を検出した。ただし、III層以下における土器の包含は、重機掘削による堆積状況の確認作業中に初めて明らかになった事実である。そのため、III層以下は結果として不十分な点が多い調査にならざるをえなかつた。

古墳時代初頭

平行小溝群

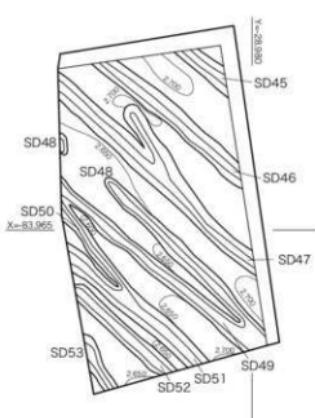
V層下位において北西～南東方向に通じる平行小溝群SD45～53を検出した（第161図）。H区においてV層は、C区と同様、粗粒砂を多く含有する傾向が認められる。この所見は、堆積環境と小溝群の分布との関連を示唆しているようにも思われる。溝は2条を1単位として検出されるものが多く、相互に分岐、合流する。各溝は幅約0.4m、深さ0.1～0.2mの規模で、B b・C区に近似する。溝の間隔は2条を1単位とする単位間は約0.5mを基準とし、約0.8mと間隔が広い部分（SD45・46間）もある。溝内にはV層から連続する粗粒砂を多く混じえる黒色粘土層が堆積する。V層中からは、わずかながら廻間I式後半前後の土器師（258～261）が出土していることから、B b・C区と同様、平行小溝群の帰属時期は、3世紀前半の前後に求められるであろう。

なお、V層下位には粗粒砂を多く混じえる灰色粘土層が堆積するが、以下の各層において遺構、遺物は検出されなかつた。



第160図 H区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

- | | | |
|--|---|---|
| 1 SY5/1 黒色シルトと
5GY6/1 オリーブ灰色シルトと
7.5YR5/1 黄褐色粘土層の複数 | 8 SBG6/1 オリーブ灰色シルト。
7.5YR5/1 黄褐色粘土層が互層状に含まれる
9 10 SY5/1 黄褐色粘土層と粗粒砂層 | 18 7.5Y4/1 黑色粘土。 |
| 2 SY5/1 黒色シルトと
SY4/1 黒色シルトの複数 | 10 7.5Y5/1 黄褐色粘土層 | 19 7.5Y4/1 黄褐色粘土層と
7.5Y3/1 黄褐色粘土層の複数 |
| 3 10Y5/1 黄褐色粘土層と
10Y5/1 黄褐色粘土層と | 11 SY6/1 黄褐色粘土層 | 20 SY5/1 黑色シルトと
7.5Y3/1 オリーブ灰色粘土。 |
| 4 10Y5/1 黄褐色粘土層と
5GY6/1 オリーブ灰色シルトの複数 | 12 SY6/1 黄褐色シルト | 21 7.5Y3/1 オリーブ灰色中粗粒・灰化物多量に含む
7.5Y3/1 黄褐色粘土層と
7.5Y3/1 黄褐色粘土層と |
| 5 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
6 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土シルト
6 5GY6/1 黄褐色粘土シルトと
7 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルトと
5GY6/1 オリーブ灰色シルトの複数 | 13 SY6/1 黄褐色粘土 | 22 7.5Y3/1 黄褐色粘土層と
7.5Y3/1 オリーブ灰色中粗粒。 |
| | 14 SY6/1 黄褐色シルト。
5SY6/1 黄褐色粘土層じり | 23 7.5Y5/1 黄褐色粘土層と
7.5Y3/1 黄褐色粘土層と |
| | 15 SY6/1 黄褐色粘土 | 24 7.5Y3/1 オリーブ灰色粗粒粘土層
7.5Y6/1 黑色粘土。 |
| | 16 SY6/1 黄褐色粘土 | |
| | 17 SY6/1 黄褐色粘土。 | |



第161図 H区古墳時代初頭遺構図 (1:100)

土器群は、S字甕（242～248）、小型平底甕（249）、甕（250）、中型直口壺（251）、広口壺（252）、小型壺（257）、屈折脚高杯（253～256）によって構成される。これらの個体によって構成される土器群は、松河戸I式初頭に対比される良好な一括資料である。

個体識別した結果は、甕7個体（S字甕5個体）、壺3個体、高杯4個体で、甕が高率を示す。242はS字甕C類新段階、243・245・246・247はS字甕D類古段階で、口径16cm・器高25cm前後、口径12cm・器高21cm前後の二法量がある。249の小型平底甕は全体に製作が粗雑である。250はS字甕に類似するが、胎土、器壁の厚さなどが明らかに異なる。251は底部を曖昧とする直口壺で、体部上半は細かい沈線状のミガキを施し、下半は幅広の匙面状のミガキを施す。体部下半はミガキ調整に先行するヘラケズリ調整が部分的に表面化する。252は受口状の口縁部形態を特徴とする壺で、体部上半に線刻がある。線は非常に曖昧で細く、縦位に疊らに刻まれるのみ。その図案についても不明である。屈折脚高杯（253～256）は、小さい杯底部、細い脚柱状部を特徴とする。253は杯部外間に横位のミガキ、内面に放射状暗文を施す屈折脚高杯で、布留式に系譜する個体と思われる。外縁のミガキは細かい沈線状である。254は透孔がある屈折脚高杯で、脚柱状部に縦位のミガキを施す。257は底部を小さな平底とする小型壺で、口縁部外側先端付近に曖昧な多条沈線による装飾がある。器面調整は細かいハケ調整を基調とするが、口縁部外側に曖昧なミガキ調整を施す。

IVc・IVb層 SU04とIVa層で検出した土器群（SU01～03）との中間の層位において土器群を検出した。SU04、SU01～03と比較してやや出土状況が不安定ながら、相対的に下位のIVc層で出土した一群（262～269）と、上位のIVb層で出土した一群（270～281）とに区分した。

IVc層の土器群は、S字甕（262・263）、甕（264・265）、有段口縁壺（266）、無透孔屈折脚高杯（267～269）によって構成される。262はS字甕D類古段階、263はS

古墳時代前～中期

IV層中の各層では、古墳時代前～中期の土器群が連続して検出された。以下、土器群を検出した層位を、出土層位に応じて、上位からIVa層、IVb層、IVc層、IVd層として記述する。

土器群

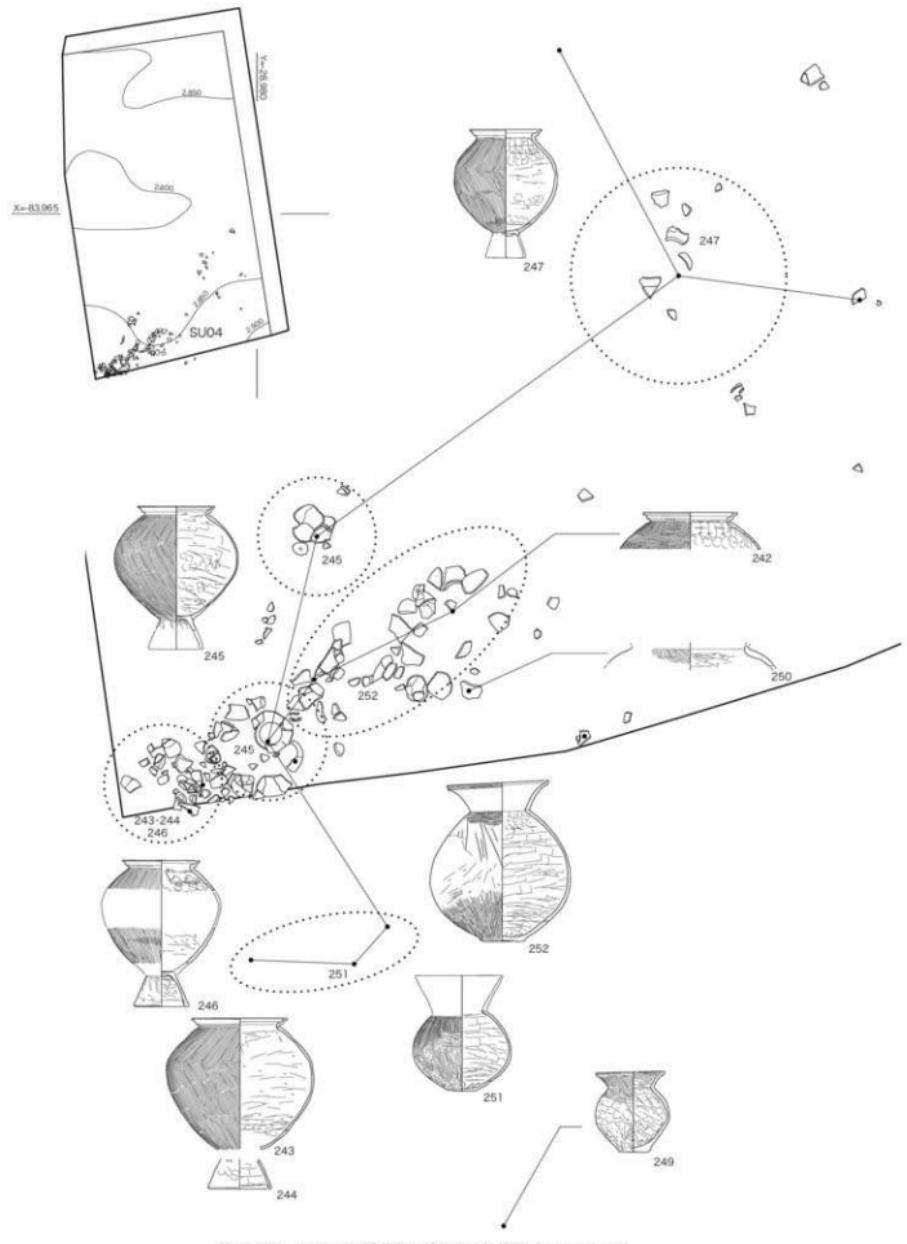
SU04

IVd層 V層直上で、土器群SU04を検出した（第162図）。土器は調査区南西部を中心として南北約6m、東西約3mの範囲に散布していたが、調査区の制約から、分布範囲は確定できなかった。周辺には炭化物の散布も認められたが、土器群に関係する明確な遺構は検出されなかった。土器はいずれも土層の圧密化によって破片となっていたが、個体の完

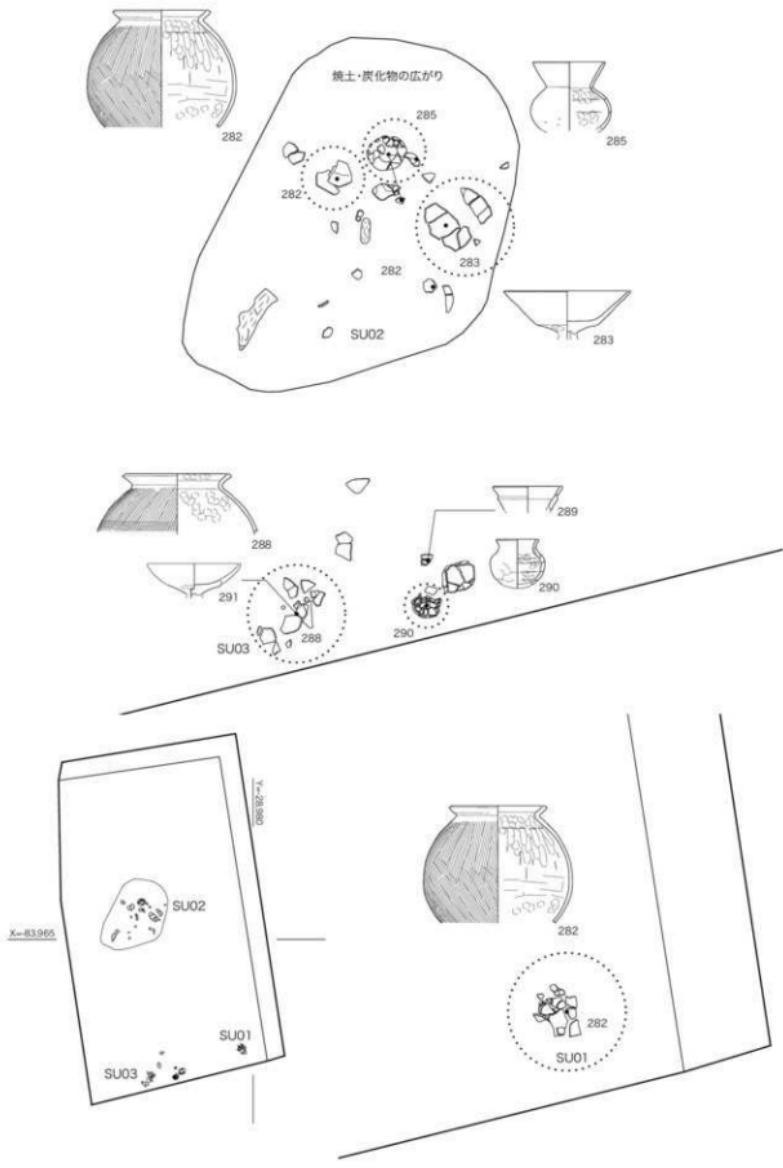
存率が高いものが多い。

松河戸I式初頭

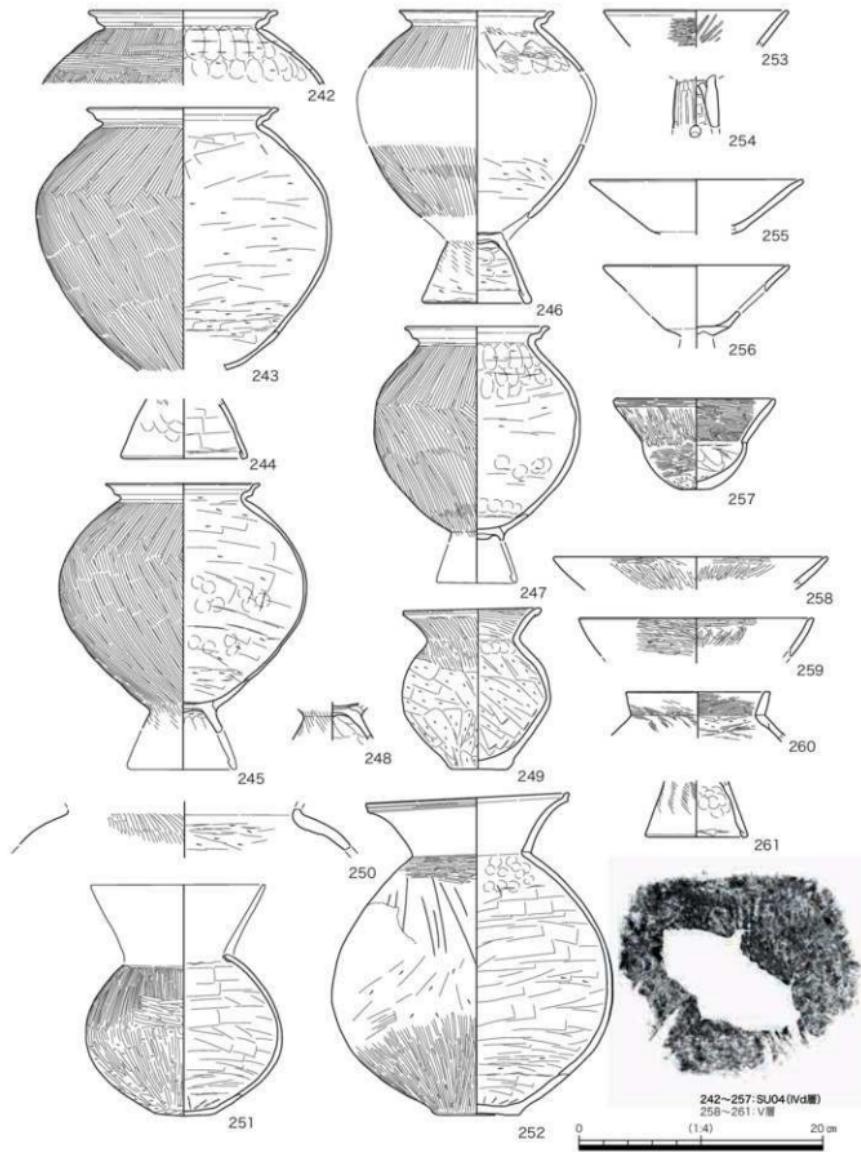
布留式高杯



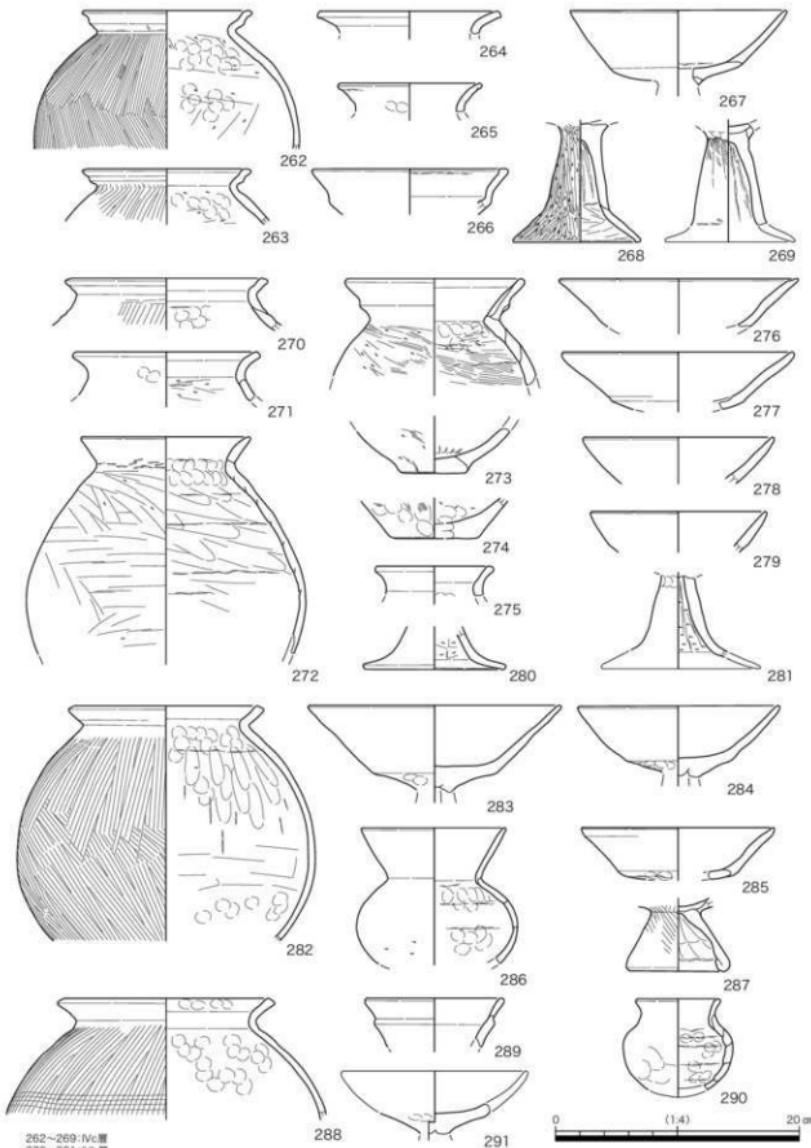
第162図 H区SU04遺構図・遺物出土状態図 (1:100/1:20)



第163図 H区SU01~03遺構図・遺物出土状態図 (1:100／1:20)



第164図 H区SU04・V層出土遺物実測図 (1:4)



262~269: IVc層
 270~281: IVb層
 282~286: SU01-02 (IVa層)
 287: SU01付近
 288~291: SU03 (IVa層)

第165図 H区IVc層・IVb層・SU01~03出土遺物実測図 (1:4)

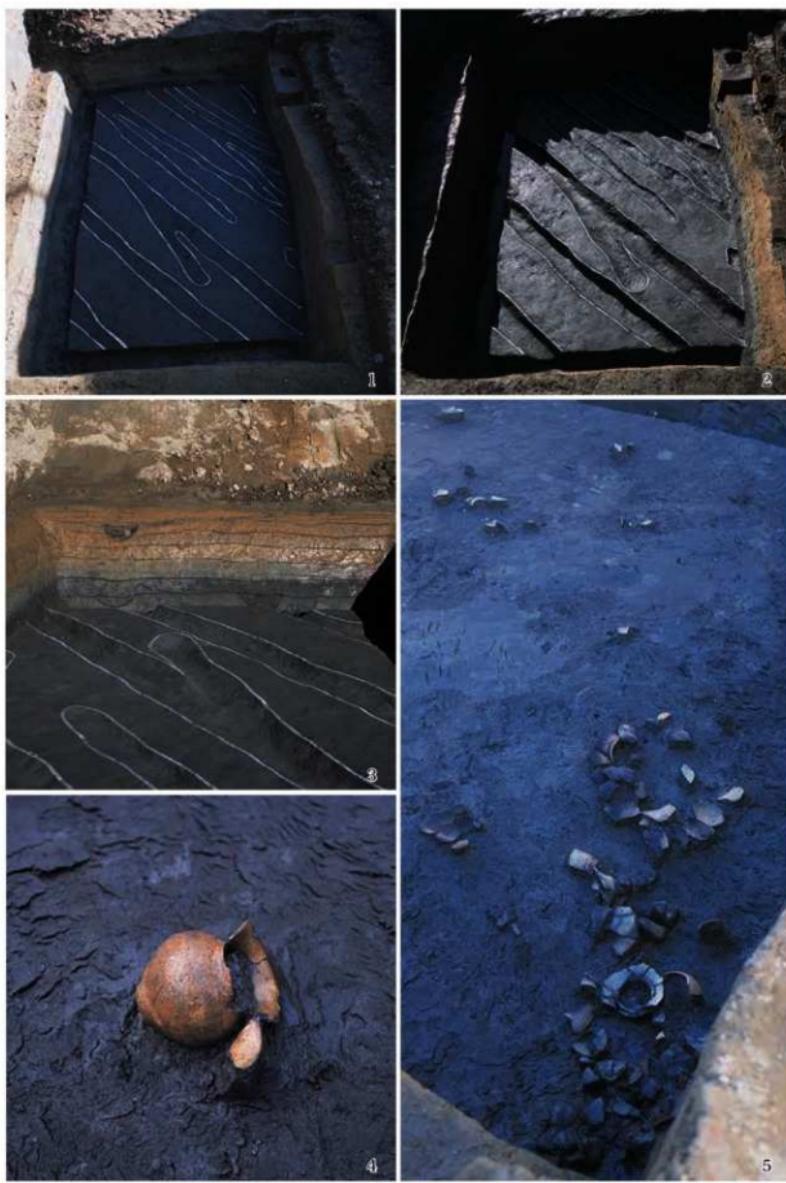


写真59 H区古墳時代初頭／前期遺構

1：古墳時代初頭遺構検出状況 2：古墳時代初頭遺構完顔状況 3：北壁土層断面 4：SU04遺物近景 5：SU04全景

字甕 D 類中段階。268 は脚部に縦位のミガキ調整をやや疎らに施すが、全体に製作が粗雑である。269 は脚柱状部の上位に幅広のメントリ状のナデを施す。

IV b 層の土器群は、S 字甕 (270)、甕 (271・272)、小型甕 (275)、壺 (273・274)、無透孔屈折脚高杯 (276～281) によって構成される。270 は S 字甕 D 類中段階、272 は最大径が体部下半にある甕で平底の可能性もある。高杯は、277・278 など、杯部は口径 (18cm 前後) に比して浅く、杯部上半が複雑に彎曲するものがみられる。

出土状況は不安定ながら、甕の構成、S 字甕や高杯の型式差から、IV c 層と IV b 層の土器群には相互に新旧関係を認めることが可能であろう。つまり、前者は松河戸 I 式前半、後者は松河戸 I 式後半の区分におよそ対応するものと考えられる。

松河戸 I 式の区分

IV a 層 IV 層中でも最上位、III 層直下に近い位置で、土器群 SU01～03 を検出した (第 163 図)。SU02 は土器が分布する周囲、南北 1.6 m、東西 1.2 m の範囲に炭化材、焼土が散布していたが明確な遺構は検出されなかった。焼失家屋に土器群や炭化材が残されていた状況も想定したが、土器群を確認した段階では、竪穴住居の平面形を確定することは困難と判断した。SU01、SU03 についても SU02 と同様、土器群に関係するような遺構は確認できなかった。なお、SU01・02 は、両土器群に含まれていた S 字甕 (282) などが接合したことから、同一の土器群であった可能性を考慮し、同時に扱うこととした。

SU01・02 は、S 字甕 D 類 (282)、大型高杯 (283)、高杯 (284～285)、中型の直口壺 (286) から構成される。S 字甕 (282) は口縁部から体部にかけて器壁の厚さが均一で、口縁部外面に痕跡的な段を残す特徴から D 類新段階に対比される。高杯は口径 20cm 以上の大・型高杯 (283) と口径 16cm 前後の高杯 (284・285) に法量分化する。直口壺 (286) は顕著に外反する口縁部、球形に近い体部を特徴とする。SU03 は、S 字甕 (288)、小型甕 (289・290) によって構成される。S 字甕 (288) は D 類新段階に対比される。289 は口縁部を有段状とする小型甕、291 は杯部を無棱とする高杯である。

SU01・02、SU03 の土器群は、IV a 層出土土器群として、およそ松河戸 II 式前半に対比される内容を示す。ただし、291 については、杯部形態、脚部との接合方法から字田式に時期が下降する可能性があり、検討を要する。

SU01～03

松河戸 II 式前半



1



2

写真60 H区古墳時代中期遺構

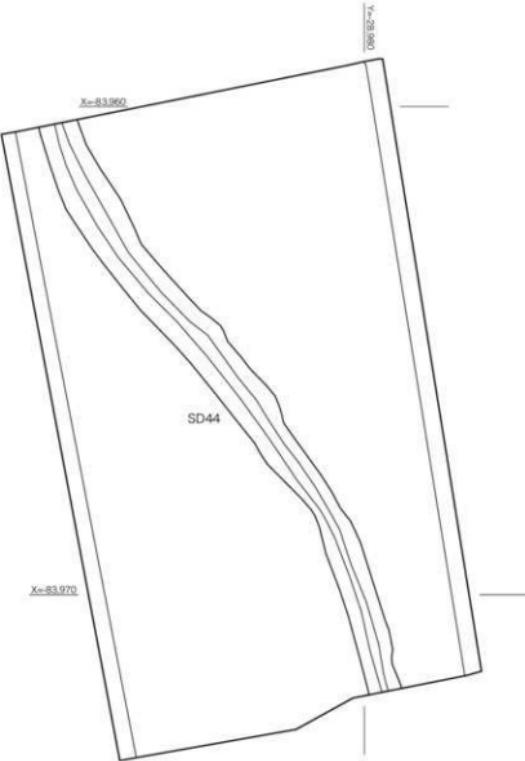
1 : SU01～03全量 2 : SU03全量

古代

II層下位において北西—南東方向に通じる溝SD44を検出した(第166・167図)。埋土は上位のII層に近似する。溝内から出土した遺物はごく少なく、およそ東山50号窯式に対比される須恵器蓋(292)を図示したのみである。II層中には、5~8世紀の各時期の土器(293~320)が含まれていることと、層位関係から、SD44は5~8世紀のいずれかの時期に帰属すると判断されるが、埋土を観察する限りでは、8世紀後半の可能性がより高いと思われる。



第166図 SD44土層断面図 (1:50)



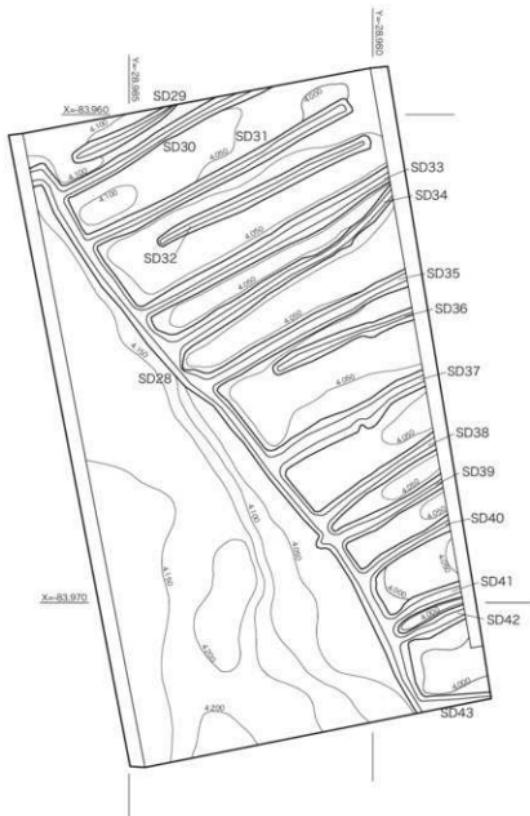
第167図 H区古代遺構図 (1:100)

中世

I層を除去すると、調査区南西部分に比高約0.1mの微高地状の起伏が顕れ、その縁辺で北西—南東方向に通じる小溝SD28、低地状となる部分で北東—南西方向の小溝群SD29～43が検出された（第168図）。SD28は下位のSD44の位置を踏襲して掘削されている。一方で、微高地上において遺構は検出されなかった。微高地上のSD28と低地の各溝は相互に連結し、低地の溝は2条を1単位とするものが多いようにも捉えられる。溝は幅0.3～0.5m、深さ約0.1mで、低地に配された溝間の間隔は（2条1単位とする溝間の間隔を考慮しない場合）、0.6～1.0mで、やや不規則である。溝の機能、微高地上の土地利用を明らかにすることは難しいが、畑など耕作に関係する遺構と考えておきたい。

微高地状の起伏

小溝群



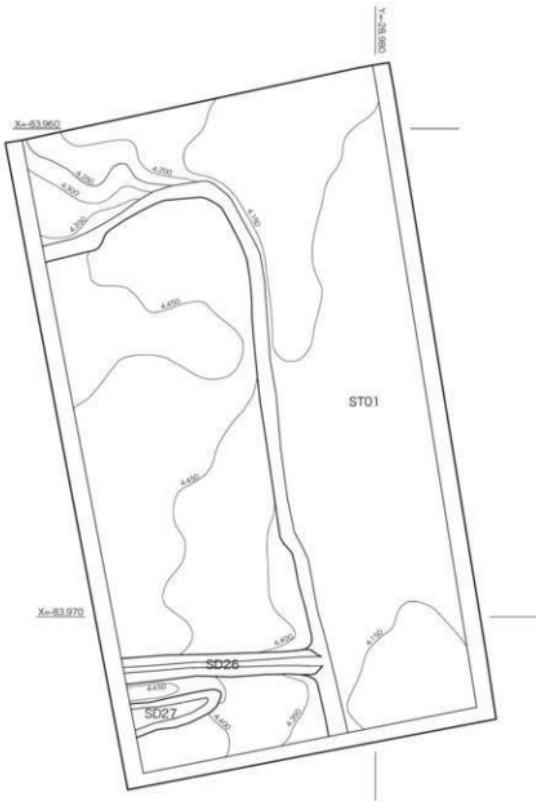
第168図 H区中世遺構図 (1:100)

溝からは第6型式の尾張型山茶碗（337）、脇之島窯式の東濃型山茶碗（338）が出土したことによれば、上位のⅠ層中からは、尾張型山茶碗（339～343）、東濃型山茶碗（344～356）の各型式、古瀬戸前期の入子（357）、14世紀の黒クロ調整土師器皿（358）、白磁碗（359・360）、青磁碗（361）、古瀬戸後期の楕台（362）などが出土している。

近世～近代

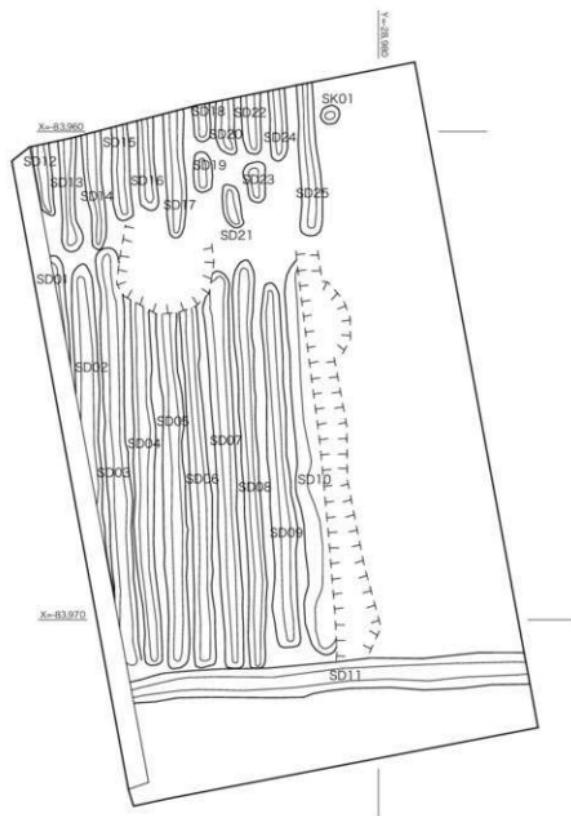
島畑と水田

Ⅰ層上位において近世以降の島畑と水田ST01、島畑上において平行小溝群SD01～25などを検出した（第169・170図）。なお、島畑部分はⅠ層下位の微高地状の部分、水田部分はⅠ層下位の低地部分に対応し、H区周辺は中世から近世、さらに近代にかけて耕作地としての土地利用が継続していたことが想定される。369・370はⅠ層上位において

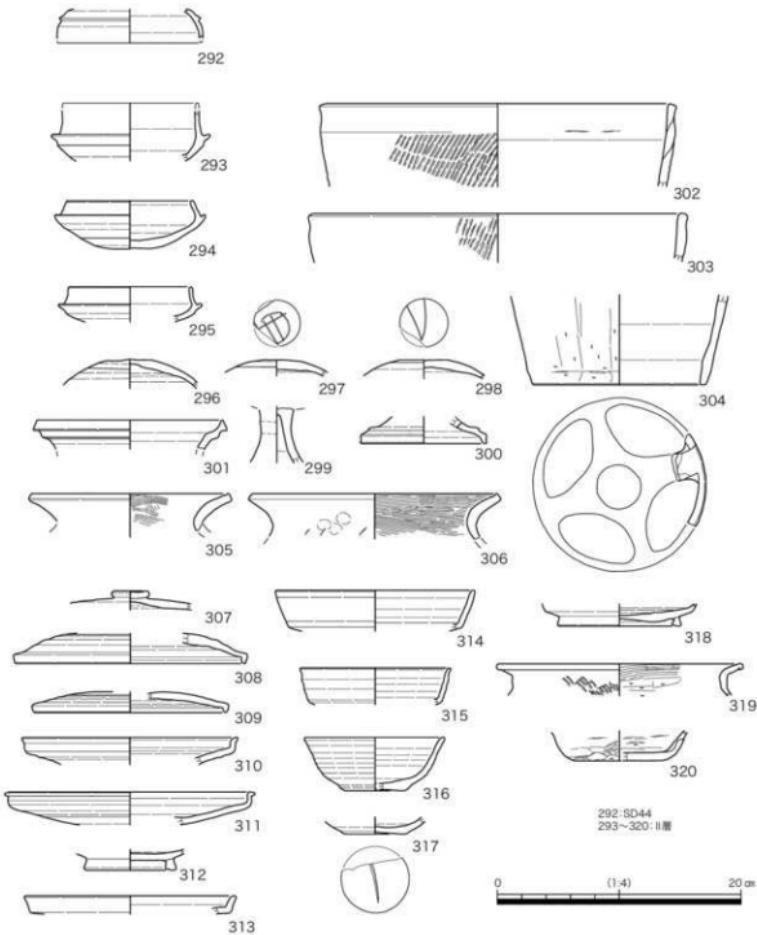


第169図 H区近世遺構図 (1:100)

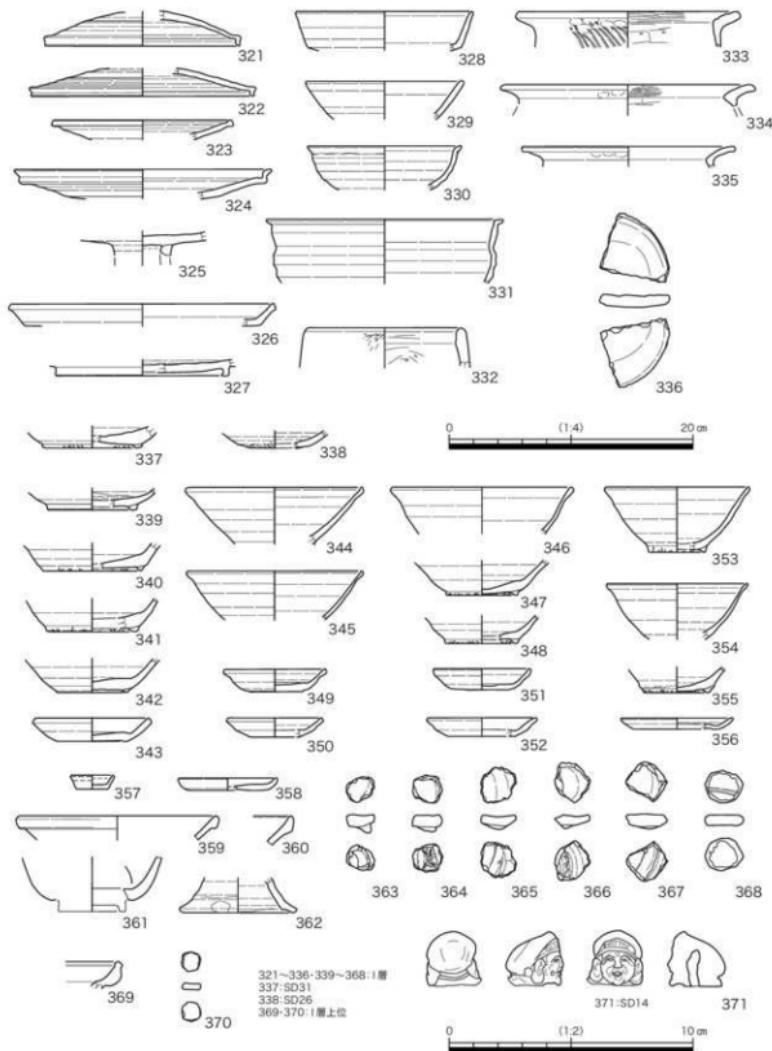
出土した遺物である。369は鉢鉢、370は志野製品を利用した加工円盤で、およそ17世紀後半に對比される。371は陶製の人形で、島畠上の溝SD14より出土した。372は砂質凝灰岩製の仕上げ砥。376は溶解した羽口の一部と思われ、片面は平滑に黒色ガラス質化するが、反対の面は多孔質に発泡する。



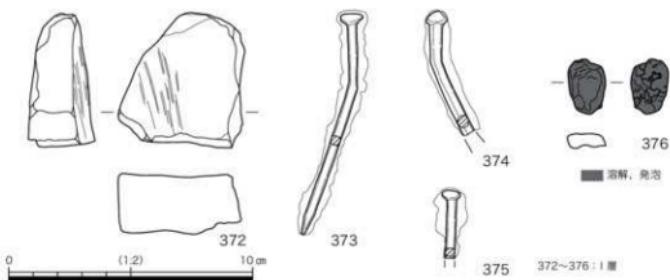
第170図 H区近代遺構図 (1:100)



第171図 H区古墳時代後期～古代出土遺物実測図 (1:4)



第172図 H区I層・中世～近代出土遺物実測図 (1:4/1:2)



第173図 H区出土石製品・鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図 (1:2)



写真61 H区古代／中世／近世／近代遺構全景

1：古代遺構全景 2：中世遺構全景 3：近世遺構全景 4：近代遺構全景

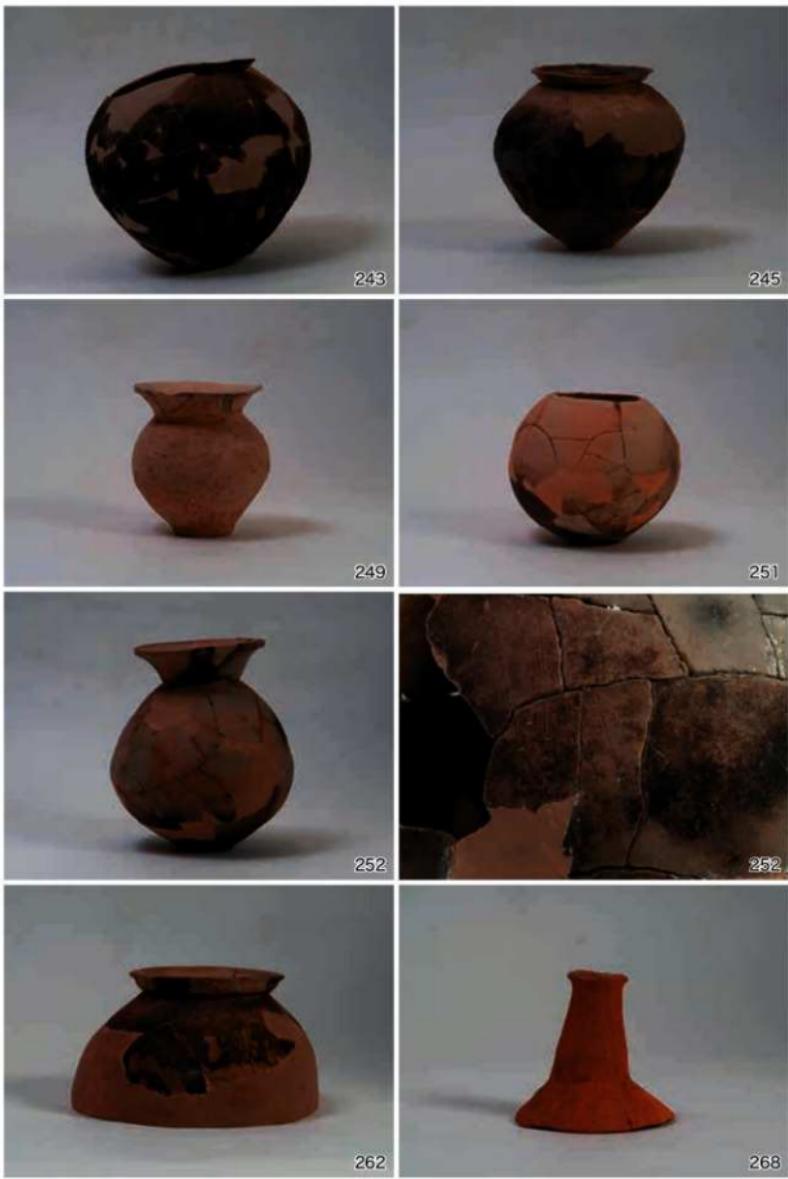


写真62 H区出土遺物1



272



273



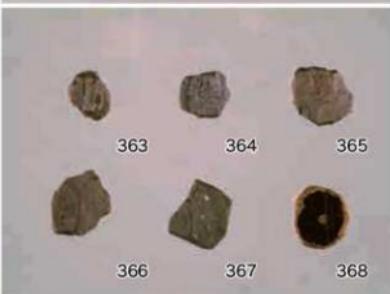
283



284



357



372

写真63 H区出土遺物2

(10) I 区

I 区では、II 層に対応する暗灰黄色砂質シルト層の上位で中世の遺構、II 層の下位で古墳時代中期～古代の建物群、建物群の下位において河川状の緩やかな落ち込みを検出した（第 174 図）。結果、3 遺構面を調査した。しかし調査時には、H 区以北にみるような古墳時代中期以前の遺構の展開、遺物の包含を認識していなかったので、3 面以下の調査は、部分的な遺構・遺物の有無確認を実施したのみで、不十分なまま調査を完了した。

古墳時代中期

2 面の遺構の下位で、褐色シルト～細粒砂で埋積される河川状の緩やかな落ち込み NR01 を確認した（第 175 図）。NR01 は I 区を北西～南東方向に通じ、調査区内において見かけ上の両岸を検出した。仮に示す計測値は、幅 5～8 m、深さ約 0.3 m である。

NR01 内の堆積層からは古墳時代中期の遺物（377～389・532）が出土した。遺物は南岸を中心として出土した土師器（377～389）に加えて、最深部付近で出土した有袋鉄斧（532）、北岸付近において出土した水銀朱（第 4 章（5）を参照）がある。土師器は甕（377・378）、S 字甕（379・380）、有段口縁甕（381）、小型甕（384）、中型直口甕（385）、高杯（386・387）、大型高杯（388・389）などによって構成される。これらは總じて松戸戸 II 式前半に対比されるが、杯部を無梭とする高杯（386）は、やはり宇田式にまで下降する可能性があり、検討を要する。

古墳時代中期～古代

第 2 面において、相互に重複する古墳時代中期～古代の竪穴住居 10 棟、土坑を検出した（第 176 図）。竪穴住居の埋土は、いずれも土質、色調変化に乏しく、遺構検出は容易

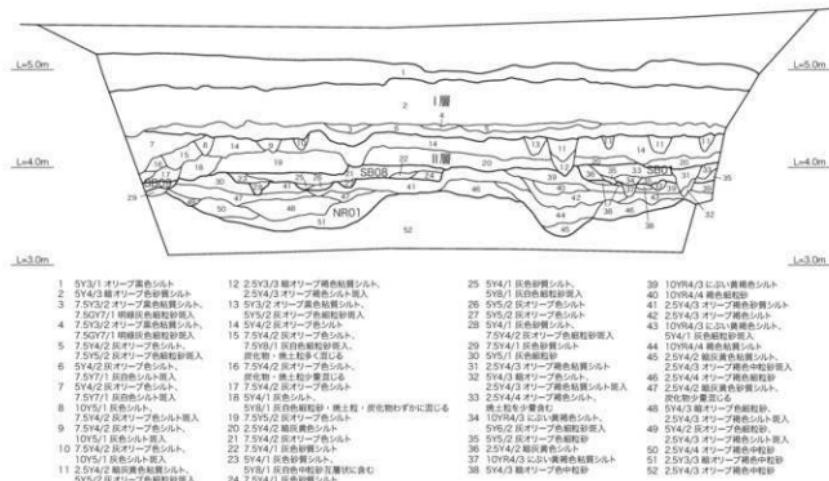
層序と検出遺構

緩やかな落ち込み

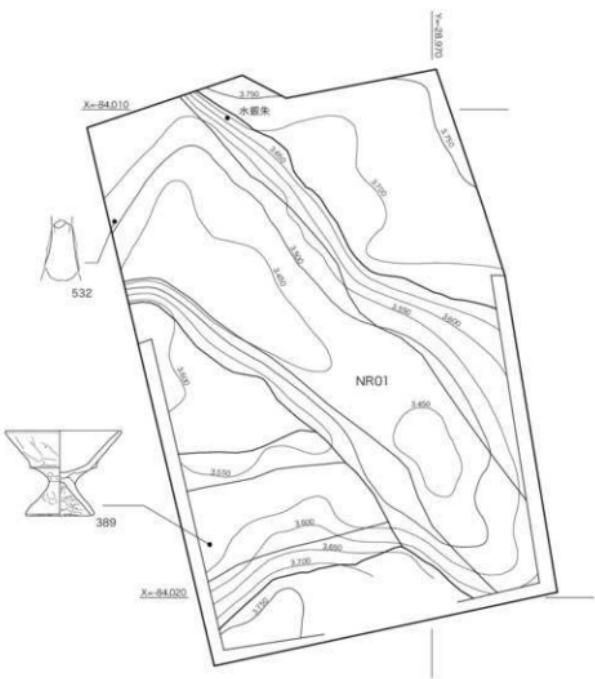
有袋鉄斧と水銀朱

松戸戸 II 式前半

竪穴住居群と土坑



第 174 図 I 区西壁土層断面図 (縦 1:50 / 横 1:100)

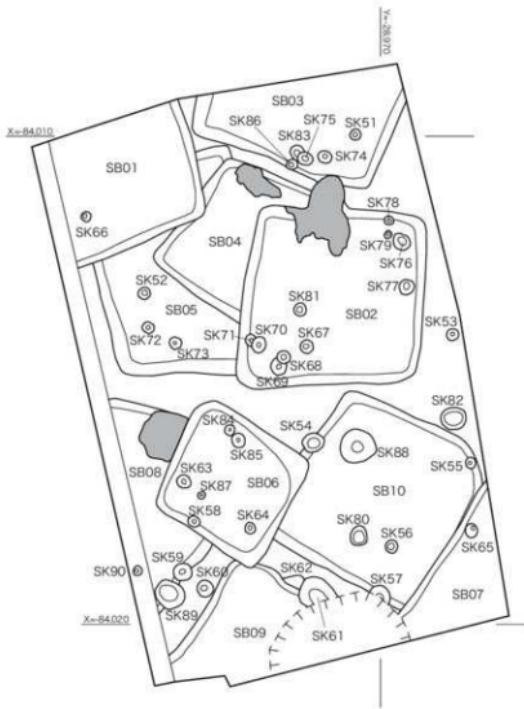


第175図 I区古墳時代中期遺構図 (1:100)



写真64 I区NR01全景

1:検出状況 2:完掘状況

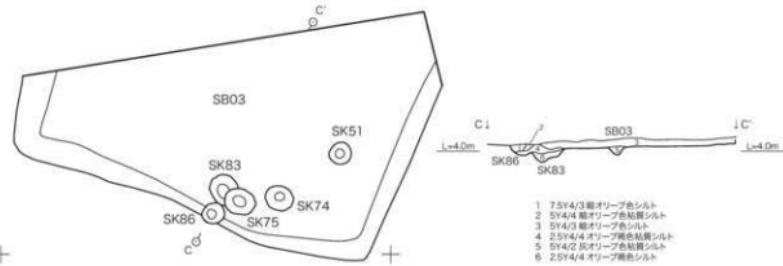
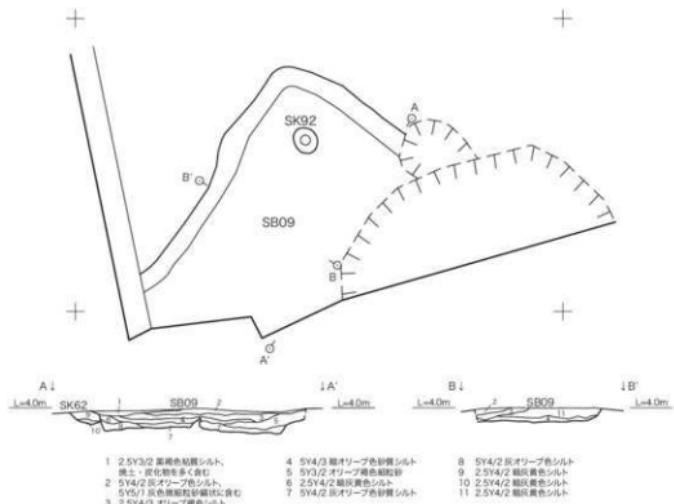


第176図 I区古墳時代中期～古代遺構図 (1:100)



写真65 I区古墳時代中期～古代遺構全景

1：検出状況 2：完掘状況



第177図 I区SB09・03遺構図 (1:50)



写真66 I区1期竪穴住居

1 : SB09全景 2 : SB03全景

でなかった。竪穴住居などの遺構は、重複関係、出土遺物から、5世紀前半—松河戸II式／1期、5世紀後半—宇田式／2期、7世紀前半—東山50号窯式／3期、8世紀後半—折戸10号窯式／4期の4時期に大別される（第187図）。

4期区分

1期とした竪穴住居にはSB09、SB03の2棟がある（第177図）。SB09は調査区南部、SB03は調査区北部に分布し、竪穴住居が3面においてNR01の両岸、つまり直前に微高地化していた部分に立地したことか指摘できる。竪穴住居はいずれも一部分を検出したのみで、規模については、SB03の一辺が4mであることが判明するのみである。炉や竈、主柱穴についても明確でない。

1期

SB09から出土した土器として、土師器S字壺D類（390・391）と高杯（392）、SB03から出土した土器として土師器高杯（393）がある。390はS字壺D類新段階で、これらはいずれも松河戸II式後半に対比される。

松河戸II式後半

2期とした竪穴住居はSB10、SB07の2棟で、土坑SK54、SK56、SK76、SK80、SK89もおよそ同時期に位置づけられる。SB10とSB07は相互に重複し、SB10がSB07に対して先行する。

2期

SB10の平面形は、長軸約3.8m、短軸約3.6mの長方形で、炉や竈、主柱穴は確認されなかった（第178図）。土器（394～398）は住居の南半を中心にやまとまって出土した。394・395は内外面ハケ調整を基調とする土師器台付壺、396は口縁部が短小な小型壺、397は大型高杯である。なお、須恵器は出土しなかった。土器組成、小型壺や大型高杯の形態から、これらの土器群は宇田I式に対比して大過ないと思われる。

SB10

SB07は調査区南東の一画で検出されたため、規模については不明である。床面付近において土器がまとまって出土し、焼成後の穿孔がある須恵器有蓋高杯（403）が床面に伏せ置かれた状態で残されていた（第179図）。また、その周囲には土師器宇田型壺（399）が破片となって散乱していた。他の出土土器として、土師器高杯（400）、須恵器蓋（401・402）、高杯（404）がある。399は宇田型壺3類、401～403はおよそ東山11号窯式に相当する。404は長脚化する傾向がすでに認められることから、東山11号窯式に後続する型式に対比される可能性がある。これらの土器群は、およそ宇田II式後半—東山11号窯式直後として位置づけることが可能かと思われる。

宇田I式前半

SB07

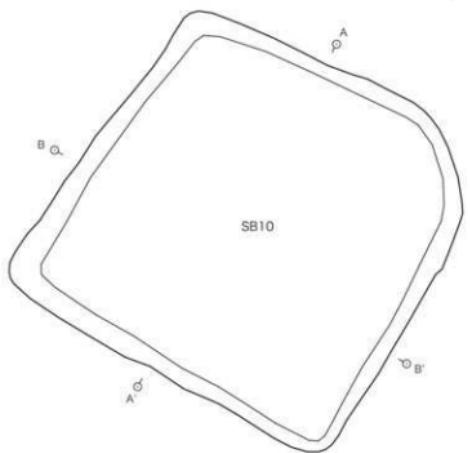
宇田II式後半



写真67 I区2期竪穴住居

1:SB10全景 2:SB07遺物出土状況

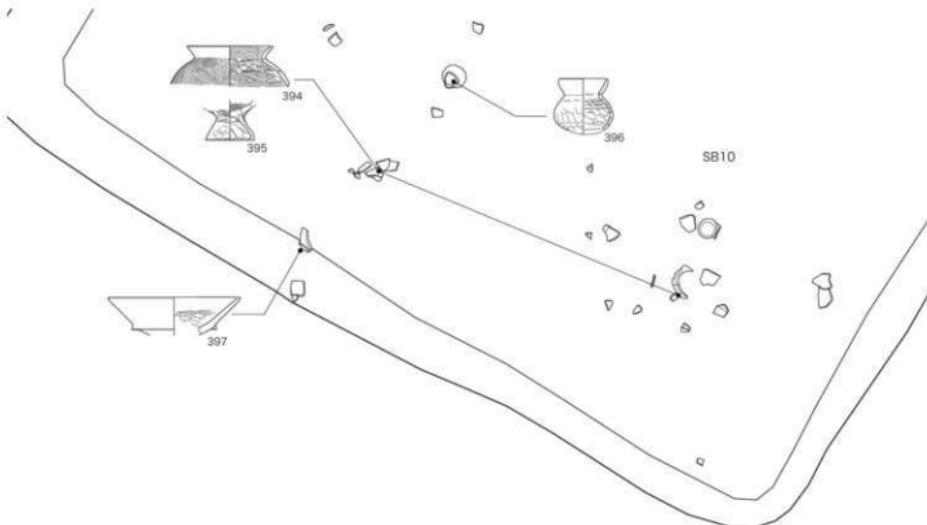
+



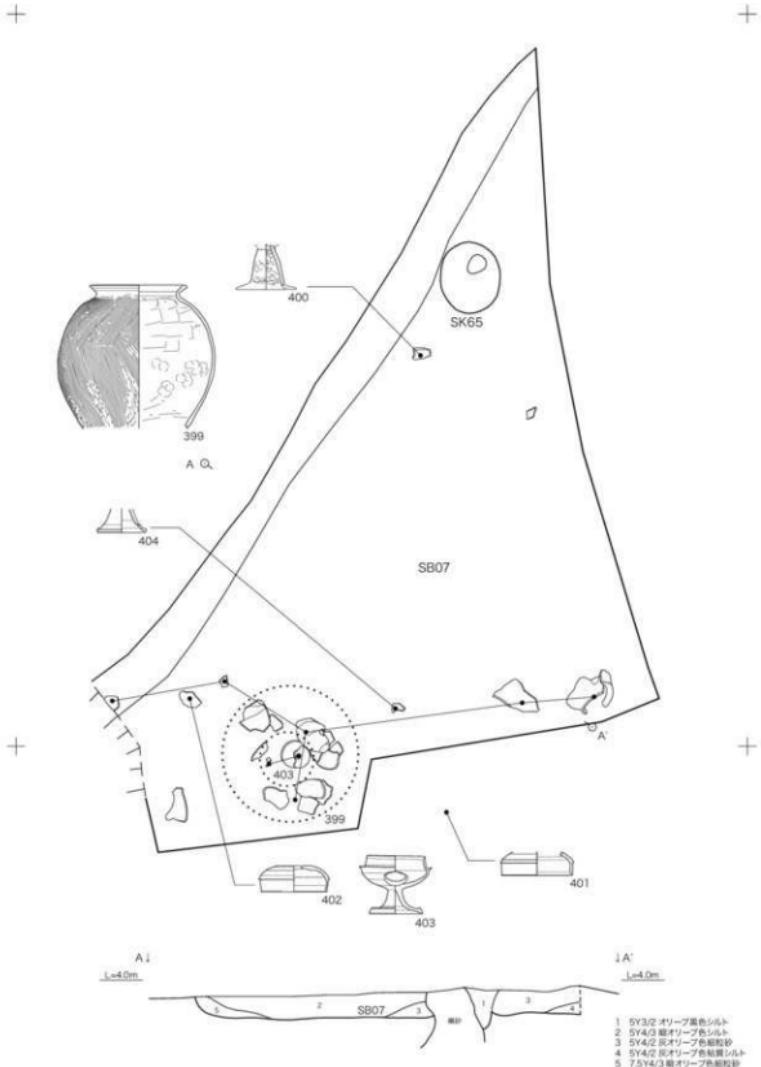
+



- 1 SY4/3 稲オリーブ色砂質シルト、5Y6/2 反オリーブ色細粒砂質入、炭化物混入
 2 2.5Y4/3 オリーブ色シルト、2.5Y5/2 稲灰黄色粗粒砂質入
 3 2.5Y4/2 稲灰黄色シルト、5Y5/2 反オリーブ色細粒砂質入、炭化物混入
 4 5Y4/2 反オリーブ色砂質シルト
- 5 SY4/3 稲オリーブ色砂質シルト、2.5Y4/3 オリーブ色砂質シルト混入
 6 5Y4/1 稲色細粒砂、2.5Y4/3 オリーブ色砂質シルト混入
 7 2.5Y3/3 稲オリーブ色砂質シルト



第178図 I区SB10遺構図／遺物出土状態図 (1:50 / 1:20)



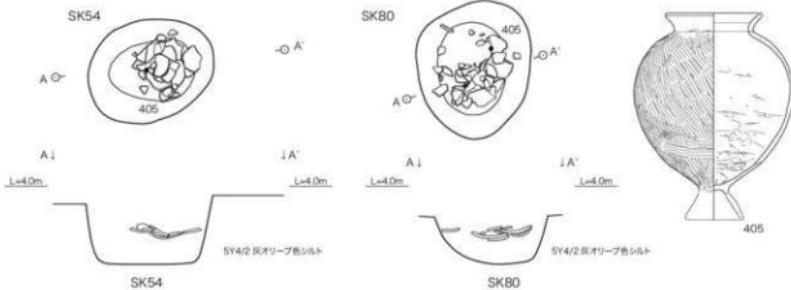
第179図 I区SB07遺物出土状態図 (1:20)

土師器敷設土坑

SK54、SK80、SK56は、土坑の中位に破碎した土師器を敷設した土坑で、SK54、SK80の両土坑に埋設されていた甕(405)が接合し、SK56は大型高杯(412)を敷設していた(第180図)。敷設状況から土師器は柱の根固めとして使用されたとも考えられるが、掘立柱建物を復原することはできなかった。なお、SK54とSK80はSB10に対して後続する。405は外面の粗いハケ調整、球形に近い体部を特徴とする甕で、およそ宇田I式に対比され、SB10との新旧関係を考慮するなら、宇田I式後半に相当する可能性がより高いと判断される。SK56より出土した大型高杯(412)、SK76より出土した高杯(413)、SK89より出土した有段口縁壺(414)についても、同時期と考えておきたい。

宇田I式後半

なお、上位の1面の遺構として検出したSK49には古墳時代の土器が一定量包含されていた。土師器S字甕(406・407)、高杯(408)は1期のSB09に、須恵器蓋(409)、有蓋高杯(410・411)は2期のSB07に由来する土器と思われる。

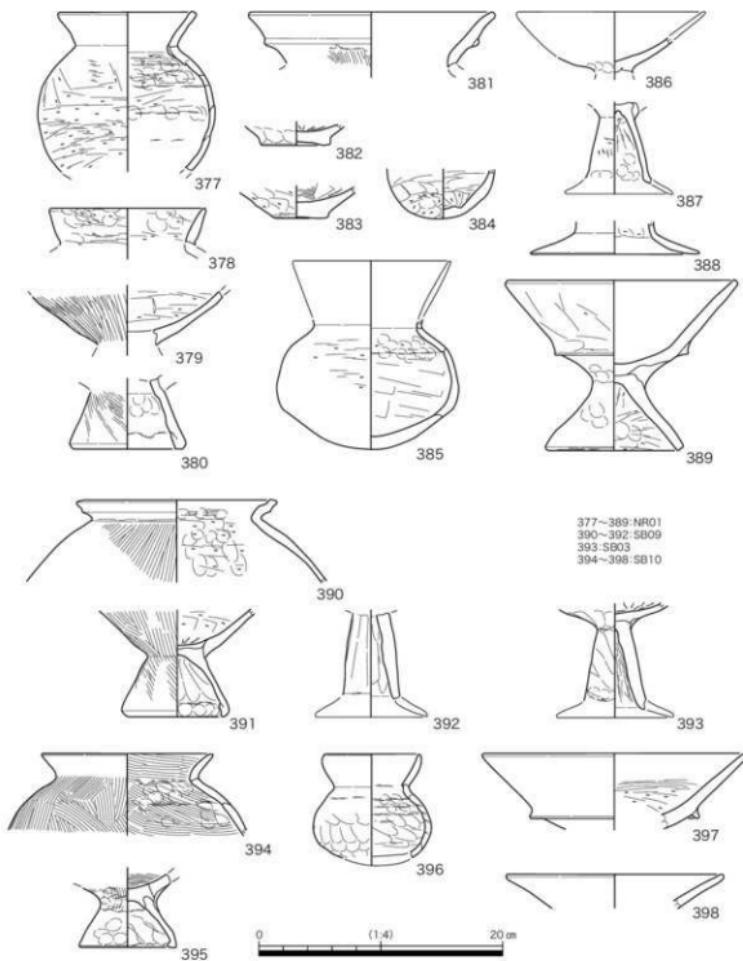


第180図 I区SK54・80遺物出土状態図 (1:20)

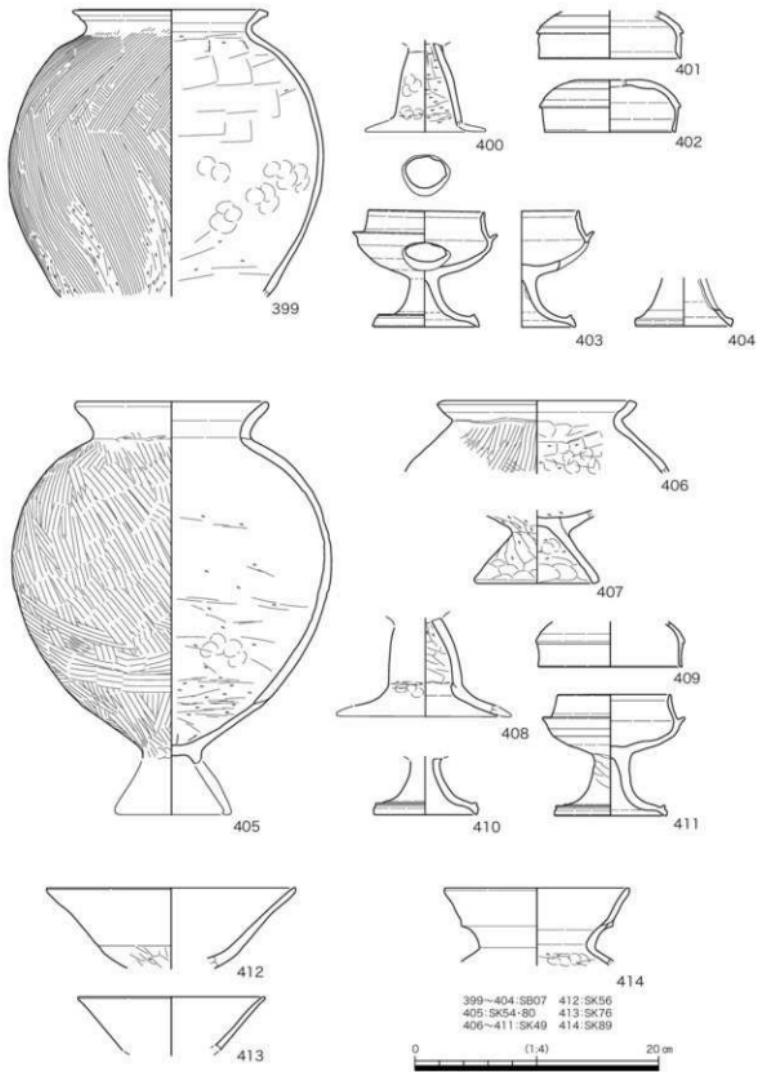


写真68 I区土坑遺物出土状況

1:SK54 2:SK80



第181図 I区古墳時代出土遺物実測図1 (1:4)



第182図 I区古墳時代出土遺物実測図2 (1:4)



写真69 I区古墳時代（1・2期）出土遺物

3期

3期とした竪穴住居はSB08（第183図上）、SB05（第184図）の2棟で、SK90、SK45も出土土器から同時期に位置づけられる。いずれも調査範囲が限られるので、平面形、規模については不明確な部分が多いが、一辺4.5m前後の方形を想定しておきたい。

SB08

SB08は北辺に竈を付設する。SB08からは須恵器蓋（415）、杯（416）、平瓶（417）、直口壺あるいは脚付盤（418）などが出土した。これらは、東山50号窯式の前後に対比される。また、竈内からは鉄滓（536）が出土したが、鍛冶が竈と誤認している可能性も考えられ、検出した遺構そのものについても検討の余地がある。

SB05

SB05からは、東山50号窯式の須恵器蓋（419）、土師器伊勢型甕（420）などが出土した。なお、421は1面の遺構として検出したSK49から出土した脚付盤と考えられる須恵器で、SB08に伴っていた可能性がある。

4期

4期とした竪穴住居はSB04、SB02、SB01、SB06の4棟で、SB04、SB02において竈の付設を確認した。いずれも竈は、崩落後に焼土が周辺に流出した状態で遺存していた。

SB04

SB04は一辺約3.0mで、竈を北辺でも北東隅近くに付設する（第184図）。住居からは、須恵器無台杯（422～425）が出土した。

SB02

SB02は一辺約3.8mで、竈を北辺中央に付設する（第184・185図）。住居からは有台杯（427・428）、製塙土器（429）に加えて、鉄滓（537～540）が出土した。

SB01など

その他、SB01（第186図）から出土した須恵器蓋（430）、有台杯（431・432）、盤（433）、土師器濃尾型甕（434）、SB06（第183図下）から出土した須恵器無台杯（426）、SK90から出土した須恵器無台杯（435）、SK49から出土した平瓶（437）は、総じて須恵器は折戸10号窯式に対比され、土師器なども同時期の所産と考えられる。なお、SB01からは砂質凝灰岩製の仕上げ砥（546）が出土している。

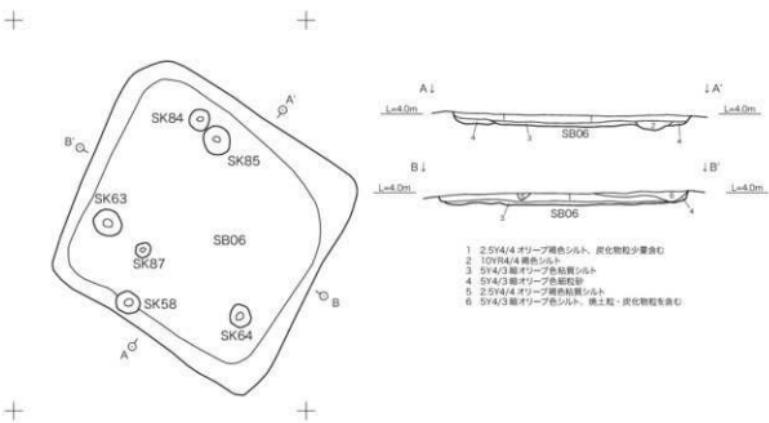
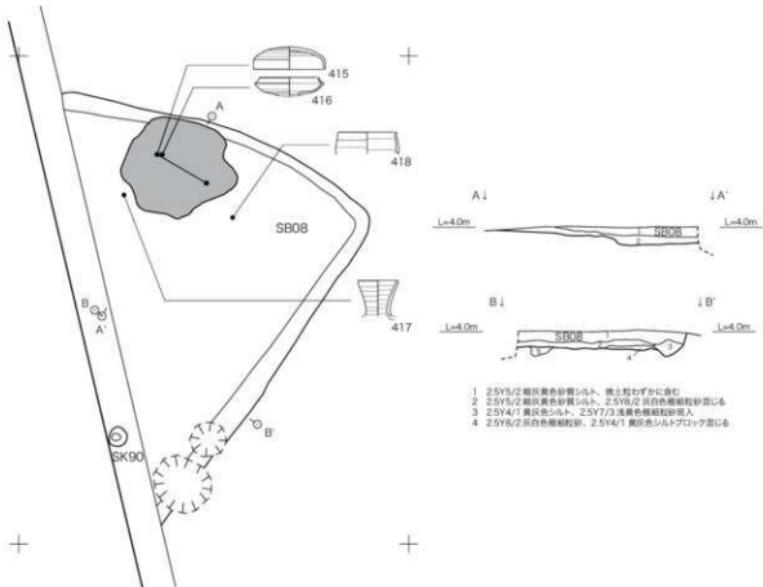
II層出土遺物

また、II層からは、奈良時代を中心として、古墳時代中期～古代の遺物がまとまって出土した（439～492）。須恵器（439～477）については、439の有蓋高杯が東山11号窯式、440の蓋と441の短頸壺が岩崎17号窯式、442の蓋が高藏寺2号窯式にそれぞれ対比される以外は、鳴海32号～折戸10号窯式に対比される。土師器（478～492）としては、飴（478・479）、甕（480～492）がある。479は甕の底部に付加した棧の部分と推定した。

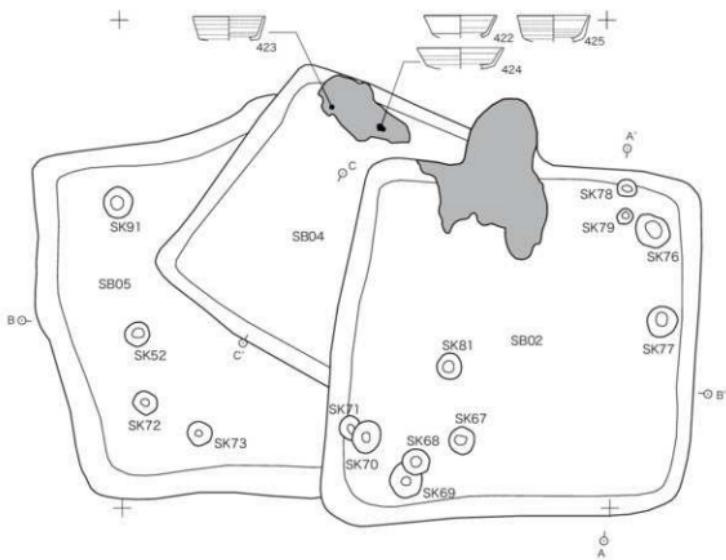


写真70 I区3期竪穴住居

1：SB08全景 2：SB08竪土削断面



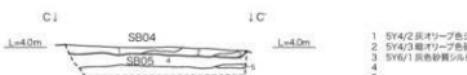
第183図 I区SB08・06遺構図 (1:50)



- 1 2SY4/2 線状黃色粘質シルト
2 2SY4/4 線状オーブ色シルト
3 SY4/3 線状オーブ色シルト
4 2SY4/4/3 オリーブ色シルト
5 SY4/3 線状黄褐色シルト
6 SY4/3 線状オーブ色シルト、2SY4/1 黃色粘土層

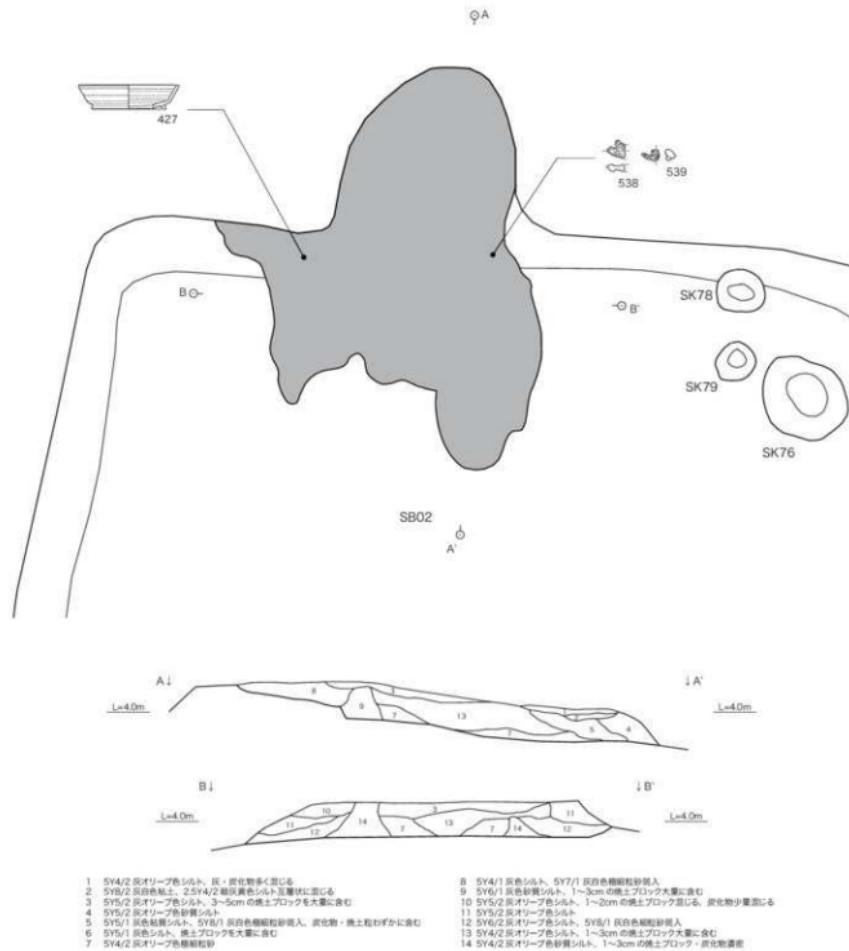


- 1 2SY3/3 線オリーブ色粘質シルト
2 2SY4/2 線状黄褐色シルト
3 10SY4/2 黄褐色シルト
4 2SY4/1 オーブ色シルト
5 2SY4/2 黄褐色シルト
6 5Y3/2 オーブ色シルト、7SY6/1 黄色粘土層を互層状に含む。地土を少量含む
7 2SY4/2 黄褐色シルト、地土を少量含む
8 5Y4/1 黄色シルト、2SY5/3 線状粘質シルト層入。地土・炭化物粒を少量含む
- 9 5Y4/2 反オリーブ色粘質シルト、5Y3/2 オリーブ色粘質シルト層入
10 2SY4/3 オーブ色粘質シルト、5Y6/1 黄色砂混入
11 2SY4/2 黄褐色シルト
12 2SY5/2 黄褐色粘質シルト
13 2SY5/4/4 オーブ色粘質シルト、炭化物少量含む
14 5Y4/2 反オリーブ色シルト
15 2SY4/3 黄褐色シルト
16 5Y4/3 線状オーブ色粘質シルト、地土粒を少量含む

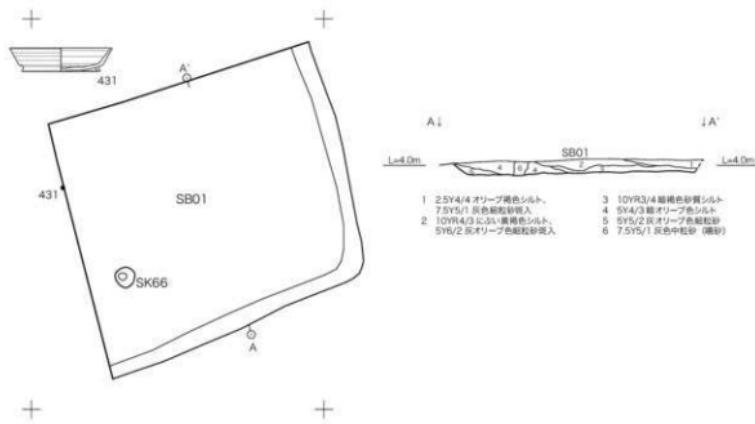


- 1 5Y4/2 反オリーブ色シルト
2 SY4/3 線状オーブ色粘質シルト、地土粒を少層含む
3 SY6/1 黄色砂混入
4 5Y4/3 黄褐色シルト
5 SY8/1 黄白地根網粗粒混入

第184図 I区SB05・04・02造構図 (1:50)



第185図 I区SB02縫隙構図 (1:20)

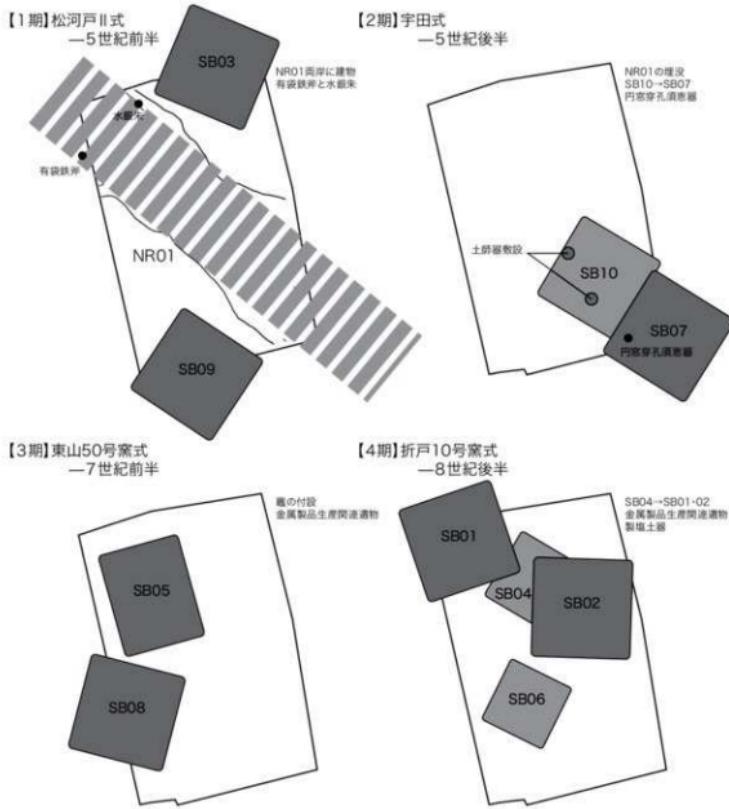


第186図 I区SB01遺構図 (1:50)



写真71 I区4期竪穴住居 1

1 : SB04全景 2 : SB04電 3 : SB02全景 4 : SB02電

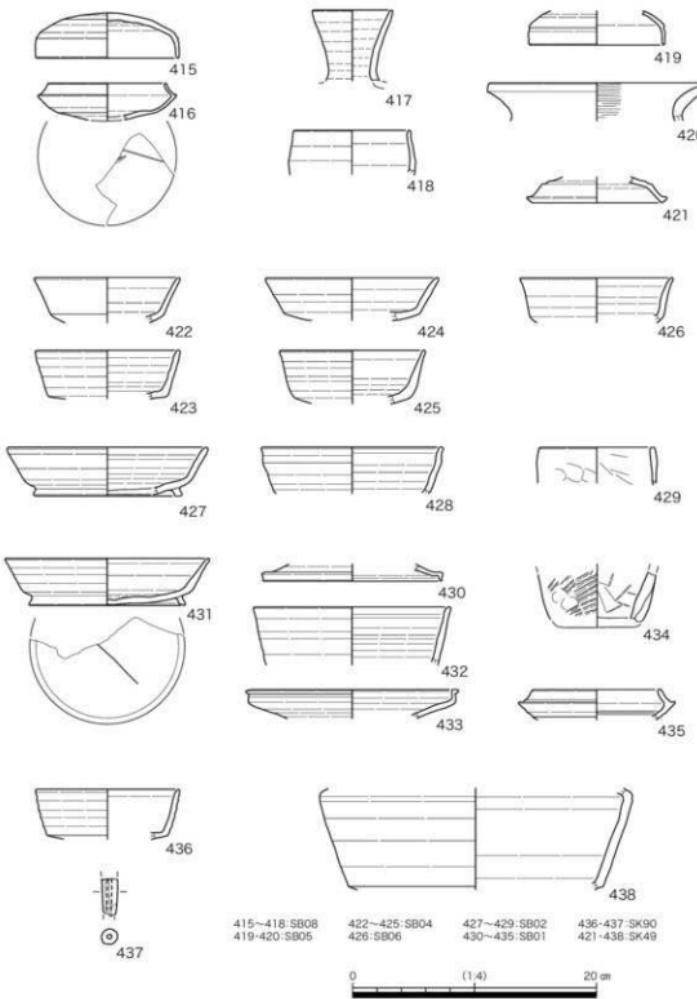


第187図 I区古墳時代中期～古代遺構変遷図 (1:200)

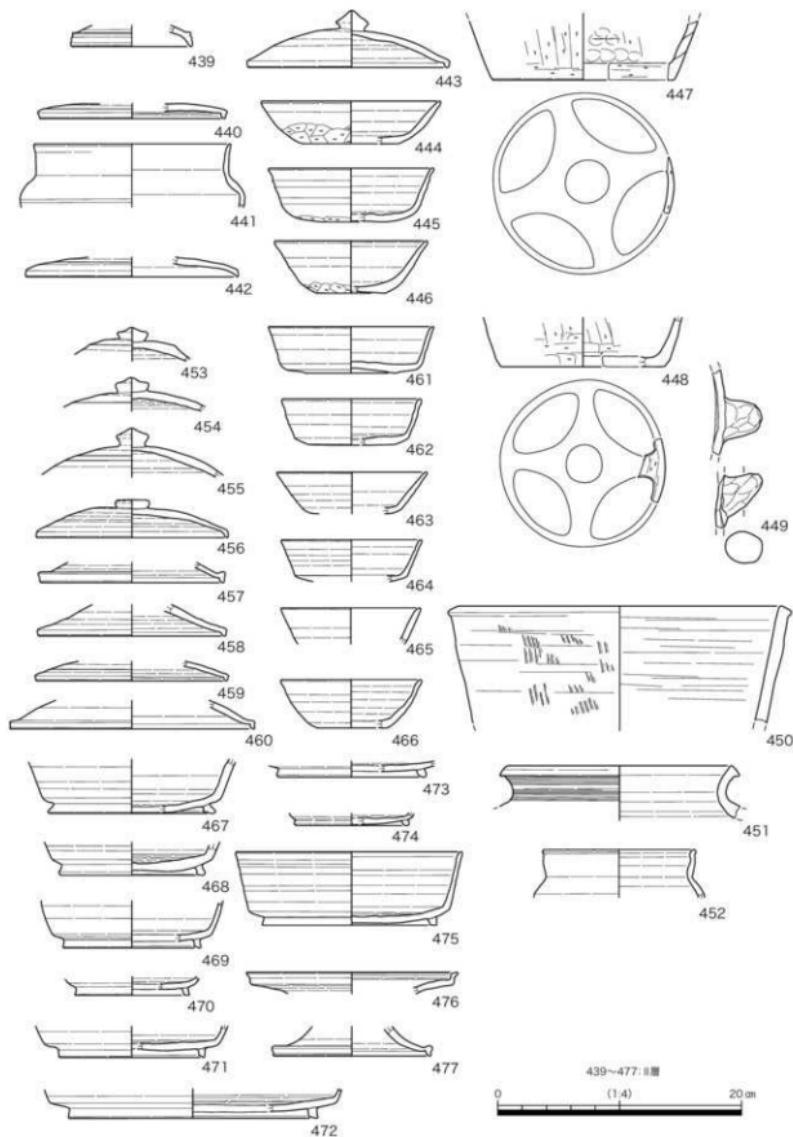


写真72 I区4期堅穴住居2

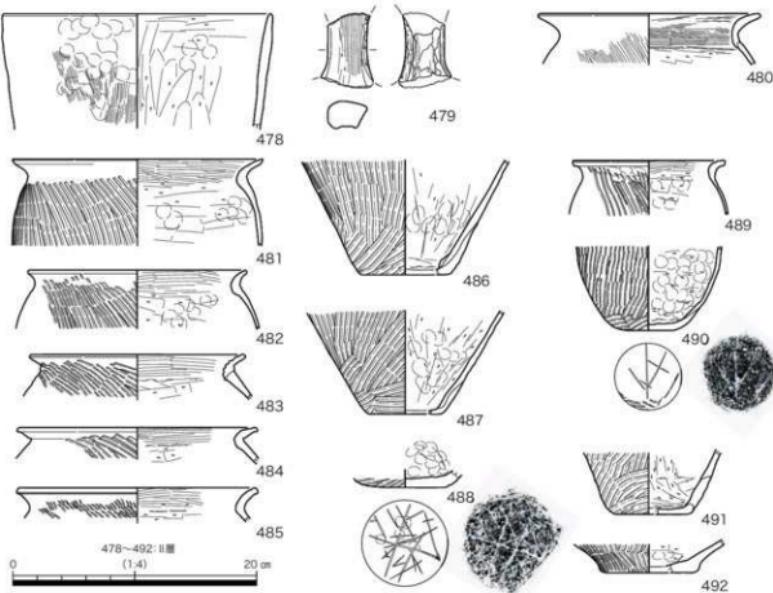
1 : SB01全景 2 : SB01遺物近景



第188図 I区古代出土遺物実測図1 (1:4)



第189図 I区古代出土遺物実測図2 (1:4)



第190図 I区古代出土遺物実測図3 (1:4)

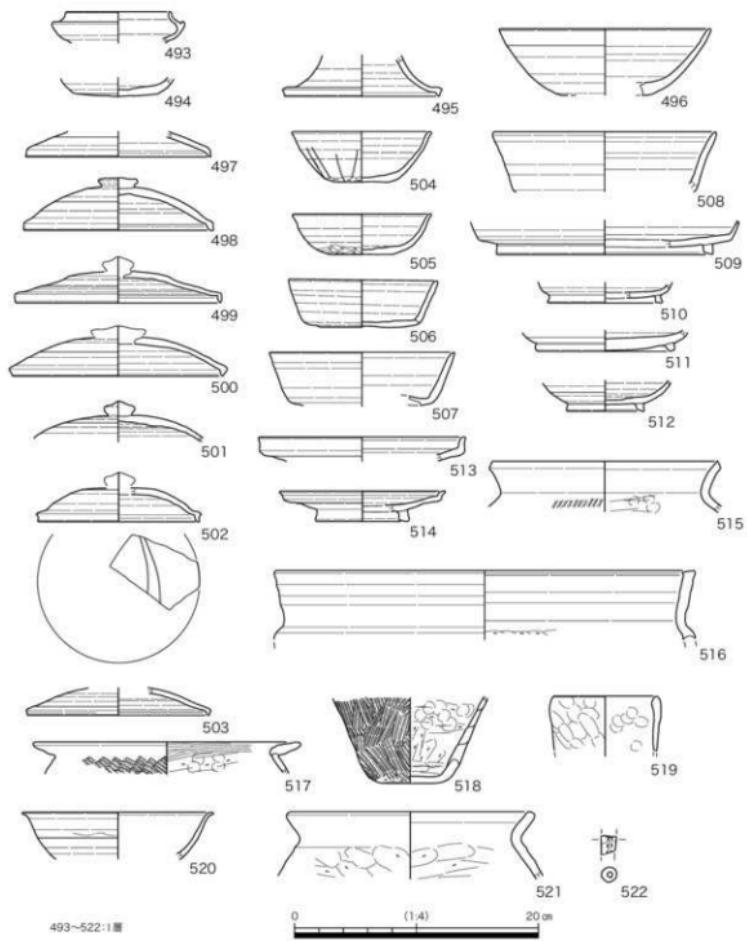
480～492は漁尾型甕である。480は緩やかに外反する口縁部、口縁部内面と体部外面の細かいハケ調整を特徴とし、平底と思われる。近隣の遺跡では清須市清洲城下町遺跡SB63などに類例が求められ、8世紀前半に相当する。その他の漁尾型甕(481～492)は8世紀後半に相当する。488・490の底部外面には木葉痕に似せた線刻がある。492は壺状の器形を呈する。

その他古代の遺物

493～522はI層中あるいは中世の遺構に包含されていた古代の遺物である。493は岩崎17号窯式の杯、494は同窯式の無台杯、496は高藏寺2号窯式の碗で、それ以外の須恵器は鳴海32号～折戸10号窯式に対比される。504は体部外面下半に、ごく細い4条の線を刻む。516は大型の鉢で、体部に環状の把手が付されていたと考えられる。517・518は漁尾型甕、519は製塙土器である。520は黒窯90号窯式の灰釉陶器碗、521は土師器甕でおよそ9世紀後半に相当する。

金属製品生産関連

その他、541・542はII層中から出土した鉄滓で、8世紀後半までに時期が限定される。同層中に包含される遺物は、明らかに8世紀後半の遺物が多いので、鉄滓の帰属時期も同じ時に求められる可能性が高い。



第191図 I区古代出土遺物実測図4 (1:4)

中世

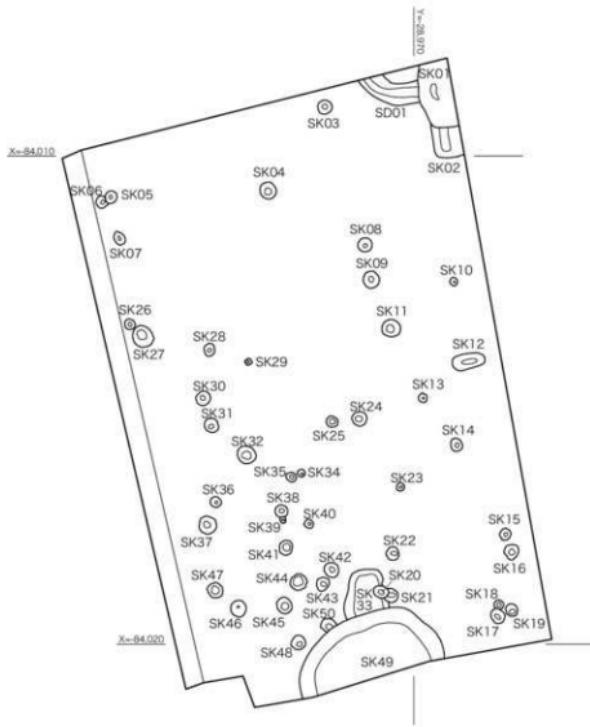
小土坑群

II層上位となる1面において、中世の小土坑を多数検出したが、掘立柱建物を復原するまでは及ばなかった(第192図)。523～527は各土坑から、528～531はI層中から出土した中世陶器で、523～526・528・529は尾張型第5型式の山茶碗、530は尾張型第6型式の山茶碗、527・531はそれぞれ瓶頬、尾張型第5型式の山茶碗を転用した加工円盤である。これらの遺物から、土坑

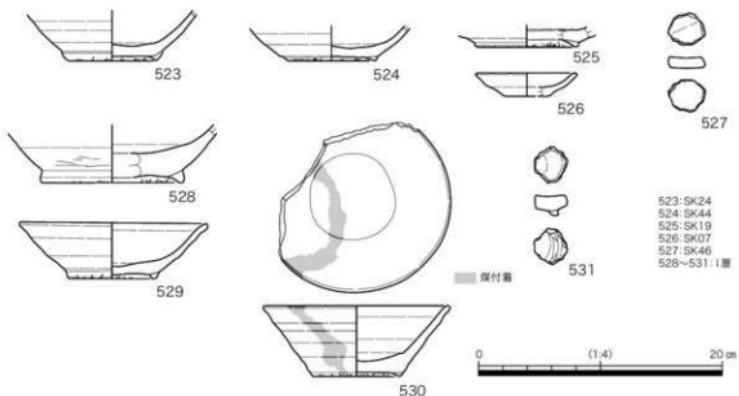
出土遺物



写真73 I区中世遺構全景



第192図 I区中世遺構図 (1:100)



第193図 I区中世出土遺物実測図 (1:4)

群の帰属時期は12世紀後半～13世紀前半に求められる。その他、I層中からは砂質凝灰岩製の仕上げ砥石(547)が出土した。

I区は鉄製品。金属製品生産関連遺物のややまとまった出土が特徴的である(第194図)、ここでまとめて報告することとしたい。

有袋鉄斧(532)は鋒の固着が著しく、図化には難がある。袋部が完全に密着しているためか、閉じ合わせを確認することができない。出土状態から、松戸戸口式、5世紀前半に帰属することが判明する。533は鉄製刀子の茎部で、中世以降に帰属する可能性が高い。

534は縦羽口の先端部分で、先端から黒色、灰白色に熱変化する。被熱前の色調は橙色で胎土は均質である。535は砂粒をほとんど含まない精良な粘土によって成形された粘土塊で、分削破砕された2片、45.3gが出土した。一片には平滑な面が確認され、多角柱に近い形状が推定されることから、鉄型片とした。類似した形状の粘土塊は、一宮市伝法寺本郷遺跡D区、同八王子遺跡においても確認されている。出土状態からは古代～中世のいずれかの時期に帰属すると判断されるが、伝法寺本郷遺跡などの諸例から、古代、8世紀後半の可能性がより高いと思われる。

536～545は鉄滓で、いずれも小さく生成する産状から、鉄素材または鉄製品を加熱鍛打する作業時に排出したものと思われる。536は縦羽口が溶解した黒色ガラス質が上面全体に溶着する。黒色ガラス質の表面は滑らかで光沢がある。SB08出土で7世紀前半に帰属する。537・538も黒色ガラス質が上面に溶着した鉄滓で、下面には砂粒が固着する。539・540は、縦羽口が溶解した黒色ガラス質で、同じく表面は滑らかである。537～540はSB02出土で8世紀後葉に帰属する。541・545は分削、破砕された小型の楕円形滓で、下面には炉床土が固着する。544は上面が多孔質となって生成する。541～545は主としてII層から出土した資料で、帰属時期は7～8世紀と推測される。

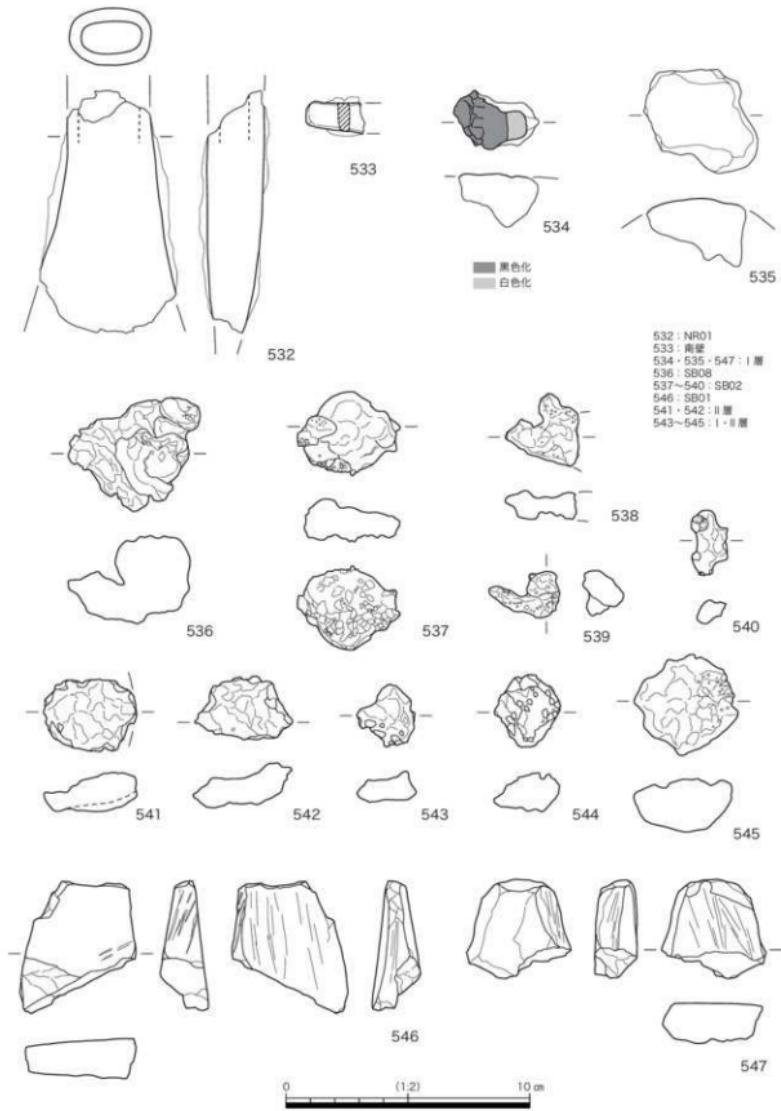
546・547は砂質凝灰岩製の仕上げ砥である。546はSB01出土で、8世紀後葉、547はI層出土で中世以前に帰属する。

金属製品生産関連
有袋鉄斧

刀子
縦羽口
鉄型?

鉄滓

砥石



第194図 I区鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図 (1:2)



写真74 I区古代・中世出土遺物



写真75 鉄製品・金属製品生産関連遺物・石製品

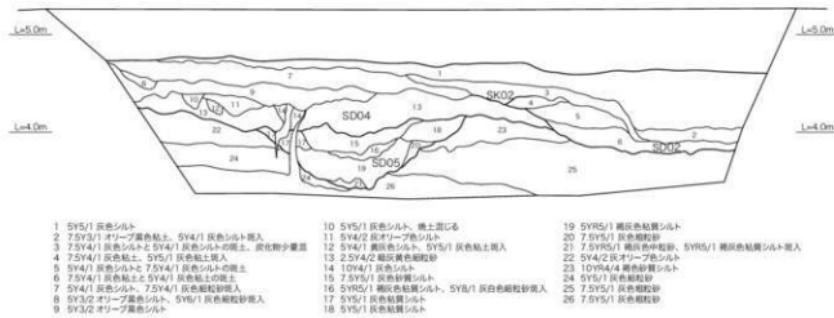
(11) J 区

J 区では灰色シルト層上位において、同一地点で連続して掘削された溝 SD01 ~ SD05などを検出した(第195~197図)。灰色シルト層はIV層に対応するとも思われるが、確実ではない。灰色粗粒砂の下位には粗粒砂が堆積し、同層中において、部分的な遺構・遺物の有無確認を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。粗粒砂層より下位の堆積層の確認は実施していないので、古墳時代以前の遺構・遺物の存在については不明である。

出土遺物はごく希薄であったものの、層序関係から、SD05、SD04 が古代、SD03 と方形土坑 SK01 (SD03 と同一面において検出)、平行する SD01・02 が近世～近代に帰属すると考えられる。

層序と検出遺構

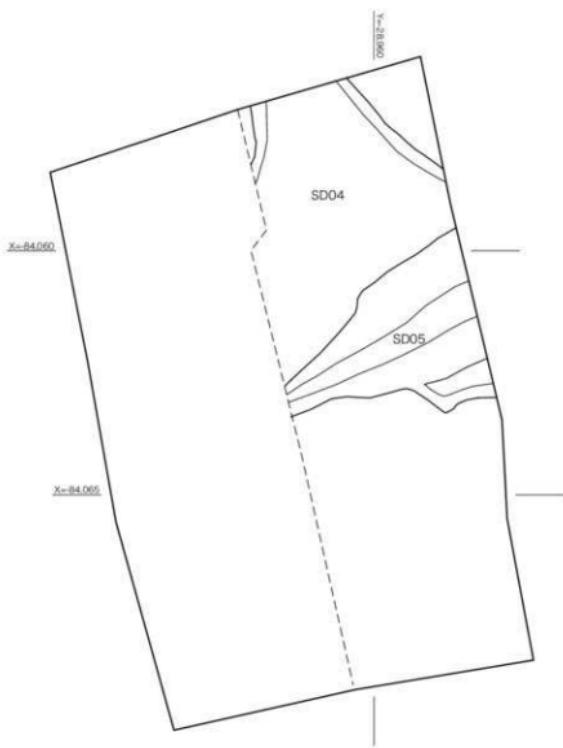
出土遺物



第195図 J区東壁土層断面図 (縦1:50/横1:100)



写真76 J区東壁土層断面

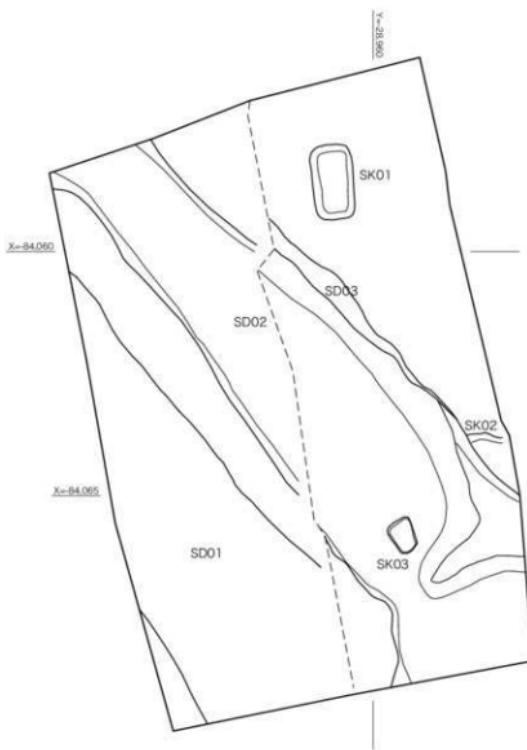


第196図 J区古代遺構図 (1:100)



写真77 J区古代／近世遺構全景

1：東半古代遺構全景 2：東半近世遺構全景

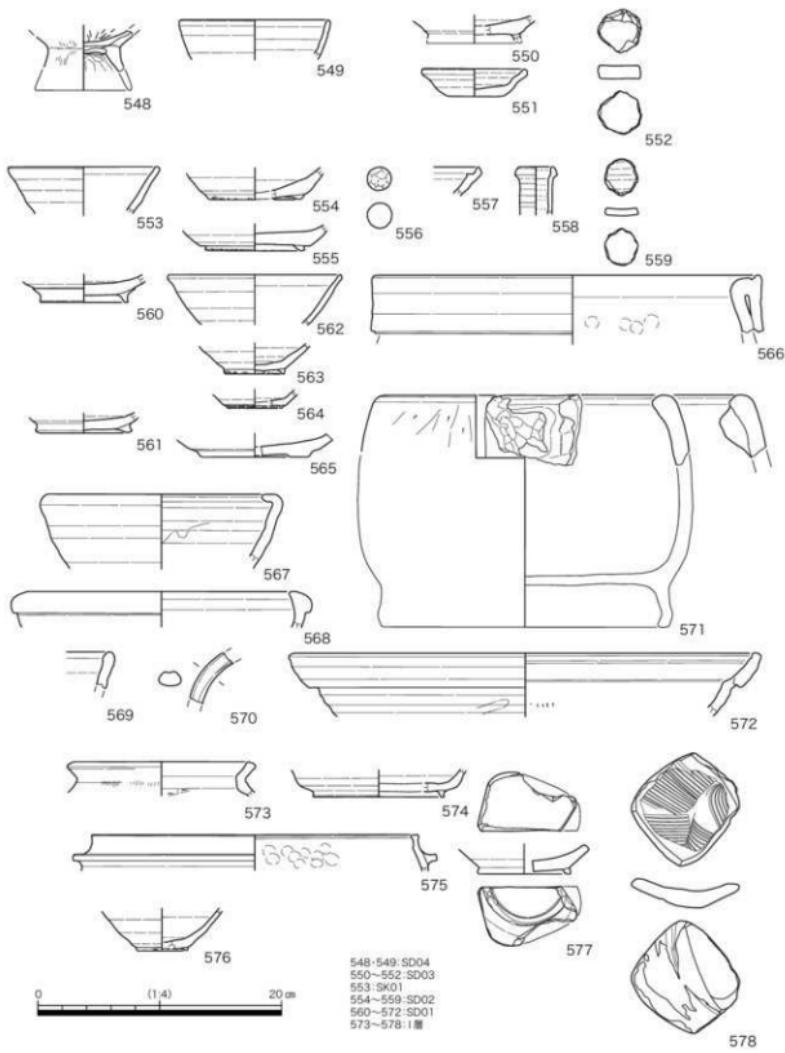


第197図 J区近世～近代遺構図 (1:100)

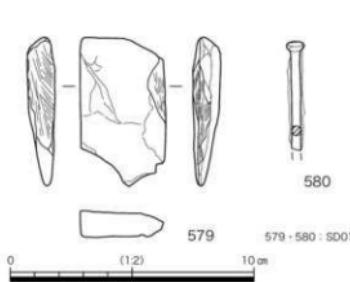


写真78 J区中世～近代遺構全景

1：西半近世遺構全景 2：西半近代遺構全景



第198図 J区出土遺物実測図 (1:4)



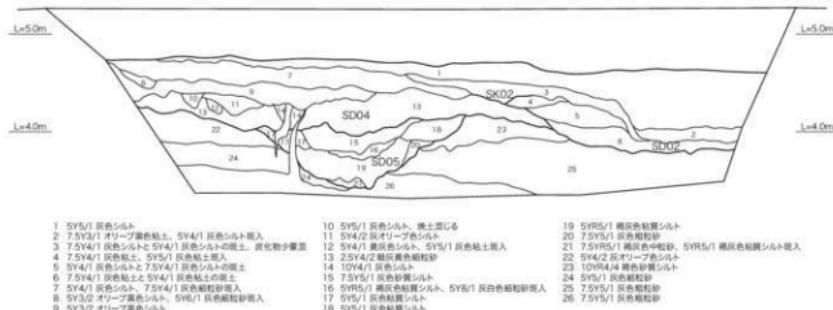
第199図 J区出土石製品・金属製品実測図 (1:2) それぞれ利用した転用瓶具である。

(12) K区

K区ではⅠ層に対応する暗灰黄色シルト層の上位で近世～近代の遺構、同層の下位で中世の遺構を検出したが、表土以下の各層は暗灰黄～黒褐色を呈していて、土壤が還元状況下にあったような状況を示していた（第200図）。

近世～近代の遺構は、南北に通じるSD01など、用水路とそれに関係する遺構を検出したのみで、その下位においても中世以降と推定される土坑（SK01～07）を検出したのみである（第201図）。出土遺物としてもⅠ層中から出土した東濃型大烟大洞窯式の山茶碗（581・582）、大洞東窯式の山茶碗（583）、古瀬戸後Ⅱ期の天目茶碗（584）などの中世陶器がわずかにあるにすぎない。

暗灰黄色シルト層の下位には灰色粘土層が厚く堆積していることを確認し、わずかに須恵器などの包含を確認したものの、激しい湧水によって、面的な調査は断念せざるをえなかつた。

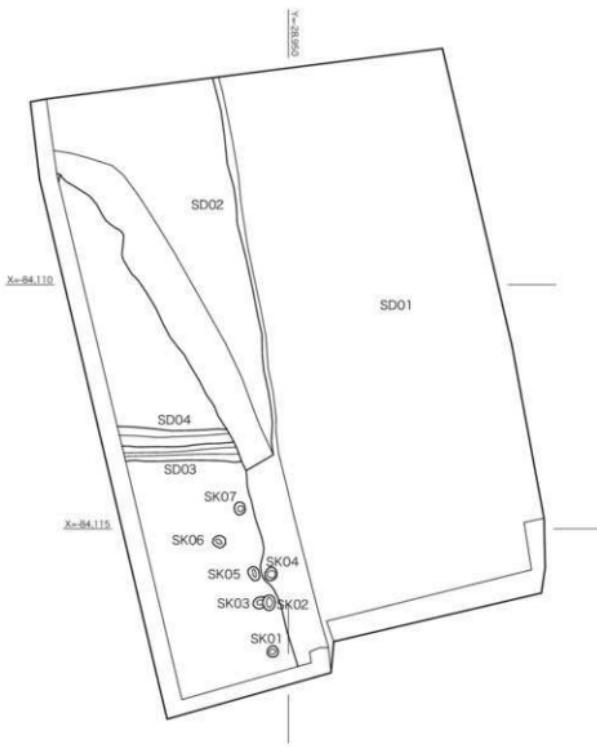


第200図 K区西壁土層断面図 (縦1:50/横1:100)

層序と検出遺構

近世～近代

出土遺物

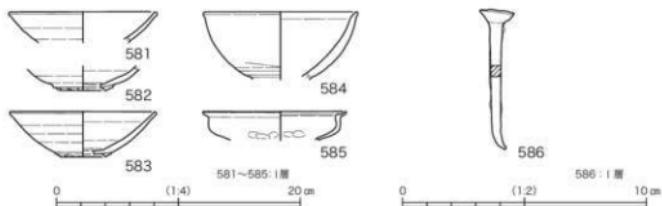


第201図 K区近世～近代遺構図 (1:100)



写真79 K区近世～近代遺構／土層断面

1：近世～近代遺構全景 2：南壁土層断面



第202図 K区出土遺物実測図 (1:4/1:2)

文献

- 橋崎彰一・赤堀孝正1983「猿投室の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(III)』愛知県教育委員会
 赤堀孝正1989「古墳時代の猿投室」『第6回東海埋蔵文化財研究会 断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会
 赤堀次郎1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財团法人愛知県埋蔵文化財センター
 城ヶ谷和広1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 財团法人愛知県埋蔵文化財センター
 城ヶ谷和広1991「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」『年報』平成2年度 財团法人愛知県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐1991「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
 宮原健司編1991「大體遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 財团法人愛知県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐1991「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
 遠藤才文編1993「名古屋城三の丸遺跡(IV)－愛知県警察本部地點の調査－」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集 財团法人愛知県埋蔵文化財センター
 赤堀次郎1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財团法人愛知県埋蔵文化財センター
 中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
 藤澤良祐1995「瀬戸古窯跡群Ⅲ・古瀬戸前期様式の編年－」『財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯 財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 赤堀次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 財团法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
 薩山誠一他2002「八王子遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 財团法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター2002「江戸時代の瀬戸窯」